尋常小學讀本卷五に出てゐた水のたびに、筆を加へたものである。所謂擬人體の文章であつて、雨水の一滴であつたが、山から谷へ、谷から瀧へ、それから平野の川となり、遂には海にはいる迄の經過を、物語體に、自叙した文である。尋三頃までの子供は、此の態度の文を悦ぶし、又水が話すことを何等の不思議を持たずに迎へるものである。

指導の要點

趣味深い水の身の上物語を讀んで居る間に、雨の一滴が、どんな順序をへて、海水となつてゐるかを了解させ、又單に物語としての理會だけでなく、河流に對する知識を深め、地理的基礎觀念を培つてやる語句右からも左からも、おひ〳〵仲間が集つて、とつぜん、かうして、はてもない、の學習指導をする。

指導上の注意

1 物語る水自身の感情氣分を活かして髣髴させるやうに讀ませる。
2 科學的取扱へをさける。
3 遠足に於ける登山等と連絡させる。
4 綴方と連絡させる。

十六　大　川

要　說

すつきりとした、實によい叙景詩である。尋二以下では、此の種の作品は殆どなかつた。尋三になると、流石は詩迄發展したと覺える。場所や周圍は、讀本の挿畫が十二分に現はしてゐる。說明の要もあるまい。即ち目にはいる工場、えんとつ、鐵橋、川舟、どこにもある組合せで、別に珍しいとか、美しいとか、又藝術的だとかいふ感じはないが、川の面に映る情景、それの詩化されたものは、實に傑作である。此の詩によつて挿繪の光景が一そう美しく見えて來る、第一齣は工場の煙突のかげをうつしただけであるが、實によく摑んでゐる。韻律のすべりと、ひびき、よく出來てゐる。第二齣は川舟を中心とした敍景である。第一齣より更によい、言葉の辷りと響きの快味は第一齣以上である。第三齣は鐵橋を中心とした敍景、前句に對應して、變化を見せ、詩形をかへたりして、妙趣あふれる。

指導の要點

詩の句に現はれた、工場、煙突、川舟、船頭、鐵橋、汽車等の影のゆらめきの情景を想像させ、韻律の持つうま味を十分讀讀させる。

文　宇　工、場、樹の學習指導、
語　句　工場、鐵橋の學習指導をする。

指導上の注意

1 リズムから來る響の快感を失はぬやう、ゆるやかに讀ませる事が肝要である。
2 唱歌科との連絡をはかる。

十七・クモノス

要　說

一人の兒童が、二階のまどから何氣なく、外を眺めてゐると、一匹の大きな鬼ぐもが、目の前にぶらさがつて來た。その蜘蛛がすを作り始じめる。其の行動を、見ゆるがまゝに寫した文章である。兒童がある事實、事件を觀察して記述した態度の文である。したがつて、この立場から眺めると、生活文章だともいひ得る。又巢をつくる蜘蛛の行動を、時間的にうつした文であるが、その觀察のこまかなこと、描寫の精細なことは、敬服する。かうした理科的事項の表現は、正確精細に走るの結果、乾燥無味に陷り易い。それを趣味化して讀者の注意を終りまで持ちつづけて行つた點は、蓋し上々の文章だといひ得る。

指導の要點

此の文を通して、蜘蛛の行動を讀みとらせる。そして、自然物に對する關心と興味を持たせる。かくて自然界に對する眼を開いてやる。又讀む事と平行して、昆蟲蜘蛛に對する智識を深めてやる。猶事實を正確に、精細に書いた文を、たしかに讀みほどいて行く力を高め、やがては、科學的文章を讀破する素地を培つて行く。

文　字　階、匹、絲（糸）、糎、米、柿、傳、安の學習指導、

語　句　鬼グモ、雨ドヒ、空中ニタヾヨツテ、シキリニ、傳ハツテ、タドリツク、タルンデ居タ絲、の學習指導をする。

指導上の注意

1本文は正確に明瞭に讀ませる事が肝要である。

2科學的取扱へをさける。

3自然界觀察との連絡をはかる。

4七十七頁の糎は、センチメートルと讀む。

今後單にセンチといふ場合には假名を用ひ、センチメートルといふ場合には糎を用ひること。

十八　夏の午後

要　說

夏の午後に於ける一兒童の行動を書いた文章である。作者はいふまでもなく、挿繪に出てゐる子供である。生活文章としてよく出來てゐる。殊に嬉しく感ずるのは、子供の行動、あたりの景物に、燒けつくやうな暑い氣分のにじみ出てゐることである。それから、この課は口語常體の文章である。散文で全文常體を用ひたのは、此の課が始めてである。特に注意すべきである。

指導の要點

一兒童の夏の午後の生活を書いた文章表現を通して、此の子供の行動を讀みとらせると共に、行動や周圍の景物にあらはれてゐる、暑い氣分といふものも味讀させなければならぬ。又綴方に力强いヒントを與へ、文字表現といふ上に暗示を與へて、利用する事も亦忘れてならない。

文　字　夏、僕、相、井、暑、益、蟲、顏、唉、誰、帽、の學習指導。

語　句　あぶらぜみ、木のみき、益蟲、日まはり、一もくさん、等の學習指導をする。

指導上の注意

1文の作者たる子供の心持がありのまゝによく出てゐる點を生かして表現するやう讀ませる事が大切である。

2綴方と連絡をはかる。

十九　日記

要　說

日記文が始めて出された。教材の類別からいくと、勿論生活教材であらうが、卷四までは一回も日記文は出なかつた。こゝにも子供の生活の擴充がほの見える。八月一日から八月六日までの六日間を採つたのは如何なる理由が存するのであらうか。今迄の讀本では、手紙でも日記でも、日附を休暇中に求める事は敢へてしなかつた。それは學習の季節と合はせる便宜上から考へたのであらう。今回は其の逆を行つた。色々の理由が推測せられる。其一は、夏休はどこの學校でも、日記をつけさせる。課題として殆ど定石のやうになつてゐる。此の生活と合はせる爲に夏休暇中に求めたではあるまいか。其二は、尋三ぐらゐになると、日記をつけやうとする欲求が芽生えて來る。殊に夏休となるとそれが一段と强まる。そこでこの心に對して滿足を與へ、參考資料を提供するの意味で、八月劈頭に題材を仰いだものと考へられる。日記文は敬體よりも常體が多い。それが

亦自然である。この課もその自然さを現はしてゐる。全文、常體で出て來たのは夏の午後が第一回目、此の課が第二回目である。常體での表現になれさせ、又それを用ひ得るやうに指導する上から見て、特別の考慮を拂ふねうちのある教材である。

指導の要點

此の日記を通して、子供（作者）を想像させると共に、日記のつけ方をさとらせ、日記をつける趣味を高めてやる。猶此の教材の背後にひそんでゐるラヂオ體操の實行、手工製作の奬勵、端書文の書き方――にふれさせることは、生活指導の上から見て、忘れてならない。

文字　記、日、曜、晴、起、凉、木、砲、東、雷、丈、來、釣の學習指導。

語句　日記、草むすり、水鐵砲、丈夫、さかのぼつて、等の學習指導をする。

指導上の注意

1其調子からいふと、正確明瞭を主とした普通文の讀み方でよい。

2夏休の日記との連絡をはかる。

二十　こほろぎ

要說

月は天心にかがやいて雲一つない。ありとあらゆる晝間の活動は、休息の世界にはいつて靜かな〳〵夜である。家の中もしたえて、實にひつそりしてゐる。折から響く、こほろぎの聲、一段々々とさえて來る。そして、靜寂の中に詩情をたゞよは音てくる。かうした氣分とこほろぎに對する優しい心を歌つたのが此の詩である。第一節は、ころ〳〵と鳴くこほろぎの聲、靜かな家の中、人の心に迄しみいるこほろぎの聲をうつしてゐる。第二節は、今迄聽き入つてゐた作者が、そつとあかりを近寄せて見る、こほろぎの姿をうつしてゐる。第三節は、作者のやさしい心、溫い愛の心が、こほろぎに投げかけられてゐる。

指導の要點

此の詩を誦讀せしむることによつて、月明の夜、靜かな家の中でこほろぎの鳴いてゐるさまと、作者のこほろぎに對するやさしい心持とを想像せしめ、詩のもつ韻律的快調を味得させたい。

文字　消の學習指導

語句　ころ〳〵、のぞいて見れば、消したれば、の學習指導をする。

指導上の注意

1切り過ぎてある讀點を省略して、リズムから來る快調を現はすやうに讀ませる。

2唱歌科との連絡をはかる。

二十一　天孫

要說

此の課も亦、今迄の讀本に出なかつた材料である。皇祖の神勅は我が國體の大本をなすものであつて、萬邦に比類なき所以もこゝに存する。先づかゝげて幼童の腦裏に刻しやうとする用意は悅ばしい。續いて三種の神器を授け給ふ場面を出し「この鏡は、われと思つて大切にせよ。」の仰言を敍してゐる。第二課の參宮だよりの文と相呼應してゐる點は見逃してはならない。降臨途上の出來事も面白い。古事記にも日本書紀にも出てゐるが、本文は蓋し後者によつたものである。

指導の要點

此の文を讀ましむる事によつて、天孫降臨の次第を知らしめ、萬古無比の國體の尊嚴なる所以を悟らせる。而して趣味ある神話としても味得させ、之を題材として言語發表の修練につとめる。

文字　孫、治、汝、皇、御、位、切、下、事、相、問、承、降、峯、の學習指導
語句　天孫、子孫、治むべき國、御鏡、御玉、御劍、先發の者、下界、へうきん、承つて、の學習指導をする。

指導上の注意

1 莊重に謹嚴に心して讀む事が大切である。
2 自然神話の取扱へをさける。
3 適當な補說を加へる。
4 一天の岩屋との連絡をはかる。

二十二　犬のでがら

要　說

九千萬の我が國民の緊張の的となつた滿洲事變から材料を採られた。我が國際非常時は、こゝに火蓋を切つたのである。擧國一致、聯盟を脫退し、敢然として焦土外交を振りかざしたのも、こゝに因する。兒童にも、その一端にふれさせやうとの用意が存するのではあるまいか。題材の文は現實話で、子供が親しむあの犬が身を捨て、御國の爲につくしたといふ悲壯な物語である。之を讀むものは懦夫と雖も皇國の爲に奮起するであらう。それだけよい題材である。此の文章のねらつてゐる中心點は、申す迄もなく、軍犬金剛・那智の忠烈なる働きである。この事實を以て、讀む者に深き感激を與へやうといふのが敍述の大精神であらう。だが、それに止めて置くばかりでなく、滿洲國の健全なる發達は、我が國にとつて暫くも念頭からはなしてならない大問題であることを、これからの兒童にも、頭に刻みつけておく必要がある。又忠犬の事實に附帶して、其背景をなしたものは、この事變であるといふことを授け、併せて軍用犬に關する智識を啓發する。

指導の要點

滿洲事變の劈頭、軍犬金剛・那智が、皇軍に從つて美事に其任務を果し、忠死したる物語を誦讀させて、兒童に感激を與へたい。而して此の物語に附帶して、滿洲事變の勃發の事情、軍用犬の任務等を知らしめ、その常識を高める。

文字　我、犬、戰、陣、幾、淚、實、の學習指導
語句　滿洲事變、最初、傳令、とつげき、死物ぐるひ、陣地、かゞげた、とゞろく、をり重なつて、死がい、血まみれ、淚ぐみました、甲號功章、等の學習指導をする。

指導上の注意

1 勇壯にして又悲壯なる物語であるから、文に流れて居る感情の動きも亦著しいものがある事に留意して讀む事が大切である。
2 百三頁上方の挿畫は、滿洲事變當時の寫眞ではない。

二十三　電　車

要　說

人情美をあらはした生活教材の文章である。大人（男子）が子供に對し、子供が老婆等に對し、互につくし合ふ心情は、ホロリとさせられる程美しいものがある。我々も度々電車には乘るが、これ程美しい情景を見ることがない。表現も亦實によい。作者は云ふまでもなく子供（弟の方）である。この文は大觀すると二つの大きな山が目に映ずる。その一はよそのをぢさんを中心とした人情美であり、その二は二人の子供を中心とした人情美の發揮である。此の二つの人情美は、決して孤立してゐない。他人の溫情に感激した兄弟は、次には自分等で實現して、老婆等を感激させる機構になつてゐる。汽車・電車等の中に於ける公衆道德は說かれてゐるが、仲々實行は六かしいものをこの課は生きた手本を示してくれたものである。公衆道德とか公共心とかを眞向から說かないで、感激に訴へたところは却つて非常な效果をもたらすことゝ信ずる。

指導の要點

電車の中での二つの美譚を讀ませて感激を深め、自分自身の行爲を內省せしめて公衆道德の啓培に資する。

文　字　電、席、言、表、の學習指導

語　句　ウナヅキマシタ、の學習指導をする。

指導上の注意

1修身科との連絡をはかる。

2教師の訓戒的指導をさける。

3其人情の動き・情緒の現はれを聲調に生かすやうに讀ませる。

二十四　水引草

要說

水引草に對する作者の氣持をうたつたものである。一種の敍情詩とも見ることが出來やう。第一齣は、さゝやかな赤い花を見つけた刹那の氣分を現はしてゐる。第二齣は、じつと見つめてゐる間に、わき出て來る感情を表現したもの。第三齣に至る迄には、相當時間的の隔りがある。要するに此の詩は、敏感な作者によつて感受せられた水引草の姿と、自分の心持がうたはれたものであるが、尋三に出すとしたら、程度が高すぎるの杞憂は敢へて筆者一人であるまいと信ずる。

指導の要點

詩の句を通して、作者が水引草に對して起した感情の動きを摑かませると共に、此の詩がもつ韻律の面白味を味得させる。

語　句　やつで、ふつと見つけた、水引草、等の學習指導をする。

指導上の注意

1リズムの快さを味はふ事の出來るやうに讀ませる。

2唱歌科との連絡をはかる。

二十五　二つの玉

要說

有名な海幸山幸の物語である。神話中、お伽的色彩の多分にある話である。それだけ兒童が悦ぶであらう。今迄の讀本がこれを見落してゐたのは不思議な位である。或は原作が兄神の難題の爲めに、火遠理命の龍宮行きとなり、歸國後兄神の橫暴をこらされる、そこが教育的でないとの見解から不採擇の運命にあつてゐたのかも知れない。新讀本の編者は流石は賢明な行き方をして居られる。海神より貰はれた二つの玉は惡者退治につかはれてゐる。原作などをかつぎ出さずに、讀本の筋を生かすことに努めねばならぬ。古事記の文によつて、平易化された跡明瞭である。

指導の要點

此の物語を讀ませて、話の筋をつかませると共に、描かれた場面を想像させ、その中に盛られてゐる面白味を味はせて、子供をして神話の世界に遊ばせる。更に天孫の課と連絡を保ちながら、神々が我が國土開拓に御心を注がれしことを了得させる。

文　字　魚、獸、狩、剝、知、鰐、願、仕、其、敎、此、殿、汲、案、內、樂、配、鯛、滿、面、恐、の學習指導

語　句　いかどでせう、承知になりません、ごかんべん、はたして、ため息、おれいをのべて、等の學習指導をする。

指導上の注意

1二十一天孫の課と連絡をはかる。

2速度をゆつくりと、明瞭に正確に、對話などの處は話者の氣持が現はれるやうに、工夫して讀む必要がある。

3 自然神話の取扱へをさける。
4 適當な補說を加へる。

卷六

第一章 編纂概說

序說

卷一、二が童話教材を中軸に、生活教材、韻文教材を配し、卷三、四、五が說話教材を中心に、生活教材、韻文教材等を添へたのと大體其の軌を一にして居るが、其の量に於ては著しく變つて來て居る。今までの說話教材は一卷の總頁數の半を占めて居たのに對し、此の度は全頁數の三分の一に過ぎない。中軸たるに變りはないが、量に於て著しく減少して居るのである。しかも卷四が傳說を中心とし、卷五が神話を中心として居るのに對して卷六は史譚を中軸として居るのである。科學的要求を持つと思はれる材料の出現は卷四からであつたが、卷六に於ては其の量に於て著しい增加を見せて居る。此等は兒童の心理的發達に伴つてかく教材の量に質に變化を見せたに外ならない。其の他笑話教材が提供せられ、兒童の生命たる笑ひを滿たすべく新出して居る。此の時代は記憶力の黃金時代であるから文字を習得させるに都合のよい時である。斯うした事から新出文字、讀替文字の量が著しく增して來てゐる。教材の配列に關しては、時代を追うて進み、季節に連關あり、內面的に一脈の統合發展を見せて居る。更に口語常體での表現は珍しい事では無かつたが、卷四までは韻文や童謠調の文のみに限られて散文に迄は及ばなかつた。卷五になつて散文に之を出し、卷六になると一躍增進して居る。次に平假名、片假名の使用であるが、全篇二十五課中、片假名文は僅か二課である。之は實社會の反映である如く考へられる。以上は簡略乍ら序說にかへる。

內容

說話材料は、神武天皇に始まり、時代の推移に從つて配列され、各說話には國に奉仕すると言ふ一貫した精神が流れて居る。生活教材と銘打つても、尋二迄は子供が自分の生活を表したもの、大人が子供の生活を表したものと多樣の態度で出され

て居たが、其れが一様に何れも子供が自分の生活を現す態度となつて居る。しかも文體は性別に依つて變化がつけられて居る。即ち男兒なれば口語常體、女兒なれば口語敬體と言ふやうに注意が拂はれて居る。次に農村材料が多い。家禽、小禽に對する愛の表現も多くなつて來た。韻文教材に關しては、リズムの自由さが發揮され、敍情の氣分が次第に高まつて居る。其の他の教材に於ては、兒童の生活を科學的、理科的方面に擴大しようとする要求を持つものが多い。又創作生活に暗示を與へようとして居るものがある。どの教材を見ても表現が洗練され、子供の生活さながらの感が深い。

一　文　字　形　式

舊讀本卷六に於ては、新出漢字百四十九、讀替漢字六十六が出してあつたが、本卷に於ては、新出漢字百七十六、讀替漢字九十八が出されて居る。又既刊のものに引續いて、字體が改められたもの四十餘ある。なほ本卷には上欄に掲げてある漢字の中、畫、體、歸、豐、圓に付き、夫々其の下に、画、体、帰、豊、円が括弧内に附記して有る。

二　分　量

本卷は舊讀本卷六に比し、紙數に於て約三割二分增加して居る。課數に於ては一課減じて居るが、舊讀本百八頁に對し、本卷は百四十三頁を示し、三十五頁の增加を見せて居る。又舊讀本一詰の字詰が八行十八字詰であつたに對し、本卷は九行十九字詰となつたから、之を文字數に換算すると、約五割强の增加である。

三　挿　畫

此の卷から色刷を止めて墨色となつてゐる。濃淡の配合を苦心して、可なり感じの良い物が大分見える。特に寫眞版の增加は挿繪の進歩に一大貢獻を見せて居る樣である。

第二章　各課の要說及指導の要點と注意

一　神武天皇

要　說

神武天皇御東征の餘路に於ける一挿話である。地方の雄、兄うかし兄弟に恭順をすゝめるが、兄うかしは反抗し、のみならず天皇を害し奉らんと策謀する。此處に於て弟うかしの苦衷を述べ、所謂大義親を滅すの精神と、天皇の御神德の前には少しの不正も許されぬ事を書いた物である。

指導要點

趣味ある物語として讀了させると共に、中に流れて居る弟うかしの精神に觸れさせ、國民性を自覺させる。

指導上の注意

大義名分を忘れぬ樣に扱はねばならぬ。第五段に於ける弟うかしの活動の場面の對話は、夫々異つた氣分が入つて居る。其れを見出させる。朗讀する際は語り聞かせる態度が必要である。

語句「御進軍、八咫烏、勢力を張る、かぶら矢、意外、心ばかり、まことしやかに、おとし、いさめる、氣を呑まれて、惡だくみ、すご〳〵、最後をとげる」等の意義用法を知らせる。

文字「進、勢力、張、仕、放、參、建、許、働、招、迎、鳳、亡、降參」等の讀方、書方、意義、用法を授ける。

要　說

親しい從妹同志が祭に招く、招かれると言ふ仲の良さを物語る手紙文である。前文はかね子の感冒の工合を尋ねて居るが、之はかね子を案じて居る同情の現れである。第二段に於ける返事も本當に行きたいと思ふ心を現して居る手紙である。

指導要點

手紙文である。其の要件をつかませると共に、二人の間の溫い交情を味得させる。第二として、人を招く手紙及び返事に對する、基礎的知識を與へる。

指導上の注意

斯う言ふ生活文に對しては、之を機緣に子供自身の生活を反省させたい。今までの手紙に關する教材を振り返り、其の系統を明かにし、手紙文の指導をなす。

語句「招く、乘合自動車」等の意味を知らせる。

文字「祭、店、母、返事、姉」等の讀方、書方、意義、用法を授ける。

三　村　祭

要　說

年和に治る大御代に、氏神の恩惠に感謝の念を捧げ、村中擧つてお祭をする、鎭守の森にひとく笛大鼓の音に躍る心を表現したものである。

指導要點

詩の句に現はれた、村祭の情景、作者の氣持を想像させ、韻律の持つうま味を味はせる。

指導上の注意

語句「鎭守の神樣、豐年滿作、御代」等の意味を知らせる。

文字「今日、笛、作、代、惠」の讀方、書方、意義、用法等を知らせる。

四　磁　石

要　說

兒童の生活事實の一斷面を記述したものである。磁石が實生活に役立つ事から、磁石の性質を、平明に變化を付けて說明して居る。知的の說明文だとは言へないけれども、說明的の表現も多分に加味されて居る。

指導要點

一兒童の行動を讀み取らせる間に、磁石の働を理解させ、科學的方面へ眼を向ける基礎づけをしてやる。

指導上の注意

前課と一脈の連絡を持つて居る事を忘れてはならぬ。遊びの間に、科學的方面に發展させようと言ふ編者の用意を、見逃してはならぬ。

語句「縫物、銅、鐵、ニツケル、眞鍮、アルミニウム、砂鐵」等の意義を知らせる。

文字「縫、板、釘、銅、砂、粉、砂」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

五　稻　刈

要　說

此の季節にふさはしい農村の生活材料である。文は一男兒の行動を中心として發展して居る。即ち學校から歸つて來てからの、作者の行動を中心として、稻刈の概觀、一家の親しさ等を綴つたものであるが、一課を通じて農村生活の愉悅と尊さの溢れた文である。

指導要點

此の文を讀むに依つて、文中に現はれて居る作者の行動と、稻刈時の情趣を味はせたい。

指導上の注意

作者は、等三位と想定せられるが、よく稻刈の手傳、弟のお守につくして居る。眞正面から教訓する必要は無いが、其れとなく觸れさせる。又、綴方への發展も考へたい。

語句「束、一人ぼつち」等の意義を知らせる。

文字「稻刈、敷、遊、飛、裏、廻、飼、圍、言、運」等の讀方、意義、用法を知らせる。

六　日本武尊

要　說

川上武を御征伐遊ばす次第と、草薙劒の由來を併せ述べた文である。劈頭から中心人物を出し、彼の己惚と橫暴の度が加はつて來た時、美しき少女として日本武尊を出し、尊の凜然たる意氣と態度を現して居る。尊の如何なる困難をもおいとひ無く天皇の御爲、皇祖皇宗に對し奉る御務を思召されて、お働きになつた事を書いたものである。尊の御勇武が中心となつて居る文である。

指導要點

日本武尊の熊襲征伐、さては蝦夷征伐の御事績を想像させ、尊の御武勇と國家の爲、東奔西走お盡し遊ばされた御心事を偲ばしめる。

指導上の注意

舊讀本「熊襲征伐」が日本武尊と中心として、敍事の進行を計つたのに反して、新讀本は川上たけるを中心として事件の發展を見せて居る。本課に於て、敬語の特色を知らせると共に、通常語との比較をなす。

語句「熊襲、朝廷、ぞうちやう、宮殿、少女、かひ〳〵しく、上座、夜がふけて來ました、お給仕、苦しい息、仰に從ひ申さぬ、勅をかうむり、御武運、二度の大任、いたはしく、もしもの事、御勇武、うや〳〵しく、身の丈にもあまる草かねて、火打石、あやふい御命」等の意義を知らせる。

○字「從、仰、宮殿、隊、守らせ、祝、少、座、次第、給、突、苦、勅、居、出發、先、武運、任、特、授、袋、丈、勢、打、向」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

七　山羊

要　說

山羊を中心として、一女兒の行動を讀み込んだ文である。山羊に對する一女兒のやさしい氣持を中心として、柵の中の山羊の描寫。そして心に浮び出る思ひ出を書き綴つて居る。文の構造も整然として居るが、描寫も巧妙である。

指導要項

可愛らしい山羊の姿、一女兒の動作、心遣ひを讀み取らせると共に、かうした表現のうまみを味はせたい。

指導上の注意

動物愛護などの、教訓めいた事は見つからない。しかし味得して行く間に、之等の動物に對する愛といふものを、培つて行く事を忘れてならない方面であらう。本文は生々とした山羊の描寫である。綴方への連絡を取りたい。

語句「柵、乳房」等の意義を知らせる、

文字「去、停、乳、乳房、好」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

八林の中

要說

全篇を三節に分つて居る。第一節は明るい梢が詩の中心をなすもので、かさ〳〵と鳴る落葉は此の頃の林の情趣を、浮き上らせる特色である。第二節は、林の中の秋の靜かさが印象の中心で、切株に腰掛けて、其の靜かさにうつとりして居る作者の氣分も讀まれる。第三節は、眞靑な空にくつきりと浮いて居る高い梢、ふるへる小枝、さうした眼にうつる光景を歌つたものである。

指導要項

此の詩を誦讀させる事に依つて、晩秋の林の中の氣分情調を想像させ、それと共に表現のうま味を味はせる。

指導上の注意

晩秋の林の中の情景を詩にしたものであるが、其の氣分をよく現はして居る。朗讀に依つて、其の感じを汲ませ度い。

語句「かさ〳〵と、くつきりと」の意義を知らせる。

文字「株」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

九 僕の望遠鏡

要說

文は、文中に出て來る子供の生活事實として構成されて居る、子供の動作、レンズの組合せ方等、無駄なく平明によく敍せられて居る。極めて自然らしい遊びから、發明の動機を作り、遂に成功するといふ、兒童の創作生活にヒントを與へ、科學的方面に眼を開けてやらうといふ趣旨がよく伺がはれる。

指導要項

趣味ある發明物語である。一兒童が望遠鏡を發明する動機、製作の過程、實驗、成功の經過を理會させる。更に科學的方面の知識を啓發すると共に、創作生活に對するヒントを與へる。

指導上の注意

作る過程を示し乍ら、取扱はねばならぬ。但し、原理に立ち入らないで現象だけである。

語句「望遠鏡、虫めがね、發見」等の意義を授ける。

文字「机、鏡、畫(画)、紙、筒、柱」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十 神風

要說

元寇當時に於て、擧國一致悲壯な覺悟を以て國難に當つた事を物語つた文である。敵船襲來と、之に對するわが軍の意氣込船の大小を氣にせぬ燃ゆる攻擊的精神、武士のみならず、上は龜山上皇、下は百姓に至る迄、擧國一致國難にあたつた。未曾

有の國難に對し、國民が如何に悲壯な覺悟で之を撃退したかが窺はれる。一旦事あらば一死國に報いるの意氣が文を貫いて居る。

指導要點

文を通して元寇當時の有様を想像させ、六百年前に於ける、博多の沖の奮戰を偲ばせたい。そして國難にあたつて、擧國一致力の限りを盡した、祖先の忠誠を思はしめ、一旦事あらば、一死國に報いるの意氣を湧き立たせたい。

指導上の注意

祖先の心意氣に觸れしめたい。わが國未曾有の國難を補充說話なし、感奮興起させる樣にしたい。

語句「おほはれた、上陸、意氣込、少しも屈せず、大難、國難、必死のかくご、神のおぼしめし、海はわきかへつた、こつぱみぢん」等の意義を知らせる。

文字「沖、押、船、濱、上、垣、船、小、如き、肩、屈せず、帆、相、退、難、防、全く、當、數」等の讀方、書方、意義用法を知らせる。

十一　軍　旗

要　說

軍旗は軍隊に於て、御眞影にも比すべきものである。此の軍旗に對する皇軍の信念、もつとおし擴げて言へば、國民の信念信仰と言ふべき氣持をうたつた詩である。第一節は、天皇陛下御親ら授け給ひしものなる事をうたつて居る。第二節は皇國の爲めに驀進するしるしこそは、軍旗なる事を現して居る。第三節は「ほまれの軍旗」を中心とし、第四節は「敬せよ軍旗」が中心となつて居る。

指導要項

國民の軍旗に對する信念、信仰、覺悟、決心等を理解せしめる。

指導上の注意

軍旗の尊さを理解させ、軍人の奮戰苦鬪敵軍を滅せずんば止まぬ決意を知らせる。又朗讀には、重々しい嚴かな力强い感じを持たせて指導なす。

語句「かしこくも、御手づから、授け給うた、皇國、まつしくら、拜せよ」等の意義を知らせる。

文字「陛下、給、尊い、拜」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十二　牛　か　へ

要　說

農村の生活材料を、子供の手をかつて表現したもので、牛かへの決心がつく迄、金の問題で、まとまらない點、どこの農家にもありさうな情景である。本課の中心をなすものは一家揃つて牛に對する優しい氣持である。

指導要項

文を通して、牛かへの有樣を讀み取らせると共に、中に流れて居る牛に對する優しい心やりを、偲ばせたい。

指導上の注意

動物愛護等を言はずして、かうした文を通して、兒童に感得させたい。又綴方へのヒントを與へ、かうした生活事實を綴ら

せて見る。
語句「手にをへない、ばくらう、一たん」等の意義を知らせる。
文字「體(体)、牡、牝、角、形、歸(帰)、俵、豐(豊)、煮、同、門」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十三　笑　話

要　說

笑は人生の慰安、人間苦の慰藉劑である。一の笑話は矛盾だらけである。「自分の矛眉をそつちのけにして、議論を進めて居る。しかも議論を進むれば進むる程、自縄自縛に陥つて居る。大分まぬけて居る其の人が躍氣になつて居る態度が、一段と笑ひを強める。二についてお婆さんの生眞面目な、勿体ぶつた理由づけ「大は小をかねる」金物屋の主人の意想外の計算の仕方に、笑がひそんでゐる。

指導要點

讀ませる事に依つて、大いに笑はせたい。そして笑ひの潜んで居る所を、表現に即して吟味させる。

指導上の注意

一の笑話の方は、餘程知的である。程度を低くしてやらなければならぬ。
語句「ひづめ、大は小をかねる」の意義を知らせる。
文字「笑話、鹿、鍋、圓(円)、迷、拂、主」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十四　千　早　城

要　說

千早城を死守して、百萬の大軍を散々に惱ました忠誠無比の楠木正成の、奇智縱横、むしろ神品とも言ふべき軍略のうまさを書いた文である。正成の叡智、機智は簡潔な中に残りなく書いてある。百萬の賊軍が漸次潰え去る渦卷の中心に千早城があり、其處に正成ありと思ふ時、此の一篇が簡潔なれ共、如何に雄大であるか伺はれると思ふ。

指導要點

千早城を死守して、百萬の大軍を散々に惱ました忠誠無比の楠木正成は、又神の如き智謀をもつて敵軍を惱ました事を理解させ、且感銘を持たせる。

指導上の注意

正成は歴史的事實上から大切な人物である。十分に教へたい。殊に教科書では、正成の智謀が主になつて居るが、彼の誠忠は忘れてはならぬ事である。
語句「たてこもる、けはしい、やぐら、これにこりて、水をたやして、うばつて、惡口、ひやうらう攻め、ときの聲、もてあます」等の意義を知らせる。
文字「千早城、山、賊、附、惡口、餘、討、形、幅、我、危、油、注がせた、傷」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十五　た　こ

要　說

風をあげて愉快に遊ぶ正月の生活を歌つたものである。其の流暢な中に生々發展的な、豪壯な氣分が出て居る。

指導要點

此の詩を誦讀せしめて、描かれた場面を想像させ、氣分情調を味はせる。

指導上の注意

作者を求めて行けば、揚げて居る子供では無い。「一つ二つとかぞへて居れば」と言ふ事で客觀視されて居る。大体氣分もよく出て居るが、どうかすると子供の生活と、離れたがるやうな氣持がある。

七七調の詩であるが、民謠に似た一種の波の樣なリズムを有して居るから、輕快に讀ませたい。

語句「ゑだこ、字だこ」の意義を知らせる。

文字「港、笛」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十六　雪の夜

要說

雪のしん〳〵と音も無く積る夜、其れを題材にして、作者の生活をまとめたものであるが、靜かな雪の夜の氣分がよく描き出されて居る。火鉢にあたり乍ら新聞を讀んで居る父、縫物をして居る母、赤ちやん、それに作者、共に靜りかへつて居る所が如何にも雪の夜らしい。そこへ點出された時計のセコンド、鐵瓶のたぎる靜かな音、雪の夜の室內の空氣に一脈の暖味を添へて、一種の懷しい情景にして居る。

指導要點

此の文を讀ませる事に依つて、雪の降る夜の情景を味得させる。

「新聞をよんでゐられる」「縫つて居られる」等の敬語について注意する。

語句「しゆん〳〵」「ひつそり」の意義を知らせる。

文字「鉢、聞、合、團、窓、燈、線」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十七　雀の宿

要說

文は雪の朝の景觀に筆を起し、餌を求めて飛ぶ小鳥に對する同情から、自家の裏庭にある雀の宿の描寫に入つて居る。一篇を通じて、人によく馴れた雀、かはいらしい雀が描れて居り、隨つて雀達の樂世界が、如實に紹介されて居る。

指導要點

此の文を讀むことによつて、雀の宿に於ける可愛い〻雀達の生活、且つは作者の心やり等を十分に理解せしめる。

指導上の注意

本文は、單なる雀の宿の紹介でなく、特に雪の降つた朝を選んで書いた所に、雀の生活の特殊相が現はれて、味ひ深いものとなつてゐる點を見逃してはならぬ。

語句「幾群も幾群も、悲しさうな聲、いつの昔からかうしてあるのか、このかはいらしいお客樣」等の意義を知らせる。

文字「雀、宿、飯、穴、餌」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十八　火事

要說

本文は子供の生活圈內によく遭遇する事實を、取扱つたもので、所謂生活教材の一種である。村の消防手を父とする子が、

作者である事は文によつて分るが、其のをぢさんの家が類焼の厄に遭つた事が、一層本文の構造を複雜なものにして居る。一篇を通じてされて居るのは、一種の驚きと怖れの感情である。をぢさんに對する同情から、猫にまで及んで居る所に本當の子供らしさが見えて、此の文を一層味のあるものにして居る。

指導要點

本文を讀ませて、描かれた場面を想像させ、作者の心持を感得させる。

指導上の注意

火事の原因がどんな所にあるか、自ら其の中にうなづかれると思ふ。子供の日常生活の反省をなさしめたい。

表現の上から、兒童の綴方との連絡を計らねばならぬ。

語句「けたゝましく、夜業、身仕度をとゝのへ、サイレン、四辻、しよんぼり、やつかい」等の意義を知らせる。

文字「火、業、支度、消防手、角、語る、寢、床、聖朝、燒ける、元、猫、附ける、辻、當、捨てる」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

十九　梅

要　說

淺春の日暮方、香高くしかも魁けて咲く梅を中心とした、なつかしい情趣と、美しさを歌つた詩である。一篇は三齣に分れ第一齣は所謂「暗香浮動」の情景である。第二齣は其の浮動して來る暗香が、垣根の梅花である事を發見した時の喜びを歌つたものである。第三齣は第二齣の情景に、岡の上の朧月を配して、更に早春の情趣を深めて居る。

指導要點

此の詩を誦讀せしめて、描かれた場面を想像せしめ、その情趣を味はせる。

指導上の注意

梅を主題とした早春の夕べの情調として、あつさり取扱ひたい。

語句「ほんのり、うつすら」の意義を知らせる。

文字「梅」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

二十　小さい溫床

要　說

世はまだ冬の季節であるのに、小さな溫床の中には早くも、春が訪れていろ〳〵の花がそれ〴〵の色に、妍を競つて居る。その春の訪れと言ふ喜びが一篇の主題となつて居る。

指導要點

小さい溫床の中に美しくも愛らしく開く草花に寄せた、作者のいつくしみの情趣を味はせると共に、自然を樂しむ氣持を培養したい。

指導上の注意

溫床そのものゝ構造に關する說明も、會話の中にそれとなく織込んであるが、此の程度の說明はわざとらしくなくていゝ。

語句「おだやかな、ふつくら、ぽんぽり、ぴろうど、つや〳〵、照りはえて」等の意義を知らせる。

文字「溫床、抱く、紅、王、週間、仙、櫻草、綠、紫、汗、馬、枯」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

二十一　雪舟

要　説

雪舟の逸話として、昔から有名な物語である。其の逸話を子供の讀物として適する樣に、物語風に書きこなされたもので、子供の程度にあふ樣具体的描寫的な書き振りを試みて居る。一篇の敍述を通じて窺はれるのは、雪舟の繪を書く事に對する愛着心の强さと、和尙が彼の畫才を見拔いて之を許した點に對する感激である。更に其の奥に「好きこそ物の上手なれ」或は「梅檀は二葉より香ばし」といふ樣な意味が入つて居る。

指導要點

雪舟が幼時、お經がおぼえられないので、大層苦心をしたが、和尙の慧眼と大度によつて、とう〳〵繪師になつて成功した事を理解させる

指導上の注意

艱難汝を玉にする事を信じさせたい。

語句「しく〳〵、いぢる、とめどなく」等の意義を知らせる。

文字「雪舟、僧、叱る、蜘、經、堂、明日、習ふ、氣、上手、問」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

二十二　潛水艦

要　説

本文は擬人体によつて、近代的武器として、世界に精鋭を誇るわが海軍の潛水艦に付いて、其の形態、構造、性質の大要を

説明したものである。即ち潛水艦は、水中をもぐつて敵を攻擊する軍艦であると同時に、水上の航行も自由である事を説明し、其の形態が鯨の形をして居る事、及び其の續航力等を説明して居る。其の他、潛望鏡及攻擊能力、潛水艦中に特殊な能力を有するものがある事、潛水艦の防禦力について述べて居る。そして其の結びに於て心機一轉、敵の大艦を魚雷一發で打沈めた時の愉快を語つて、大いに元氣を鼓舞して居る。

指導要點

本文を讀む事に依つて、潛水艦に就いての說明を正しく理解し、潛水艦についての一般概念を把握する樣に指導したい。

指導上の注意

挿畫は教科書以上精密にしてはならぬ。

語句「モツトモ、時々新シイ空氣ヲ吸ハナケレバナラナイ、水面ニ浮カンデ走ル方ガ早ク走レル、潛望鏡、魚雷、シノンデ行ツテ、オソフ、弱イ敵、機雷、足ノ早イ驅逐艦、ケンノン」等の意義を知らせる。

○字「等、攻擊、粁、洋、底、由、定メ、不、沈メ、對、務、劇設、無、信、割」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

二十三　春の雨

要　説

小川のほとりに立つて、春雨の惠みにあらゆるものゝ姿が、冬から春へ移り變つて行く、其の柔かな氣持を感じの儘に表したものである。詩は全体で四節から出來て居るが、その第一節では若草に降りそゝぐ雨の細かさを、第二節では柳の芽に降り注いで滴る雫が水に波紋を描く靜かな光景を、第三節では此の春雨に心持ち濁りを生じて流るゝ川の流れを、更に第四節で

は、其のゆるやかな流れに、卵の殼や、わら屑が浮び、えびや目高が靜かに泳いで居る情景を歌つて居る。一篇を通じて靜かな、そして暖かい春雨の氣分が措辭の上にも、リズムの上にもよく現はれて居る。

指導要點

此の詩を誦讀せしめて、描かれた場面を想像させ、のどかな春雨の情調を味はせる。

指導上の注意

兒童に感じを强要してはならぬ。兒童が理解した程度でいゝと思ふ。

語句「萠えて明かるい若草、しと〳〵、こぬか、村から町へ」の意義を知らせる。

文字「輪、卵」の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

二十四　東　京

要　說

我帝都の名所を紹介した文であるが、一郎、つぎ子の兄妹と其の叔父との對話に依つて說明の筋が運ばれて居る。對話は最初、兄妹がお土產のお禮を述べた所から始まつて、三人の間に問答が交はされつゝ、叔父が專ら東京名所の見聞を紹介するといふ仕組である。東京名所の紹介は「にぎやかな所」とか「公園」とかの樣に幾つかの項目に分けられて說明されて居る。文の最後に一郎の言葉として、「僕も見物に行きたくなつたなあ」とあるのは、日本國民として是非一生に一度は、帝都の景觀を見ておくべきだと言ふ事を、其れとなく暗示して居る。

指導要點

大東京の名所に就いての大体の概念を得させ、是非自分も一度行つて見たいと言つた樣な憧憬の念を起させる。

指導上の注意

場所はをのぢさん家らしい。東京見物から歸つて土產物を屆けた翌日、兄妹がをぢさんの家へお禮に行つた席上の對話として見たらよいと思ふ。

語句「境內、神々しい氣、恐らく、靑銅、映畫館」等の意義、用法を知らせる。

文字「菓、驛、拜、堀、劃、像、明治、宮、道、器、爭、陳、宿、步、央、或は、公、名」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

此の課では、大東京の名所案內が主になつて居るから、其の目的に沿うべく、遺憾の無い樣に繪葉書其の他寫眞の用意が必要である。

二十五　東　鄕　元　帥

要　說

關東大震災當時に於ける、東鄕元帥の逸話を物語つた文で、崇高にして、誠忠無二なる元帥の人格が如何にもよく現はれて居る。萬人をして襟を正さしめる敎材である。文は先づ關東大震災當時に於ける、東京市內の物凄い光景と、悲慘な情況とを描いて、主題の背景を作つて居る。かうした突發的災厄に直面し乍ら、一身一家の危難を顧り見ぬ元帥の誠忠無二なる行動は、萬人をして襟を正さしめる。

指導要點

此の物語を讀ませる事によつて、描かれた場面を想像せしめ、崇高にして而かも誠忠無二なる東鄕元帥の人格にふれしめる。

指導上の注意

語句「震動、生きた心地もなかつた、命からく、餘震、質素、あわてふためく、胸をなでおろす、いたる所」等の意義、用法を知らしめる。

文字「震災、共、瓦、市民、心地、餘、造、壁、劍、自ら、家、震ひ、歳、老、宅、命、圓、回」等の讀方、書方、意義、用法を知らせる。

卷七

第一章　編纂概說

序說

國體觀念の明徴と國民精神の涵養

此の問題は恐らく讀本の最後まで一貫する一つの大事なモットーであらうと思はれるが、此の卷は現れた教材の中でも、特に我が古代の史實を物語つて國體の觀念を明徴にし、或は忠勇義烈の美談を物語つて國民精神を作興せんとする作意を含んだ教材が、相當に配せられてあることがわかる。更に國民の四大義務の中の、兵役の義務及び納税の義務について、具體的に物語つて、國民精神の涵養がそれ〳〵豫期されてゐると見るべきであらう。

藝術家の心境にふれしめること

卷七の教材中の中で特に興味あることは、藝術家――ことにその道の名人といはれる人の至藝を描いて、藝術の妙味を味はせ、更にその心境にふれしめんとする教材がある。

道德生活の指導

道德生活の指導を作意に含めた教材も、亦相當に多い。

觀察工夫の態度を啓培すること

此の種の作意を有する教材も、相當に採錄されて居る。

地理的な考察眼を養ふこと

これも尋四に於ては必要な教材組織上の要件であらう。

藝術的な觀照眼を養ふこと

これは讀本教材として當然の主題であるから玆にいふまでもあるまい。

教材組織の特色

教材組織上に於いて、色々の特異點が見出されるやうである。

1 說話教材　八篇
　イ史話　六篇
　　第一　弟橘媛　　第四　わさくらべ　　第九　笛の名人
　　第十三　錦の御旗　　第十六　木下藤吉郎　　第二十一安部川の渡し
　ロ實話　一篇
　　第二十六乃木大將の幼年時代
　ハ假話　一篇
　　第十八　五作ちいさん
2 生活教材　五篇
　イ（第二　潮干狩
　　第二十三お月見

　ロ（第五　からかさ松
　　第七　苗代の頃
　　第二十二夕日）
3 笑話教材　一篇
　　第二十　笑話
4 韻文教材　六篇
　　第一　海　　第六　朝　　第十　緣日
　　第十四　鐵工場　　第十九　夕日　　第二十四鳴子
5 其の他の教材　六篇
　イ科學的色彩の濃厚なもの　五篇
　　第八　木の高さ　　第十一　朝顏日記　　第十五　大阪　　第十七　油蟬の一生　　第二十五横濱港
　ロ手紙教材　一篇
　　第十二　兵營だより

右の教材類別を仔細に吟味すれば、卷七の教材組織の特色は、大樣これをつかむことが出來る。

1 說話教材が頁數の大部分を占めてゐる。

卷七は、全頁數百五十頁の半以上である。中軸たる點に於ては變りがないが、量に於て輕減されてゐる。それだけ他の方面に進出してゐることを見逃してはならない。又說話教材の中味と一變してゐるのである。卷六、七は歷史譚を中心としてゐる點は著く異なつてゐる。歷史譚といつても卷七は正史に載せられてゐる材料が多い。史話に屬するが、傳記、逸話に關するものが其の大部分を占めてゐる。この點は見落してならない大切なる留意事項であらう。

2 科學的色彩の濃厚な教材が激增してゐる。

科學的要求をもつと思惟せられる材料の出現は、卷七になると、斷然その量を增してゐる。生活教材を凌ぎ、說話教材に次いで第二位を占めてゐる。

3題材の組合せが複雜になつて來た。
說話教材、生活教材、韻文教材と稱すべきものもあるけれども、その以外に屬するものが多樣に採られ、頗る複雜となつた。所謂雜輯讀本の特記を次第におびて來てゐる。
4口語常體の文が著しく增加してゐる。
卷七は全篇二十六課中、韻文六課を除くとあとが二十課、その中十二篇は口語常體であつて、口語の敬體は僅かに八篇にすぎないのである。更に大きな變革は、文語文の未提出といふことである。國語讀本にしても、尋常小學讀本にしても卷七から文語體の文章が出て居たが新讀本は口語體を續けた處には、編輯當局の英斷さが思ひやられる。
5平假名專用を實現してゐる。
卷七は平假名專用が實現せられてゐる。これは教材の特色として特筆大書すべきであらう。蓋し、かくの如き英斷を見せたのは、實社會の實情に即するといふ當局の意向の現れではあるまいか。
6語彙の發展に目ざましきものがある。
國語—語彙の擴張發展に於いて、卷七は目ざましい進展を見せてゐるやうである。新來の言葉や、未知の語句が多數に現れてゐる。

內容

說話教材

卷六に引きつゞいて史話史傳に屬する教材を多分にとつてゐる。しかし、卷六は正史に屬する材料が多かつたが、この卷ではむしろ、傳記又は逸話に關するものが多い。
各說話はそれ〴〵の特情によつて性質の多方的陶冶を目ざしてゐると見るが至當である。

生活教材

等三の生活教材は、何れも假想の作者がはつきりと作中に頭を出してゐる。ところが卷七になると、對象の客觀的描寫へと發展してゐる。主觀的のものもないではない。かうした態度の表現は、兒童の綴方向上に多大の暗示與へることであらう。

韻文教材

敍景的の詩が多い。敍景的のものは、幼學年には六かしいから、勢、上學年に出されるのが通例である。敍景の中に抒情が巧みに織りこまれてゐる。詩材を目然、人事各方面に仰いでゐる。詩の格調の變化、組合せが、苦心せられてゐる。

其の他の教材

其の他の教材が、六課、四十五頁を占めるやうになつたのは、卷七の大きな特色である。兒童の生活を理科的、自然科學的方面に擴大しやうとする要求を多分に持つてゐるものがある。數理生活の發展に、多大の暗示を與へるものがある。地理的常識を高めようと要求してゐるものがある。軍事思想の普及を希求してゐるものがある。科學的材料の趣味的表現は卷七の持つ大きな特色である。

形式

1 文字

新出漢字と讀替漢字、新出は百五十六字、讀替は九十七字である。

舊國語讀本と比較			
新出漢字		讀替漢字	
新讀本	舊國語讀本	新讀	舊讀
卷七一五六	一八〇	九七	九五

2 分量

	舊讀本	新讀本	增減
課	二六	二六	增減なし
頁	一一四	一五〇	増 三六

3 挿畫

卷六に引續いて、色刷を取りやめ、全部墨色の一色としてゐるが、濃淡の配合に心を用ひ、實際の感じの出るやうに苦心されてゐる。全百五十頁の中四十五頁に挿畫がはいつてゐる。

第二章　各課の要說及び指導の要項と注意

第一　海

要說

新學年の初に當り、海のすが〳〵しい氣分を味はせんとしたもので、詩形は不定である。

1 題して「海」といふのであるが、實は一讀して了解されるやうに「朝の海」の景觀であり、情調である。

2 此の詩の表現面から直接に與へらるゝものは、―雲の切れ目を洩るゝ日光―海上を飛ぶかもめ―そよふく風―踏む砂の輕いひどき―等々で、同時に濱邊の砂原を歩いてゐる作者の姿が想像される。岩角に立つ作者の姿―その視線の向かふところに青い波のうねり―白い波頭―かすかな波のひどき―素足をあらふ波の泡―等々の景觀である。

濱の一端から掛け聲勇ましく漕出す漁船―漁夫が一生懸命に漕いで居る―白帆があがる―帆は追風を孕んで沖へ遠ざかる―雲間を洩るゝ日光を浴びて金色に染まる―等々の景觀である。而して、それ等が此の詩の形象に於ける第一次的機構ともいふべきものである。

3 右の機構を通してそこに醸し出される情調を靜かに味つてみると、それは實に一種の爽快な朝の海邊の氣持。胸廓が自然に擴がつてゆくやうな心持である。―これが此の詩の第二次的機構ともいふべきものである。

指導要點

1 此の詩を味讀せしめて描かれた場面を想像せしめ、そこに流るゝ情調―朝の海の爽快さを味はせる。

2 併せて語句、文字、假名遣等について確實な收得と練習とをなさしめる。

指導上の注意

1 自由詩であるから、リズムよりも意味の方を主にして、なるべく輕快な調子を以て、さわやかな氣分の自らあらはれるやうに讀むことが大切である。

2 作者の立場に立つて此の詩の形象―濱邊を歩く―岩角に立つ―沖を眺める―といつたやうな境地が自ら味得されるやうにする。

第二　弟橘媛

要說

前卷日本武尊の課と連關して、弟橘媛の貞烈なる御最期を敍した。史實としてよりは、寧ろ日本婦人の一美談として授くべきである、課中「足柄山」とあるのは、日本書紀に「碓日取」となつてゐるが、本課は古事記の記述に據つたのである。

1文の形態は一種の物語といふべきものであるが、○述的機構の上から分節すれば

序――時代と場所の說明

日本武尊御一行の難船

弟橘媛の御入水

風波をさまる

尊、媛のお櫛を葬りたまふ

尊、足柄山より媛を偲ばせ給ふ

（附）「あづま」の名の起り

2右に表示した如く、時代と場所とを簡潔に敍したものであるが、同時に此の物語の背景の役目を果してゐることを見逃してはならない。次に尊の御難船は、當時の物凄い狀況を描くに委曲を盡し、媛は尊に

「私はお身代りになつて神の心をなだめませう。」「皇子は、勅命をはたして、めでたく都へお歸りになりますやうに。」こゝらは一篇のクライマックスとして、讀者を感泣せしめずには措かない所である。更らに媛の至誠が天に通じたことを述べ、尙媛のお櫛をかたみとして厚く葬り給うたことは、一讀哀愁の切なるものがある。一轉して尊が御凱旋途上の出來事を敍したものでまさに斷腸の思ひであらせられたに相違ない。深く味ふべきところである。附けたりとしての「あづま」の稱呼の由來も、まことに此の文の結びとしてはふさはしい敍述である。

指導要點

1此の物語を讀ませることによつて、弟橘媛が日本武尊をして其の大任を果さしめ奉るべく、自ら尊の御身代りとなつて、荒狂ふ大波の眞唯中に飛込み給うた眞心に感激せしめると共に、一方日本武尊の深き思ひやりの御心をも十分に味はせる。

2かなりに新出文字や言葉が多く、また澤山の敬語が出てゐる。これ等の正しき收得の指導にも相當に骨を折らねばならぬ。

指導上の注意

1卷六、第六「日本武尊」の文章を思ひ起させ、此の課の物語は、其の續きであることを附說してきかせる。物語の文であるから、實感を出すために、聲の抑揚に注意せねばならぬ。尙ほ、此の文には多くの敬語が使つてあるから、これも注意を要する。

第三　潮干狩

要說

第三課「潮干狩」尋常小學國語讀本卷七所載の文を訂正したものである。

1一種の生活教材である。今度は多少改められて、一層兒童作らしい形態を有つやうになつた。

2文は潮干狩の經驗を時間的に敍述したもので、兒童の綴り方によく見る書きぶりである。

3もやが水面をこめてゐることによつてのどかな春の日和を思はせる。潮の引くのを待つて、そろ〳〵仕度にかゝる。潮干狩をはじめる、專ら作者自身の經驗が記されてある。豫期せざる收獲に作者の狂喜した有樣が想像される。

4潮干狩の賑やかな人出を客觀的に記述してゐる。滿潮の來たゝめに、もとの船にかへり、互ひに獲ものを見せ合ふて、いろ〳〵の功名談や失敗談に花が咲いたことであらう。

指導要點

1此の文を讀ませて、描かれた潮干狩の實況を想像させ、此の文の面白味を味はせる。

2新出の文字、語句に就いて確實な會得をさせる。

指導上の注意

1口語敬体の文で、特別なものでないから、通常お話をする調子で讀ませればよい。一年中潮の干滿の差の一番大きいのは春の季節であり、又此の頃は氣候もよいので、昔から潮干狩といへば大抵春の行事にきまつてゐる。俳句などでも、春の季題

として之を選んでゐるのである。
貝などを取るのが目的の全部ではなく、多分に「なぐさみ」「きばらし」「遊び」といつたやうな氣分が含んで居る。謂はゞ一種の「遊山」であり「遠足」であると思つて差支へない。

第四　わざくらべ

要　說

尋常小學讀本卷八所載の文を書改めたものである。出所、今昔物語

1 飛驒の工といふ大工と、百濟の河成といふ畫かきとが、何れも入神の技をこらして、腕くらべをするといふのが文の筋である。

2 初に一篇の總序で、二人の登場人物を簡潔に紹介し次に先づ、飛驒の工の挑戰である。互に藝道の名人同志であつて見れば罪のないざれことである。

3 河成の復讐、藝の上で自分の腕を振つて見せる點に存する、ほゝゑましき且つは美ましき仇打である。文の終りに於て、そこに一切が氷解し、お互ひに感嘆し合ふ名人同志の感懷を思ふべきである。

指導要點

1 藝道の名人同志が、うでくらべをした。それは俗人の醜い爭ひではなくて、至藝神に通じた人だちの、しかも仲のよい人たちの、無邪氣なうでくらべである。それをねらつて書いたのが此の文である。兒童が此の文を讀んで、さうした文意を理會し、此の文の面白みを味得するやうに導きたい。

2 併せて、文字語句等の確實な會得をなさしめる。

指導上の注意

1 物語りの文であるから、そのつもりで話をするやうに讀む。特に表情をあらはすところの讀みぶりに注意して、實感の出るやうな讀みを工夫したい。

第五　からかさ松

要　說

1 尋常小學國語讀本卷七所載の文を修正したもの。
文は鄉土的な生活教材ともいふべく、紹介してゐる內容的な素材は傘松と、石地藏と、峠の茶屋とその三つで、素朴な村の風景であるが、最後の「茶屋」のところで息子が南洋に行つてゐるといふので、そこに現代的な句がある。

指導要點

1 此の文を讀ませて、傘松を中心とする鄉土的な敍景の文意を理會せしめ、此の文に漂ふ鄉土的な句にふれさせる。

2 併せて語句、文字等に就いて確實な習得をさせる。

指導上の注意

1 お話の調子で讀むといふ以外、別に注意することはない。

第六　朝

要　說

若葉の朝を印象的に表現したもの。

1 其の一は軒端の子雀の聲である。晴れた空をさながら思はせるやうな、子雀の愉快なさへづり、ほがらかな朝の心持。

2其の二は、青葉若葉にふりそゝぐ、さわやかな朝日の光を捉へて來た。
3其の三は青葉に限られた朝の空の色「あさみどり」最もさわやかなものゝ象徴であるといへよう。

指導要點

1此の詩を誦讀せしめて、ほがらかな、さわやかな、初夏の朝の心持を形象の上から味はせる。
2さわやか、ほがらか、あさみどり等の語句、及びさわやか、こずゑ等の假名遣等について、確實な會得をなさしめる。

指導上の注意

1全文五五の調子からなる、輕快なリズムを有つところの詩である。

第七　苗代の頃

要說

卷五「蠶」「田植」に前行する田園行事を文學的に表現したもの。始めて現れた敍景文である。
1苗代の頃の田園の景觀を描いた文である。それとなく田園生活の樂しさが皷吹されてゐて、農村又はその近くに育つた者には、一種のなつかしい感じを與へる書きぶりである。
2人と牛の活動、蛙の聲のなきまさる所に一種の特色がある。此の文のはじめから終りまで、蛙の聲であやどつてゐるところは、特に俳味の豐かな筆致である。
3文は一種の敍述的形態をとつてゐるが、事を敍するよりも氣持を抒べる態度が勝つてゐるところに注目を要する。その點一種の隨筆的な味がある。

指導要點

1此の文を讀ませて、苗代を作る頃の田園の光景を想ひ浮べさせ、文にたどよふ田園的情趣を味はせる。
2語句、文字、假名遣等について正しい會得をなさしめる。

指導上の注意

1文全体に何となく詩的な情調が漂うてゐる。讀みの上にさうした氣分を出すためには、落ちついた、物靜かな聲調と、ゆとりある態度とを必要とする。

第八　木の高さ

要說

尋常小學讀本卷七所載の文を書改めたものである。理科的教材であると共に、觀察及び推理力の養成に資するものである。緯度の高い地方、及び我が國に於ても冬期に於ては、影が常に實物より長いが、其の事は强ひて兒童に說明する必要はない。
1所謂科學的な機構を有つた文章であるが、しかし理科の教科書などにある文章とはちがつて、作者が自分の發見を語るといつたやうな態度で書かれてゐるところに、子供らしい軟かさがある。謂はゞ「子供の科學」ともいふべき教材である。
2文は作者が、學校の運動場にある一本の杉の高さを測るのに、長い間よい方法もがなと考へてゐたが、ふと思ひついて杉の木の傍に一本の棒を立て、その影が棒の高さと等距離になつた時、杉の木の影を測つて其の高さを知つたといふ筋で、一種の發見物語である。
3敍述中には子供ながらも始終一貫した論理が通つて居り、而かも最初は疑問の形で問題を提供して、一歩々々その疑問の解決してゆくところはうまいものである。「子供科學」として立派な形態を具へた文といつてよからう。

指導要點

1此の文を讀ませて作者が校庭の杉の高さを正確に計り得るに至つた次第を了解せしめ、以て此の文の要點ともいふべき物の高さと其の長さとが同じになることは、一日中に、午前と午後に、一回づつある。その時に影の長さを計れば、すべての物の高さがわかる。

といつた先生の言葉を、確實に理會せしめる。

2併せて文字及語句等について正しい收得をなさしめる。

指導上の注意

1普通のお話をする調子で讀むことの外に、とりわけ注意すべきことはない。物の影と實物の長さが同じになる其の時刻は地方々々で異なることを話してきかせる。尙ほ子供と共に運動場で此の種の實驗を試みるがよい。

第九　笛の名人

要說

出所、十訓抄。篳篥の名手和邇部用光の逸話を記したものである。

1名人の至藝、賊をして、良心に立ちかへらしめるといふのが一篇の骨子である。凡そ人の性は善なるものであり、誰しも良心は有つてゐる筈である。然るに或る者は、成長の程過に於て生活環境の影響を受け、又は或る種の誘惑によつて、良心を痲痺せしめ、小我私慾の囚となつて遂に社會人から「惡人」のレッテルを貼られるやうになる。

2或る種の靈感を得れば、逃げ去つた良心は再びかへつて來て、玆に甦生の春に逢ふ。而して一般に靈感を與ふるものは、宗教と見られるが、藝術も亦その一つに數へてよからう。

3敍述の流れは

一、笛の名人用光、夜泊の船中海賊に襲はる。

二、用光死を決し、今生の思ひ出に一曲を奏す。

三、名人の至藝そく〳〵として賊の心を動かし遂に之を退去せしむ。

といつたやうなことになる。

4名人の至藝は天地神人にあまねく通じて、その心を動かさずには措かない。

指導要點

1此の文を讀ませて描かれた場面を如實に想像せしめ、名人の至藝が海賊の心に感應して彼等の良心を甦らしたといふ一篇の骨子にふれさせる。

2文字、語句について確實な收得をなさしめる。

指導上の注意

1情味、感激を盛つた文であるから、それをあくまでも音調の上に表現する心持で讀むことが大切である。特に對話と地の文とが巧みになひ交つてゐる點に深く注意を拂つて、それ〴〵の場面を生かすべく、緩急、高低、抑揚、何れも其の宜しきを得る事が必要である。

用光が死を前にして一曲を奏しようと思ひ立つた名人らしい心のたしなみについて、特に强く觸れさせる。

第十　緣日

要說

1緣日といへば必ず夜店を聯想する。此の詩は觀音樣のお緣日の夜店を描いたもので、作者が之を、見物して歩いてゐるといふ態度で歌はれてゐる。

神社佛閣の有緣日、即ち主として祭日で、參詣人目あての商人が其の通路一帶に店を張つて客を呼ぶ。かくして緣日は必然

的に夜店を伴ふことになり、絲日と夜店とは不可分の關係になつて來たのである。

指導要點

1 此の詩を誦讀せしめて、絲日の夜店の景物を想像せしめ、此の詩の面白みを味はせる。
2 文字、語句等に就いて確實な會得をなさしめる。

指導上の注意

1 七五調の韻文であるから、さういふ心持でリズムを踏んで讀むやうにしたい。
詩を流れてゐる氣分の玩味。

第十一　朝顏の日記

要說

園藝の趣味を養ひ、併せて兒童の理科的觀察力の養成に資せんとするものである。
1 やや特殊なものであるが、やはり日記の一体で、通常日記文と稱するものの中に屬する。朝顏の種まきから發芽、移植までの手入れや觀察事項を日記として記錄したもので、兒童の日記としては面白い。
2 日附のところを見ると最初日曜から書出してあるが、その後約一週間は記錄がぬけてゐる。これは特に記錄すべき變化がなかつたからと察せらる。
3 次は連續して記されてゐる。發芽―本葉―移植と、主な出來ごとになつてゐる。
4 教材の作意から言へば、此の日記が兒童へのよき暗示となつて、すべての兒童が此の種の日記を書くやうになつてほしいとの希望をこめて書かれたものであらう。

指導の要點

1 此の日記文を讀ませて正しい理會を得しめると共に、之を契機として兒童各自に此の種の体驗を得しめ、且つ此の種の日記を書かうとするやうな態度に導く。
2 併せて文字語句について、確實な會得をなさしめる。

指導上の注意

1 記錄の深究。
經續的觀察の大切なること。

第十二　兵營だより

要說

入營後數箇月を經た兵士が、從弟の小學生に宛てた手紙に擬したもので、兵營生活を表したものである。
1 發信人は新入兵春山新一君、受信人は親戚の子供原田國雄君、原田君から先づお見舞の手紙がいつて、それに對する返信である。その點に先づ着眼しなければならぬ。
2 次に軍隊生活の模樣を報告するに就いての報告が詳細を極めてゐる。
朝の起床のこと。
教練と演習、武器の手入れと夕食。
夕食後の自由時間―附けたり「酒保」。
夜の點呼より消燈まで―勅諭奉讀と班長の注意。
兵營生活の大要―兵營は一つの家庭。

日常生活の間に軍人精神を養ふ場所。
以上で、軍隊生活の報告が終る。

指導要點

1此の手紙文を讀ませて兵營内に於ける軍人の生活狀態を想像理會せしめる。尙ほ發信人と受信人との關係考察からして、此の文にたゞよふ情味を味はせる。
2語句、文字、假名等について確實な習得をなさしめる。

指導上の注意

1普通の手紙であるから、お話をする調子で、しかも朗らかな氣分をこめて讀むこと。國家の干城として、陛下の股肱としての軍人が有つべき精神で、通常「軍人精神」と呼ばれてゐる。勅諭及び讀法は之を具體に示された聖典である。

第十三　錦の御旗

要說

出所、太平記。
前卷の「軍旗」「千早城」と連關して取扱ふがよい。
1吉野朝時代に於ける忠臣村上義光の、忠勇剛膽ぶりをねらつてかいたもので、一讀血湧き肉をどるの感がある。
2文の敍述は一種の戲曲的な物語の機構を以てゐる。先づ主人公としては忠勇義烈の權化、村上義光、之に對する相手は賊の頭目芋瀨の莊司と其の家來、そこで義光の目ざましい働き―胸のすくやうな大活劇を描き出して居る。

指導要點

1此の文を讀ませて描かれた場面を想像せしめ、村上義光の忠勇義烈な行動に感激せしめる。
2併せて語句、文字等に就いて確實な會得をなさしめる。

指導上の注意

1一種の劇的なシーンを出すやうに心掛けて朗讀させる。特に對話の個處はその氣分の出し方に工夫を要する。時間があつたら「村上義光」の吉野藏王堂に於ける最期等を話してきかせるがよい。

第十四　鐵工場

要說

工場の活動的な力强い氣分を味はせるのが目的である。
徒に鐵工場内容に就いて一々說明する必要はない。
1或る大きな力―人間の仕事の中で最も男性的な、しかも科學能力の偉大さを思はせる製鐵工場の景觀を歌つた詩である。自由詩に最もふさはしい題材といへるであらう。
2詩は全篇三齣から成つてゐる。第一は起重機で鐵鑛を爐に運ぶ場面であり、第二は熔鑛爐の光景、第三は鐵板その他の鐵材を製造する工場の瞥見的印象といつたところである。

指導の要點

1此の詩を誦讀せしめて描かれた場面を想像せしめ、何かしら大きな或る力を感得せしめる。
2文字語句について、出來るだけ正しい理會收得をなさしめる。

指導上の注意

1自由律の詩である。大體句讀點のあるところで息をついて讀むがよい。
一般の子供にとつては一寸困る教材ではないかと思はれる。教師の方で適當に寫眞その他を準備しておく必要があると思ふ。

第十五　大　阪

要　說

我が國の一大商工都市として、の大阪を說いたもので、初めて現れた說明文である。
1大大阪の景觀をあらゆる角度から眺めて紹介した文章で、將來の地理の教科書などに持つて來いの表現形態を具へた文だと思ふ。
2文は煙の都—工業都市—としての大阪
商業都市としての大阪—水の都。
大阪市の近代的文化の代表地區中之島に持つて行つたところは、なか〳〵に鮮やかな筆致である。
3中之島の景觀の紹介。市の繁華街としての道頓堀—名所としての大阪城—多くの神社佛閣の紹介—海陸交通機關の紹介。
4大阪市の昔と今とを歷史上から對比して眺めてゐる。

指導の要點

1此の文章を讀ませて、日本二大都市の一である大大阪市の景觀が一つのまとまつた概念として、兒童の頭に構成されるやうに仕向ける。
2併せて語句、文字等についての正しい理會習得をなさしめる。

指導上の注意

1普通のお話の調子で讀む。特に題材が科學的なものであるから、句讀點等に十分注意して、ハッキリとわかるやうに讀むことが大切である。

第十六　木下藤吉郎

要　說

出所、眞書太閤記。本文は稍々劇的に表現してある。本課に於ては「尺」本課及び其の他の課に於て「間」「里」等を揚げたが。これは主として文字及び大體の觀念を授けるのが目的であるから、一々これを正確にメートル法に換算せしめる等の必要はない。
1二十頁に垂んとする本卷第一の長篇である。舊國語讀本卷七にも「木下藤吉郎」と題して出されてゐたが、それとこれとは中味に於てすつかり一變してゐる。兒童には最も歡迎せられる英雄である。貧しい農家から身を起して天下を統一し、朝鮮支那にまで皇威を輝かさうとする、それだけでも子供等は驚喜するのであるのに、其の生立から全國を平定するまでの經路の千變萬化、面白いこと、他に比較するものはあるまい。
2清洲城の城普請と長短槍の仕合の二挿話を組合せて、長篇文章にて提出したものである。
3城普請の顚末を紹介するに、（一）（二）（三）と小分して、進件の展開を示してゐるのは、今までにない組立で面白い行き方である。
藤吉郎の非凡の智略
修理の遲延してゐる點
信長を反省させる進言
修理完成に三日の見通し
4「短い槍と長い槍」
槍の長短に對する得失の論爭

上島方と木下方の槍の稽古
仕合當日の光景

指導の要點

1 割普請法といふ頗る奇拔な工作法によつて、淸洲城の外郭の修理を完成させる話や、藤吉郎一流の策略によつて長短槍の試合に勝を制するといふ、極めて趣味ある物語を讀みとらせることによつて、智略の木下藤吉郎にふれさせる。なほこれによつて長篇の傳記物語の讀解力を高める。
2 語句、文字等についての正しい理會習得をなさしめる。

指導上の注意

1 趣味ある物語である。だがこの文は兒話などとちがつて、多くの對話が挿入されて居る。この對話を活かすことによつて、この課の朗讀の使命は、はたされるのである。對話の〇み方をどう讀むかに工夫をこらしたい。
2 二十頁に亙る長い文であるが、むだなく、文が洗煉されてゐて、しかも興趣津々、實によい文である。想の展開に注意する。

第十七　油蟬の一生

要說

油蟬の發生を說いた理科教材で、主として岸田久吉氏の研究に基づいたものである。
1 油蟬の一生を說明した文章である。說明文とはいへ、實に趣味たつぷりとした表現で、讀みはじめたら、終りまで行きつかなければ本をおかれない位うまく書けてゐる。說明文の趣味的表現である。
2 昆虫學者以外には殆ど知られてゐない。油蟬の幼虫の生活—しかも地中の生活を眞先にかゝげてゐる。一讀、好奇心をそゝる、追求の念はあふられる。起筆として考へられたものである。
3 蟄居生活から地上の生活への變轉である。外國の實例と對照させたところは、蟬の生活の不思議さを稱して更に科學探究の情熱を燃えたゝせるに有力である。

指導要點

1 說明的文章を讀解させることによつて、油蟬の一生を知らせしめる。なほ此の趣味ある科學的物語をとほして、自然物に對する趣味と愛好の念を高めたい。
2 語句、文字、假名遣等の正確に理解收得せしめる。

指導上の注意

1 說明文は事理を說きあかすことを任務としてゐる。したがつて、その構成の如きも、論理を追つて、理路井然たるものである。之を讀む際は、理和に訴へて、正確に、明瞭に、といふ條件が重要である。素材は純知的のものではあるが、兒童の程度に合し、興味をそゝるやうに、油蟬に生命を與へ、物語化されてゐる。故に特徵を活かし、そうした箇所は、興味をそゝるやうに、注意を拂はなければならぬ。

第十八　五作ぢいさん

要說

納稅精神に關する教材である。
1 或る日の五作ぢいさんの行動を、純粹の對話文であらはしたものである。短篇小說とも脚本とも見られる。場所は村役場の事務室か、應接室、相對するは、五作ぢいさんと村の收入役、主役は勿論五作ぢいさんである。
2 一老爺が其の身は逆境のどん底にあへぎながらも、國家奉仕の道である納稅の責務を果さうとする其の心情の美しさ、これこそ國民教育公民教育の手本ではなからうか。單なる對話文の讀解に止らず、この五作ぢいさんの心情に感激させるこそ本課のねらつてゐる大眼目といはねばならぬ。

指導の要點

1この課の對話文を讀解させることによつて、納税に對して責任感の強い五作ぢいさんの行動に感激させたい。それと同時に、納税は國民が國家に奉仕する道であつて、必ず果すべき覺悟を固めておくことは、この教材として逸してはならない觀點である。

2語句、文字等の正確な理會收得させる。

指導上の注意

1純對話の文である。一體對話文ぐらゐ、人がらや心持の現れるものはあるまい。朗讀する時は、作中の人物の現はれるやう工夫せねばならない。

時弊滔々、納税を逃れんとして、合理的の脱税法さへ講ずる財閥もあるのに、名もなき民の心にはかうした赤誠さへも溢れてゐる、幼童の心を培ふのに十二分の威力を、發揮することであらう。

第十九　夕　立

要　說

1夕立の光景を歌つた詩である。夕立の氣分は壯快だといふ。しかし、あながち壯快とばかり片付けにくい。ひらめく稲妻、轟く雷聲は壯快よりも、物すごく、恐ろしい。詩の第一句、第二句は實にそれを現はしてゐる。

2第三と第四句は閃光きらめき、雷聲とゞろき渡つた後の光景である。夕立が時間的に變つて行くその氣分をよく歌つてゐる。

指導の要點

1詩の句を誦讀させるによつて、夕立の氣分を味得させたい。

2目をさし通す、雨のどしやぶり、うれしげに、うちをどり、等の語義を明らかにし、運用になれさせる。

指導上の注意

1夕立稲―光りがする、雷がとゞろき渡る、大雨がおちる、車軸を流すが如き雨が降る。かうした次から次へと移りかはる光景をたゞみかけるやうに歌つてゐる。したがつて、誦讀にあたつて、やはりこの氣分を現はさなければならぬ。

第二十　笑　話

要　說

在來の笑話に據る。

1卷六に引きつゞいて笑話材料の提出されたことは眞に喜ばしいことである。しかも今度の三つは新作である。

(一)の笑話は兒童の生活によく出てくる喜劇である。

(二)子供のいたづらに憤慨するあまり、「貸家札」の役目をすつかり忘れてしまつて、自分の仕業を喜んで居る。

(三)意想外の結論を平然と出してゐる。大なる顏の顏して現れた小さゝ、である。

指導要點

1笑話の目標は笑はせるところにある。讀ませることによつて、大に笑はせる、なほ笑ひの因つて來る原因を表現に即して尋ねさせる。

2文字、語句等の正確なる理會收得せしめる。

指導上の注意

1笑話である。作中の人物にはどこかに抜けたところがある。それが笑の種となる。抜けた氣分をあふりたてるやうに讀む工夫が大切である。

第二十一　安倍川の渡し

要　說

尋常小學國語讀本卷七所載「安倍川の義夫」の文を修正したもの。出所、白隱禪師著荊叢毒藥

1荊叢毒藥をもとゝして書いた文章である。原文は漢文である。

安倍川邊の混雜し、雜踏する光景が、よく敍せられてゐる。

2當面の人紀州の男と安倍川の義夫とを點出してゐる。渡し賃について爭ふ處、その個性が現れてゐる。事件の勃發義夫の佛心—落主の出現に努力—西人の對話—義に對する義。情に對する情、實に美しいコントラストである。役人の裁き亦清らかである。

指導要點

1本課は安倍川の渡し場に於ける人夫の義心を中心として敍述した文章である。旅人の謝恩的の惱み—感恩の念と照應して、人夫の義心が一層美しく現れてゐる。兩人の心の照應、其の心の美しさを深刻に味得させたい。

2語句、文字等の正確な理會收得させる。

指導上の注意

1口語の常体で書いてあるが、一種の物語文である。此の文は、人情物語を讀む氣持で、內容に即して聲調の變化を工夫してほしい。

第二十二　夕　日

要　說

寫實的に表した敍景文である。

1夕陽が刻一刻と地平線に近づき。遂には沒し、眞赤な夕映とかはる、その時間的推移と空間的の情景が實によくでてゐる。よい文である。夕日の情景がよく描かれてゐる地平線、とろ〳〵ととけた物が動いてゐるやう、夕陽の姿を眼前に髣髴させるやうである。地上の風物の美しさ一段と發揮してゐる、最後に夕燒に對する作者の感想が現れてゐる。

指導要說

1燒けきつた鐵のやうに眞赤な夕日が、刻一刻と地平線に近づき、遂には姿をかくして夕燒の空とかはる。かうした變り行く夕日の情景を描き出した文章である。

讀むことによつて、夕日の美しさ、はなやかさを想像させると共に、其の表現のもつうま味を十分に味得させたい。

2文字、語句等の正しい理會收得させる。

指導上の注意

1刻々にかはつて行く夕日の光景を描寫した文章である。

時間的の變化
空間の光景
全体として

留意し、着眼することが大切である。

第二十三　お　月　見

要　說

尋常小學讀本卷七所載の文を修正したものである。

1年中行事の一つであるお月見を敍した生活教材である。
月が出た、直後の光景より筆を起し、對話挿入も文に變化を加へ、景色に見とれる兄弟、お供物、室外の光景、虫の聲の唱歌への展開自然的で面白い。
2天心に輝く下を兄弟揃つて散歩ー内にはひるといふ行動を中軸として、月夜の光景が實に巧みに描出されてゐる。兒童の綴方に、大きい暗示を與へることゝ信ずる。

指導要項

1月見の光景を敍した文章である。これを讀むことによつて、月見の光景を想像させ、なほ表現のうまみを味得させたい。
2文字、語句等の正しい理會修得させる。

指導上の注意

1敍景文であるが、到る處に、抒情が加へられてゐる。感情、氣分の高まつてゐる箇所は特に注意して朗讀してほしい。
對話は實際、話者の氣持を現はすやうに努めたい。

第二十四　鳴　子

要　說

1「苗代の頃」と連關する田園趣味の教材で、幾分民謠調を帶びてゐる。
黃金色にみのる秋の田の面の情景をうたつた韻文である。
(一)　時間的の推移が「もゞの一聲朝霧はれて」の句によつて、時は、秋の朝午前、場所は秋の田の面といふことは申すまでもない。
(二)　飛立つむら雀を中心として、誰やら鳴子の綱を引いてゐる。
(三)　秋日和が中心をなしてゐる。

指導の要點

1詩を誦讀させることによつて、稻の實の熟する頃の田の面の情景を味はせる。
2語句、文字等の正しい理會の收得に努める。

指導上の注意

1七七の輕快な調子である。黃金色の波の漂ふ秋の田の面、どこまでもすみきつた空、かうした氣分の現れるやうに、輕く爽かに讀みたい。

第二十五　横濱港

要　說

1アメリカ通ひの大船が横濱を出帆せんとする情景を、兒童生活にかりて敍したもの。文は春子を中心として、兄と共に横濱港より出帆する、日本丸を見に行つたといふ筋になつてゐるが、その背景をなして居る、横濱港の廣大さ、發船當時の盛觀さなどが文に盛られてゐるから、かうした點までふれさせやうといふ希求のあることを汲みとらせる。

指導の要點

1春子が兄に連れられて、横濱港を出帆する日本丸を見送りに行つた文章である。かうした行動と、春子の心情を讀みとらせると共に、其の背景をなしてゐる横濱港の壯大さを知らせたい。
2語句、文字等の正しき理會收得させる。

指導上の注意

1春子の行動につれて、其の感情がよく現れて居る。此等の氣持、感情をさながらに傳へるやうに工夫しなければならぬ。

第二十六　乃木大將の幼年時代

要　說

1「乃木大將の幼年時代」尋常小學國語讀本卷八所載の文を修正したものである。

乃木大將の幼年時代に於ける有樣を敍した文章である。大將の家庭は實に嚴肅なものであつた。質素なものであつた。武士道精神にみち〳〵た家であつた。大將が終生忠誠、質素で押し通して武人の龜鑑と仰がれるに至つたのも決して偶然ではない。

文は時間的に、幼少の時の事實から發展してゐる。

大將の幼時　父の決意

兩親の敎育振り　家よりの感化

大將が忍苦に堪へ實行されたことによつて。大成されたのである。

指導要點

1古武士の典型といはれる乃木大將の幼年時代の有樣を敍した文章である。讀むことによつて、大將が、その幼時、兩親から嚴格な鍛錬的な武士道的な敎育を受けられたか、そして又、大將はこれらの薫陶に對して忍苦な柔順さを以て受入れ、自己を磨きあげられたか、といふことを知らせ大將の人格に親炙させたい。

2語句、文字等の正しき理會收得に努むる。

指導上の注意

1一種の物語文である。乃木大將の幼年時代の物語であるが、中味には、大將の兩親の嚴格な武士的敎育ぶりでみたされてゐる。朗讀にあたつては、かうした古武士的な敎育ぶりの現れるやうに、正確に、明瞭に、といふ以外に一種の强みを添へ、語を正して聽くの思ひあらしめるやう工夫したいものである。

卷八

第一章　編纂概說

序說

我が國の兒童は、尋三の後期に於て、理知發達の、顯著である事は敎育實際界に略々認められてゐる所である。これを心理學的に考察する時、所謂幼時期からの完全な脫却、そして兒童期への轉換が、或はこの邊にあるのではなからうかと思はれる。尋四の兒童が尋三の兒童と、まるつきり違つてゐるといふ事は、しば〳〵聞く事であるが、これはこんなことからもうづかれる。かういふ點から考へて見る時、四年の國語は、論理的判斷から割出された以上に、もつと心理的な基礎を持つ進步したものであつてよいと思ふ。兒童の讀物を調査して見ても、低學年では、彼等自身の生活を主題とするものに專ら興味を持つのであるが、第三學年頃より、そろ〳〵さうした甘い物に對する興味がうすらぎ、だんだん、歷史譚や、英雄譚を面白がり又進んでは、冒險譚や旅行談などを、好む樣になる。自己の環境から脫出してより高い、大きい、遠い、ものに、あこがれるやうになる。彼等の、精神の發達は、以上によつて、略々想定出來る。かくの如き見解を以て、編纂した新讀本卷八は、勿論卷五、六、七、の發展には相違ないが、かなり飛躍的な特色を持つてゐる、この事に注意すべきである。卷五、六に於ては、文章にしても內容にしても、かなり子供らしさがあつたが、卷七に於ては、さうしたものを多分に、失つてきた、更に、卷八に至つては、尙失つてゐるといふことに歸着する。

內　容

一　文　章

説明文―低學年の文章は、新讀本に於ては、專ら敍事抒情の感情的表現に限られてゐたが、卷七に至つて始めて「大阪」「油蟬の一生」の如き知的説明文が現れた、卷八に於てこれを繼承するものは、「つばめはどこへ行く」「物のねだん」である。「大阪」や「油蟬の一生」は説明文であると同時に、具體的な敍事が織込まれてゐた、つまり具體的敍事を資料として、説明を進めて行く表現であつた。「つばめはどこへ行く」も亦、それと同工異曲であつて、この説明の具象化といふことが、新讀本の説明文に、新生面を開いた所以である。「物のねだん」は以上の三例に比較すると、もつとも論理的であり推理的であるが、しかし具象性といふことに於ては同樣の趣がある。以上の外に説明的要素が、各教材にかなり織込まれてゐる。その著しいものは「大連だより」「振子時計」「水族館」である。

敍景文と紀行文―卷七には「苗代の頃」「夕日」が始めて、獨立した敍景文として掲げられた。卷八にて繼承するのは「晩秋」「漁村」である。又敍景文より一歩轉じて「ホノル、の一日」「清水トンネル」の如き、紀行文も掲げられた。

文語文の提出―「くりから谷」「ひよどり越」「扇の的」「弓流し」「廣瀨中佐」の五教材が、始めて出された文語文である。舊讀本では卷七より提出されてゐた。さうして其の教材は「地球」「横濱」「大阪」といふ如き、內容形式共に簡單な、隨つて頗る無味乾燥な、文語文の雛形ともいふべき説明文であつた。又文語文を提出するにしても、從來の單純な説明文によつて與へようとするものは、文の各部分を、文語と口語と合理的に相對照することによつて、理解せしめようとする、論理的編纂の意圖からである、而るに今新讀本は、すべて叙事抒情による例を開いた、それは、文章の理解を理智的にのみ見ようとする態度から轉じて、文そのものが持つ韻律感情に先づ親しませうとする感情態度を併せて重視するものであり、先づ文を直感的に領略せしめ、而る後合理的理解に及ばしめようとするものである。卷一卷頭以下、韻文的表現の文を出したのは既に其の趣旨であつた。文語文を取扱ふには、先づ彼等に感情的端的に領略せしめ、而る後、徐ろに論理的理解に及ぶべきである。つまり昔の古典の素讀的方法の持つ心理的長所を新時代に於ける讀方教育に幾分復活するものである。勿論素讀の非化學的方法を全面的に背定するものでは決してない。唯言語の習得といふ事は、合理的な科學的な方法によつてのみ達せられるものでなく、殊に其の初歩に於て、感情的直感によつて、領略される事が多い事を、認むべきである。尙卷七に於て、或程度まで文語的語句表現の訓練を、備へて來たのであるから、そこに文語文に入る合理的な手がかりがある、要は心理と論理と兩面に訴へて指導すべきである。

二　教材機構

説話教材―「吳鳳」「くりから谷」「萬壽姫」「ひよどり越」「扇の的」「弓流し」「コロンブスの卵」の七教材がそれである。この中「吳鳳」「コロンブスの卵」を除いた、他の五教材は、いづれも日本歷史をの背景として發達した文學説話であり、さうして、それはすべて、源平時代を對象とする。

理科教材と發明物語―理科に關する教材は「つばめはどこへ行く」「水族館」の二である。發明物語は、振子時計、自動織機の二である。

田園漁村教材―「晩秋」と「漁村」の二つである、又「スキー」の課は、その主とするのは、近代スポーツであるが、其の背景として、北國の田園風景、冬の田園が含まれてゐる。

地理教材―「清水トンネル」及「大連だより」「朝の大連日本橋」「ホノル、の一日」などはこれに含まれる。

國民教材―國民教材は一面愛の純化、擴充を意味し、又一面に於て知の陶冶を豫想し、意志身體の鍛練を豫想する、即ち、「つばめはどこへ行く」「小さい傳令使」「吳鳳」「大演習」「廣瀨中佐」「物のねだん」「スキー」などはこれに含まれると見てよい。

韻文教材―「青空」「朝の大連日本橋」「菊」「福壽草」「廣瀨中佐」「早春」がそれである。青空、は一種の象徴的な表現であり、朝の大連日本橋、早春、は自由詩であり、廣瀨中佐、は文語詩で抒情的敍事の詠史であり、菊、福壽草、は共に內に花に對する、傳統的な感情を持つてゐる。

卷八の世界的展開―世界的展開！　それは、教材そのものゝ性質と、教材の排列との二つの上に存する。卷頭に青空の韻文があり、空間の擴がりを表徴してゐる。又つばめはどこへ行く、は南洋からオーストラリヤに擴がり、吳鳳は、內地から一歩出た臺灣での昔話であり、振子時計は、イタリヤでの話であり又「ホノルルの一日」はアメリカへの指針であると共に、そのアメリカに關する「コロンブスの卵」はイスパニヤ、イタリヤ、アメリカ、の三者に關係を持つてゐる。かく世界的に擴がり出た事は、心理學者、ホールなどの實驗による樣に、滿十歳前後の兒童の旅行冒險談を好む心理とも一致するのである。

一　文　字

新字一四二字、讀替一〇八である。卷七に比べると、新字一五六に比して一四減じ、讀替九七に比して一一を增してゐる。又舊卷八に比べると新字一六三に比して二一字減じ、讀替八八に比して二〇を增加してゐる。

二　分　量

新讀本卷八は、頁數一六二、舊讀本に比すると四六頁、約四割の增加となる。

三　挿　畫

卷七と同樣なり。たゞ寫眞凸板の數が卷七より多くなつてゐる。

第二章　各課の要說及指導の要點と注意

一　靑　空

要　說

全體三齣に分れてゐる。澄みきつた碧空の情景を素直にうたつた詩である。どこでも高いよどこまで續くよ、どこまでも廣いよ、といふのが詩の中心をなすものである。

指導要點

一―靑空の高さ、廣さ、長さを歌はす事により、五七を基調とする韻文の指導をなす。

二―自然觀照の態度を指導する。

指導上の注意

一―象徵詩として指導する。又實際の觀方を指導する。

二　つばめはどこへ行く

要　說

一―候鳥としての「つばめ」の特色を具体的な說明文によつて趣味たつぷりに說明した文である。この文によつて、つばめの去りゆく狀態及其の行先などを知る事が出來る。

指導の要點

一、つばめの去り行く先を知らせ、その去來を明にする。そして自然研究の興味を深くする。

二、具体的說明文の指導をなし併せて新出諸形式の指導をなす。

指導上の注意

一―具体的說明文として、その特質を生かす、又實際經驗を重んずる。

三　吳　鳳

要　說

一―身を殺して蕃風を改めさせた人類愛の權化ともいふべき、吳鳳の物語である。舊讀本卷八にも、此の敎材があつた然し

この度は大部修正を加へて出されてある。第一には、口語敬体が口語常体に改まつた、第二に吳鳳の苦心が、はつきり現はれる樣になつた。第三に蕃人の心の動が、はつきり現れてゐる。敍述に、對話に、吳鳳の氣持、蕃人の心情が現れてゐる如何なる點が改まつたか玩味する事が必要であらう。

指導の要點

一―吳鳳の殺身成仁の精神にふれしめる。又臺灣についての了解を正しくする機會とする。

指導上の注意

一―今日の蕃人については特に正しく了解する樣注意する。

四　大連だより

要說

一―舊國語讀本卷七にも「大連だより」といふ手紙の文があつたが、中味に於てはすつかり變つた樣である。第一に發信者と受信者との關係、第二に紹介して居る大連の樣子などが變つてゐる、之は滿洲國の誕生以來、大連は急速な發展を遂げてゐるからでもあろう。先生より生徒への手紙に頼つて實は大連を全日本の兒童に紹介したものである。

指導の要點

一―此の手紙の文を通して、新興滿洲國の表玄關である大連の狀況を紹介し、併せて兒童の海外に對する見解を廣めてやる。

指導上の注意

一―大連の說明を主とし、書簡文としての指導は第二とす、大連に於ける日本の勢力を思はせる。

五　朝の大連日本橋

要說

一―前課に引續いた素材であるので、連絡が取れ、實際取扱には都合がよい、第二回目の自由詩である。朝の大連日本橋附近を歌つたものである。時計臺の下の老いたロシヤ人、日本橋上の有樣、橋の下の有樣が詩の中心となつてゐる。

指導の要點

一―大連の中心地の景觀を讀ませる、又自由詩型の韻文の指導をなす。

指導上の注意

一―十分なる想像を働かせて讀ませる。

六　くりから谷

要說

一―原據は平家物語に仰いだものである。舊國語讀本では卷六にこの教材を出してゐた、而し口語敬体で出したので事實は了解しやすいが、文の持つ味はどこかに逃げてゐた。ところが今度は文語文で而も原文で出したので讀解には多少の困難は伴ふが、軍記の特色がすつかり浮上つてきた。初めての文語文である、朗讀の上に少しく注意する必要がある。

指導の要點

一―くりから谷に於ける平家敗走の有様を讀ませ、文語文の持つ特色を朗讀により直感させる。

指導上の注意

一―形式的に取扱ふことなく、讀解より入る、而もおもしろく讀ませる事。

七　萬壽姫

要　說

一―この文は御伽草紙の中の「唐糸草子」より取つた物語文學である、親を慕ふ孝子の一念と行ひ、讀む者をして涙を催させる、冷酷と傳へられてゐる頼朝までが、其の至情に泣かされ、遂に唐糸を許してやるといふ、美談である口語敬体であるからよむ者にさして困難を思はせない。舊國語讀本に出てゐた文章に筆を加へられたものである。それだけ文が洗練され讀むものに深く迫つて來る、而も舊讀本でよく問題になつた義中の年代關係がはつきりとしてゐる。

指導の要點

一―物語りとして面白く讀ませると同時に長文の指導をなし、萬壽姫の孝心に深く感激せしめる。

指導上の注意

一―長文の指導として注意する事及代名詞についての指導をなす。

八　晩　秋

要　說

一―卷六「苗代の頃や」「夕日」に引きつゞいての叙景文である、題材を農村の秋に採つてゐる、大きく分けたら、朝、晝、夕方となるであらう、時間的に眺むれば霜の眞白な朝、―朝日の上る頃―眞晝―午後―四時すぎ、―落日後―すべてが闇に包まれる、何れも印象的にうつされてゐる。筆致は讀者の心にひし〳〵と喰ひ入る感が深い。

指導要點

一―農村の晩秋の景を味はせ、情景に、ひたらせ、表現のうま味を味得させたい。

指導上の注意

一―晩秋の印象を出來るだけ實際生活に即して指導し收獲の喜びを味ははせる、又印象的書簡文として指導する。

九　大演習

要　說

一―作者は尋四女位の女兒らしい、全文を通じて女性らしい感觸が漂つてゐる、內容は大体三つに分れてゐる、即ち作者の村を兵士の一隊が通る事、作者が受持の先生に引率されて、大演習を拜觀に出かけた拜觀記及作者の家に兵士が宿泊した、といふ事である、而して此の文より受け入れられるものは、軍民一致、國軍に對して盡す我が國民の心構を強く示唆して居る樣に思はれる、この教材が持つ重要な點として見のがしてならない重要な方面であらう。

指導要點

一―大演習に出かける兵士を村民一同が歡迎する有樣を知らせる。

一―大演習に於ける　大元帥陛下の御聖德に感激させる。

一―軍民一致の精神を分らせる。

指導上の注意

一―兒童には相當難かしい語句が出てゐる、これらの語義を明にすると共に、其の運用にもなれさせる。
一―天皇陛下に對する具体的の尊嚴心を深める事。
一―實際景觀を描く事に努める事。

十　菊

要　說

一―菊の花に晩秋の感じを純した詩である。全文四節に分れてゐる、各節の中より中心となるものを拾ふと、咲きのこる花よ、うつぶした花の重さ、指さきについたにほひ、あゝ菊のたかい、にほひなどである。さゝやかな夜の菊の花、それによつておこされた作者の感情、それがこの詩の生命である、リズムから云へば七七五六を四回くりかへしてゐる。

指導要點

一―詩の句を誦讀させることによつて、さゝやかな草花に純した、作者の感じを味得させる、そして菊の高雅な心持に注意させる。

指導上の注意

一―高雅な心持を中心とする事。
一―唱歌にまで進展せしめる事。

十一　ひよどり越

要　說

一―文語文としては第二回目の提出、義經のはなやかな功名戰の一つである、ひよどり越の戰を敍した文章なり、兒童が手を打つて喜ぶ材料であるが文語文提出といふ、重い荷を負はされたので、詳述も出來ず簡單に片附けられてゐるのは致し方もない、平家物語に其の原據を求めてゐる。

指導要點

一―ひよどり越の義經の政略の物語を面白くよませ、文語文の讀解になれさせる。
一―文語文の指導をなす。
一―源平物語として前後關係の指導をなす。

指導上の注意

一―原文にとらはれて兒童の心意を忘れてはならない。
一―節意をまとめる事に注意する。
一―文語文になれさせる爲に朗讀に注意する。
一―おもしろくよませる事を第一とす。

十二　振子時計

要　說

一―卷六「僕の望遠鏡」卷七「木の高さ」などが出てゐたが、それと同系統に屬するものと思はれる、ガリレオが些細な事

に端緒をつかみ、その中に伏在する不言の眞理「振子時計」を發見するもとの等時性を發見した。日常茶飯時の中に多くの發見の緒口のあることを敎へる發明發見物語である、工夫、發明、創作方面に多大の示唆を與へる敎材なり。

指導要點

一―趣味ある發見物語をよませる事によつて、振子の等時性、を發見した、ガリレオの觀察、思索の非凡であつた事を味はせ、發明發見に對する示唆を與へる。

一―敍事的說明文の指導をなす。

指導上の注意

一―事實的了解に注意する。

一―發明發見の內容と共に、その研究心を明にする。

一―十八才の若い學生であつたガリレオが重要な發見をした、その偉大さを味はせるのであつて、振子の等時性といふ理科的、實驗的な取扱ひをするのではない。

十三　小さい傳令使

要說

一―物語材料である、昭和六年十二月三十日、錦洲に向つた、我が軍は突然優勢な敵軍に出會ひ、惡戰苦鬪した。この時一軍用鳩は、けなげにも自分の任務を果さんとして、幾多の障害を切りぬけ〳〵遂に大石橋の守備隊へ通報するといふ、美しい、涙ぐましい、美譚である、この文をよませることによつて、傳書鳩についての了解とその精神方面に感じさせる。

指導要點

一―錦洲に於ける軍用鳩の健な働を讀ませ身には重傷を負ひながらも、よくその任務を遂行した行爲と心情とを味はせる。

一―精神方面の指導をなす。

一―敍事文の指導をなす。

一―愛國美談として溫く取扱ひ「軍用鳩」はどんな働をするか、などといふ理知的に眺めてはならない、さうした事は副次的の獲物として採り入れる事にする。

指導上の注意

一―なるべく敎育觀察せしめる。

十四　自動織機

要說

一―自動織機を中心とした豐田佐吉の發明傳ともいふべき文である。前の讀本に出てゐた「陶工柿右衞門」と同じやうな味のある敍述である。全篇を通じて日本に於ける發明王ともいふべき豐田佐吉氏の發明に對する熱心な態度と其の苦心が、趣味ある筆致によつて遺憾なく描かれてゐる。第十二、振子時計に於けるガリレオの發明は「原理發見」ともいふべきものであるが、此の課に於ける豐田佐吉氏のそれは「應用的發明」とも稱すべきもので、兩々相對して子供の發明慾をそゝるに、恰好の敎材だと思ふ。

指導要點

一―豐田佐吉が國の將來を思うて發憤し、自動織機の發明と改良に努力した、其の熱烈な研究的態度と、其の發明の裏にひそむ苦心のあとを想像せしめて、兒童の發明心、研究心をそそるやうにしたいものである、尙我が日本人の發明的能力を知らせる。

指導上の注意

一―發明の苦心を中心として指導する。
一―手織機等の觀察を基礎として指導する。
一―豐田氏の愛國心に注意する。
一―自動織機は、近代的機械裝置で、普通人の理解を超越してゐる、故に苦心及び、發明的天才とに重點を置き、兒童には傳記等によつて、發明王の一面を見せる事にする。

十五　福壽草

要說

一―すつかりお正月になつた氣分を歌つたものである。お正月の氣分の象徵としての、福壽草、さうした意味の題目と見られる。三篇とも五七五七五のリズムを踏んでゐる、のんびりした正月氣分が横溢してゐる。

指導要點

一―福壽草に象徵された、のんびりしたお正月の氣分を味はせる。
一―此の教材を取扱ふ前後に於て福壽草の一鉢を教室にも飾つて兒童に直觀せしめる。

指導上の注意

一―心持を主として傳統的の心持を生かす。

十六　スキー

要說

一―スキー遊びの壯快さ面白さを描いた文である、表現態度は文中の一兒童が綴つた事になつてゐる「僕たち」とあるから同じクラスの誰彼が、野田先生に連れられて、朝からスキー場へ出かけて行つたのである。場面は北國の情景であるが、此の頃は雪さへ降れば全國どこでもスキーをやつてゐるから、あんまり、無理な材料ではない。文は時間を追うての敍述であるから、明瞭に文の段落を區分するのは困難である。

指導要點

一―兒童の生活經驗が豐にあるのであるから割合に良く行く事と思ふ。
一―スキー遊の壯快さ、面白さを味はせる。

指導上の注意

一―スキーに關する專用語は輕い理解の程度に止める。
一―面白さと知識の兩方面に注意する。
一―南國では紹介として取扱ふべきである。

十七　扇の的

要說

一―悲慘にして而も勇壯なる平家の最後は、我が國史上の花である。「扇の的」の一篇は實に、其の平家沒落史上に一段の光彩を添へた史實である。時は春の夕暮、今し落ちゆく太陽の、それにも等しき一家の運命を目の前に見ながら、悠々と船上

扇の的を押立て、敵をさし招く妙齢の佳人、源氏の手竝を試さん爲か、將又、自家一門の武運をトせんとの心か、けなげにも又あはれである。之に對し、武士の意氣地と、射手の選擇に氣を揉む義經、選ばれて辭する由なく、遂に責任を一身に背負うて、馬を乘り出した餘一、共に心中察すべしである。兩軍は各々鳴りを靜めて、餘一と的を等分に見る、やがて馬上の勇士は弓に矢をつがへて的をねらつた。矢はひようと弦をはなれて飛んで行く、あはやと見るまに、カチリと扇の要を射切つた。美しき夕日の前、扇はひら〳〵と舞ふて海に落ちる、にはかにおこる、兩軍の嘆聲、絃を叩く音、何たる美感であらう、壯感であらう、わけて義經主從の喜び、察するに餘ある。文章一篇を通じて此等の人物、場面、氣分といふものが如何なく現はれて居る。

指導要點

一—此の文をよませ、描かれた場面を想像させ、思ひを源平の昔に馳せて、文中に活躍せる人物、展開せる情景、そこらに漂へる氣分と言つた樣なものを掴む樣に指導したい。

一—文語文に對する親しみを養ひ且つ讀解力を養ひ、更に新出の文字、文句等について正しい收得をなさしめる。

指導上の注意

一—平家物語より取つた勇壯な教材が皆文語体で有る事に注意し、朗讀により味はせ、文体を感得せしめ、後日平家物語をよむ素地を造りたい。

一—壯美と悲美を兼ね、意志と情緒を縫ふて輝く、武士道精神に、兒童の心を共鳴させ、感激させる。

十八　弓流し

要說

一—扇の的と續きの場面であり、扇の的と、ならび稱せられる屋島合戰中の一美談である。文体も同じく文語文で、其の表

現面に漂ふ氣分も以て居る、ただ扇の的では主人公が餘一であつたのが今度は大將義經が主人公になつてゐるところが異なつてゐる。前文と同樣、原文は平家物語であり而も、扇の的と同じ日の出來事であり、餘一が的を射てからの事である。

指導要點

一—此の文を通して描かれた場面を想像せしめ、名を惜んで弓を拾つた、ゆかしい大將、義經の心卽ち、武人氣質といふものを味はせる。

一—文語文に對して讀解力を養ひ、親しみを持たせる事。

指導上の注意

一—爲朝の弓についての補說をなし、なぜ義經、身の危險を、おかしてまで落した弓を拾つたかといふ事を理解させる。

一—主從の間に釀される情愛を理解させる。

十九　物のねだん

要說

一—物價に對する一般的概念—即ち、物價は如何にして生ずるか、又物の價は如何なる理由で上つたり、下つたりするかといふことを、平易に分らせようといふのが、この文のねらひどころであると考へる、文の性質からいへば、科學的、論理的な說明の文に屬する。然し四年生に經濟上の原則を敎へようとするのであるから、其の表現には少しく苦心のあとが見える。

指導要點

一—物の價の生ずる理由、物價の上下するわけを、うなづかしめ、物價に對する概念を把握させ、經濟思想を培ひたい。兒

童の讀をして自然さうした點にふれしめる。

指導上の注意

一―前に、せり市などを見學する必要がある。
一―論理的展開の把握により、身邊の物の價に注意させる。そして、算術科に連絡し、日常の經濟を尊重させる。
一―文章の論理に注意する事。

二十　廣瀬中佐

要說

一―三章よりなり、一章は八行より成つてゐる。リズムの上から言へば各章とも、大體七七のたまりであるが、ところ〴〵に四、四即ち八の、たゞまりが混つて居るので格調自ら壯重なるものがある。生きてあらば尙邦家の爲に盡すべきを、七生報國を誓うた英靈は、今は空しく旅順港外に鬼と化した。其の悲壯な最後―それを歌つたものである。

指導要點

一―中佐の忠勇義烈に感ぜしめる。
一―韻文としての面白さを指導する。
一―文語韻文の形式指導をなす。

指導上の注意

一―中佐の忠勇仁を想はせ其の人格に觸れさせる。

一―唱歌の指導をなすこと。

二十一　ホノル、の一日

要說

一―海外教材に屬するものである。卷七の終りに横濱よりアメリカ行の汽船が出帆するといふ、教材があつたが、其の汽船がホノル、についた事にして書いてある。題目はホノル、の一日となつてゐるが、實はハワイの紹介である。ホノル、の町とハワイの風物と、ハワイに於ける日本人の活動狀況を紹介してゐる。

指導要點

一―ハワイ島の中心地たるホノル、市の美しい風光と、ハワイ島の景觀、わけても、日本人の活動進出の狀態をわからせる。

指導上の注意

一―面白い紀行文として取扱ひ、日本及日本人の發展に注意する。
二―國語の重大性を、さとらせる事。

二十二　コロンブスの卵

要說

一―生きて歸つて來る事すら危ぶまれてゐたコロンブスの一行が、思ひがけず新大陸を發見し、而も珍らしい土產を携へて歸つたのであるからイスパニヤ人の人氣が沸騰し、其の頂點に達した事は、想像に難くない、この事が祝賀會となつて現れた

ものであらう。而し、こんな場合によくあるが、美望と野次と皮肉とがごつちやになつた聲である。果して、コロンブスに對して冷笑する者が現はれた、而し、コロンブスの機智により、よく相手を制する事が出來た。而も皮肉に、相手の意表外に出て、完全に鼻柱をくぢいたのである、最後の言葉「諸君、これも人のした後ではなんのざうさもない事でせう」と言つた、この事が、コロンブスが心の中に持つて居た一切の事を含ませたものであらう。

指導要點

一―當時の航海業が、非常に幼稚であつた事を知らせ、其の時代に發見せられたのであるから、コロンブスが如何に忍耐と強固な意志を持つてゐたかをわからせる、そして彼の發見の如何に偉大であつたかを分らせる。

一―機智に富んだ諷刺が衆人の意表に出て彼の、冷笑者を顏色なからしめた場面を想像させる。

一―どこまでも面白く、印象的に深くよませる事、奇智と諧謔とを主とすべきで、復讐、應酬などを主とすべきではない。

指導上の注意

一―發明發見の緒は、ふとした思ひつきに端を發する事が多い、兒童をして、こんな作意にふれさせる。

一―劇的叙述である、この劇的なシーンを生かす樣に朗讀する事が大切である。

二十三　漁　村

要　說

一―第八晩秋と好一對をなす地方的鄕土的の敎材である。この文は漁業村の生活を細に生き〳〵と、描き出してゐる、原作は、千葉縣の一兒童の手になつたのださうだ。文は二つに分れてゐる。即ち、前文は出漁の場面で、濱から大きな漁船が出て行く前後の模樣が克明に書かれてゐる、後文は沖の網場の魚を船に積込んで陸に歸る場面である、前文は、客觀的な第三者の立場に立つて居るが、後文では作者自らが船中の人となつてゐる。大漁のふきながし、に一切を含めた、簡潔な筆致も又味がある。

指導要點

一―船が出てゆく、勇ましい、力の張りきつた氣分にひたらせる。

一―元氣一ぱいな漁夫たちの勇ましい活動ぶりを面白く、生き〳〵と讀ませる。

指導上の注意

一―前文は叙景文であり後者は生活文である事に留意する事。

一―漁村の生活で有つて光景ではない。生活の戰ひと叫びである、人々の協力と云ふ漁村特有の事を見のがしてはならない。

二十四　水　族　館

要　說

一―文は水族館見物の記といつたやうなことになつてゐるが、その「おぼえ書き」の一つ、一つが、立派な說明の文になつてゐる。さま〳〵の水中動物の生態が生き〳〵と、表現されてゐる、一個の理科的敎材である。このモデルになつたのは、東京帝大の理學部に附屬してゐる、三崎の臨海實驗所である。一篇を通じて、どこまでも、子供本位に、趣味ある記述ぶりをしてゐる點は、十分に子供の歡心を買ふであらう。

指導要點

一―水中動物の生態特色を理解させ、水族館及び普通の水中動物についての概念をはつきりさせる。

指導上の注意

一―文章表現は專ら活動を對象としてゐるから、このへんに、適切な工夫をする事。
一―理科的教材ではあるが、それが生活化、文學化されたものであることに留意する。
一―自然界の觀察力を養成する樣に心掛けさせる。

二十五　早春

要說

一―自由詩である、どことなく春の、けはひを思はせるやうな、物やはらかな感じのする詩である。陰氣な冬も終りに近づいて、地上のすべてのものゝ上に、春のけはひが感じられると、いふ樣な、早春の氣分を歌つたものである。全體三章よりなる、自由律の中に、さうした氣分がふつくらと出てゐる、この點を、よく味はせる。

指導要點

一―春來る頃の氣分と、いふものを體驗に基づく、自由想像によつて味はせる。

指導上の注意

一―句讀點に注意して、春の氣分を味はふ樣に朗讀に注意をする。

二十六　清水トンネル

要說

一―地理的教材である、清水トンネルが日本一長いトンネルであると、いふこと、それが一つの着眼點である、更に又、トンネルを境にして關東と北陸の地理的相違―即ち、自然の景觀と氣候とが、全然趣を異にすると、いふ紹介が、もう一つの大きな狙ひどころである事を看過してはならない、尙ループ線になつてゐる事も、紹介に價する、文のスタイルは、所謂、紀行文の形式を取つてゐる、一歩、一歩、新しい景色が、眼前に展開されてゆく、それを時間的に叙述したのが、この文の特色である、而して、文の三段目と一段目との敍述が自ら、照應の趣を成すところに、作意のあることを思はねばならない。

指導要點

一―長い事に於て日本一の稱ある、清水トンネル及び、そこにある珍らしい、ループ線を紹介し、もう一つは關東と北陸の自然の景觀と氣候とを、全然異にすることを紹介する。

指導上の注意

一―卷八の特色として、空間的なひろがり、地理的な發展を教材の上に現してゐるのであるから、本課は地理的な、意味に於ての、地方的鄕土的乃至は國家的な觀念を養ふ事に資したい。
一―尋五に於ける地理への有機的な聯關を計る。
一―文語的表現が、かはつてゐることに注意をする。

卷九

第一章　編纂概說

序說

本學年になると、隨分新しみのあることが感ぜられて來る。それは教材の程度が著しく引き上げられたことである。尤も程度と言ふことは文字や言葉の形式的方面ではなく、文の質乃至は內容的に考へて高くなつたと言ふことなのである。

これはこの學年に至つて子供の精神年令はも早、兒童期を脱して、少年少女期に向ひ、移動しつゝある爲なのである。教材の內容的に程度が高くなつたと言ふことは、說話教材に於ては今迄の物語中心より、歷史文學に進展し、自然文學、地理的教材は過去の田園や都市の生活描寫を主としたものが、感情、情緒の表現を加へて、地理教材或は、自然文學の域にまで發展し。科學的教材に於ては、理科的、發明物語的より、科學文化史或は科學方法、科學的態度の陶冶などにまで進展してゐる。文体から見れば文語文の增加が著しく、卷八の文語のぎこちなさを一掃して、內的に落ちついた表現になり、讀解力陶冶の時期に進んでゐる。

內容

一　文章

文語文―文語文の提出は卷八からであつたが其の量に於ても質に於てもほんに入門臭い所があつたが、卷九には文語文特有の味を遺憾なく現はして居る。出典に於ても。古今著聞集、徒然草、藩翰譜、宇治拾遺物語などからとられ、幾分現代化の手は加はつてゐるけれども、古典的の色彩が可なり濃厚で、これは亦文語文の發展として見逃すこの出來ない點である。

候文―「候」といふ言葉が武士の口語として用ひられることを示し、極めて自然的な行き方であり、型にはまつた固苦しさをとりのぞいて、味のある所を出してゐる。

和歌、俳句―日本文學の源泉であるとも見られる和歌に親しませ、國民文學を紹介し、國民精神の敎養に好影響を及ぼすことが多い、量に於ては決して多くはないが心境に迫る、兒童には親しみ深い感銘の深い、ものをあげ、形式的にも作つたと言ふよりも、歌ひ出さずに居られないあらはれと言つた樣な平易な語句で深みのあるものであることが感興を一層湧き立たせる。俳句は和歌と並んで國民の生出した文學である國民性情の秘みでてゐる我が國獨特の短詩である、これらの誦讀させることにより國語敎養上必要なものであることは和歌と同樣である。俳句は全部、一茶の句で稚氣に滿ち、創作的機運を高めてくれる。

議論的文章―議論的の表現は卷七八に於て部分的には出て居るけれども、卷九には全課として議論的樣式の文が出て、論旨が透徹れるための形式がよく出されてゐる。「國語の力」はそれで、具体的の事實をあげて、感銘を深からしめながら、國語を尊べ、國語を愛せよ、國語こそ國民の魂の宿る所であると結論に進めて行く。表現の形式が論理的に明瞭になつてゐる。一つの進展である。

紀行文―紀行文としては、卷八に「ホノルヽの一日」「清水トンネル」の二篇が出てゐたが、今度は「アメリカだより」「京城へ」「空の旅」の三篇で頁數に於ては全數の約五分の一に相等してゐる。「アメリカ」だよりは主として自然、風物、人情、文化を描き、「京城へ」では主として旅の情調をうつし出した。「空の旅」は今までにない作品である、眼下に移り行く繪卷物の如き下界の姿を敍したもので、立体的視界の展開である。

說明文―前の「つばめはどこへ行く」「物のねだん」が出てゐたが、卷九には「佛法僧」「星の話」「飛行機の發明」が出て、內容も單に說明そのもので終つてしまふのではなくて、科學的態度の養成、物の觀方の態度養成、等に着眼して書かれて居る、尙この外に說明文とも見られる樣なものは「軍艦生活の朝」「アメリカだより」「圖書館」「空の旅」國語の力等がある。

敍景文に感情の加はつたもの―全課として其の特色をあらはして居るものには「四月」「秋のおとづれ」で、今迄の文の樣に自然を自然として寫して居るのではない、印象的の敍景文とも言ふ樣な文で感情的の要素が濃厚に出て、情緒が表面に躍如として居る。その他部分的にこの樣な形で出て居る所は相等に多く、かくの如き表現法が全体としての新味を支配してる。

概して文章の傾向を言つて見たならば卷八までの內容的なもの（童話、神話、國史中心）から文學的な色彩をもつ卽ち、國語を通して文學的價値の重點に着目して、國語の力を强調してゐる。

二　機　構

本卷は前言した樣に、國語の力の養成を目的とし、その精神が全卷に貫流して居るもので、したがつて、本學年に要求さるゝ陶冶面は、一つに自學自習の態度養成であり、自學態度の精神的芽生えの時期である。この點によつて、兒童側と敎師側の二方面から考慮されて敎材の配列がある。又一つには敎材の特殊相に卽して指導の方法を工夫することが編者の要求點でありその方面からも嚴密に考慮されて大体次に見る樣な機構をなして居るものと思はれる。

敎材の內容形式の二方面からして見ても難易、長短の配合が漸進、循環的になつてゐる。第一第二には內容から言つては非常に入りやすい、しかも國語としての臭の高い味のあるものを出し「四月」はこの「春」への伏線と見られる連絡も考慮されてゐる。第三は一變して「飛行機の發明」を出し科學史的な引きしまつた、しかも語句に於てもどつ〳〵した樣な形式陶冶面の多いものを出してゐる。第四五は共に史實より取り文語文の陶冶を目標として、內容の深み、國語の味はひに注目して出してあり。第六には國文學としての純粹性を取扱つた和歌「手まり」を出して國文を强調してゐる。第七八は兒童生活に關係のあるものを出して文學的なこりからくつろいだ劇化された「小さなねぢ」「軍艦生活の朝」の樣な兒童の憧憬をとらへた文を出し、語句等にも形式的に重要ものが多く出されてある。第九、一〇は文語文で短篇であり武士生活を出し、四、五の「八幡太郎」「松下禪尼」の武士內面と連絡のある反復的出現とも見られる。一一の「雀の子」は內容的に一〇のものと深い脉があることも見のがせない。第一二は先めて紀行的ものを長し內容、量共に豐富に出してある、一つにも說明的な表現でもある所から、次の「佛法僧」とも連絡があり、物の見方に於ける入門とも思はれる。佛法僧は出色のある文で異彩をはなつた、科學的な表現、取材である。このあたりまで一つの大きなうねりと見られこの後も大体これと似た形式や內容で配列されてると見られる、勿論くわしく見ればこの一三までの間にも小さなうねりが見られぬでもないが。

第十四「いも掘り」「晴間」は一寸程度の差こそあれ形式的には第十二の「四月」「春の夜」の型に似てゐる。第十六「三日月の影」は本卷中第一の長文で前出の武士的精神を劇化して一層の感銘をあたへようとした。十七、十八の「圖書館」「星の

話」は説明文で内容も脉絡をたもつて居る。第十九「京城へ」は旅情を主としたもので本卷紀行文の中の無難な型をも敎へてゐる樣なもので後の「空の旅」等とは餘程かはつた味のあるものである。第二十、二十一「僕の子馬」「母馬子馬」は共に動物愛を取材としたもので他に愛國的な軍事思想もあると言はれるが、愛馬のことが中心になつて居ることは論を挨たない。第二十二「秋のおとづれ」は第一の四月と對して季節文の大關であり表現の態度も大体同じくしかも一歩進めた聽覺を中心にして、前出の叙景文を總括したものとさへも思はれる。二十三の「袴垂」は文語文の總括とも見られる程、落着きもあり、本格的な文語の特色を充分に現はしてゐる。第二十四の「ひざ栗毛」は始めての滑稽文學であるが、形式から見れば紀行的のもので次に來る「空の旅」と比較して面白い時代性がうかがはれる。「空の旅は」「佛法僧」と共に本卷の新しみのある點では好對のものである、平面より立体に引き揚げられた作者の觀察は確かに新しい。第二十六は詩の本性に近かづかしめた抒情的叙景詩で餘韻の多い、詩情の豐かなもので、「春の夜」「晴間」などの詩を一層高めたものである。第二十七「橘中佐」は近代武士の典型であると共に、軍事的、國家愛的の精神とも見られ、最後の「國詰の力」に對して外的愛國精神の一部であると見られる。最後は、本卷の結論であり、要旨の要約でもあると思はれる。理智的に進みつゝある少年期の兒童を捉へて、國語尊重、國語愛の根抵をきづきあげようとしてゐる。

これらを通して見ても本卷の機構が、系統的で、心理發展過程を考慮し、各教科、生活內容、等の縱橫の連繫を重視して組織されたことが知れると思ふ。

一　量　　形　式

舊讀本に比較して見れば、課數に於て二十五課に對する二十八課で三課の增であり、頁數に於ては、一二三頁に對する一七一頁で四八頁の增であるが、字數の點から見るならば、たしかに四割以上の增加となつてゐると思ふ。新讀本の系統から言つても、卷八に比して見れば字數はぐんと上つてゐる即ち卷八の一頁十九字詰九行に對して卷九は、二二字詰一〇行となつて、きつしり詰つた感じがある。

二　出　所

出所を概略すれば、各方面に求められるだらうが時代的に見て中世、近世のものから求めたのが最も多く、多く日本文學の古典的色彩のあるものから取つて中心教材としてゐる。外國に原據を置くものと見られるのは僅か一篇であらうし、それにしても殆んど日本的に直されて居ることである。

それから、極く最近の文化、科學的の色彩のある。叢書、少年讀物等、懸賞當選物等にも相當の出所があることは新しい行き方であらうと思はれる。

三　漢　字

新出及讀替漢字を見れば、舊讀本の一二九字に對し新讀本の一〇八字の二一字の新出字は減を示し。讀替漢字は、舊讀本の一三一字に對し一四七字の一六字增となつてゐる。

さらに新讀本の系統上卷八と對照して見るならば卷八の新出字一四二字に對し卷九は一〇八字で三六字の減である。讀替字は卷八の一一〇字に對して卷九にては一四七字の三七字の增を示してゐる。これよりして見ても新讀本卷九の、漢字提出に對する方針が舊讀本の行き方或は卷八の方針との差異について大要を知り得ると思ふ。

四　挿　繪

本卷に挿入されたものは一色刷のもので全部で三十四圖其の中寫眞刷が一九で、繪畫的のものが一三、地圖的なものが二である。そして寫眞刷の多く用ひられてるものは近代的な兒童生活に最も關係のある事象を說明する爲に、正確を期して出されたものであつて、科學的、說明文的なものに多い。次の繪畫は時代的に隔れのあるものを說明し想像、感興の誘發に用ひられて居る。地圖類は、外國主要地の位置や地形を示したり、星座の關係を數理的に都合よく示して理解をたすける樣に工夫して出されて居る。

第二章　各科の要說及び指導の要點と其の注意

第一　四月

要說

是は敍景文であるが、寧ろ敍景的感想文或は感想的敍景文といふ部類のものであると思ふ。こゝに四月といふ題目を擧げて春の聲を稍全面的に表現しようとしたもので大体三段の構想になつてゐることが知れる。

最初の二節は春を待つ樣な心持であるこれも、一節は序であつて第二節が具体的の表現に入つて居る三四節は爛漫として咲誇る櫻と共に浮かれる吾々の心持、春の日と春の狀況はこゝで絕頂に達してゐる。而も常に櫻に對して有つ吾々の感じは非常に慌ただしいものである、極く壽命の短い花に對して憧れをもつ日本人は昔から春を「しづ心なきもの」と感ずる行き方である。五節になつて花が散つてしまつたあとの春が描かれて、華かな對象から、幾分地味なすみれ、たんぽゝ、それから若葉の春に、一方は希望の若葉であり他方は、花の春を惜しむ心があらはれてゐる、日本人が古來から春に對して持つ感じを春の櫻を中心として自然を對象としながら變化して行く感じを描き出したのである。

指導要點

(1)文學的に觀照する目をこの邊りから段々と培つて行きたい。　(2)日本人の感情、情緒が春に對してどうであるかといふ小さな、國民的の意義も考へさして見たい。　(3)新鮮味のある表現、豐かな取材等について深みのある指導が欲しい。　(4)自然現象の變化と感情のうつりの機微を感銘させたい。

指導上の注意

(1)こういふ季節的な教材は地方によつて非常に考へねばならない。然しこの程度の子供なれば多少時期ははづれても、表面的に現はれたものを觀照しそれが鄕土の春とどういふ關係があるか、どういふ特色の差があるかを取扱ふべきである。　(2)四季の變移が日本文學の基調であることを考へて置くこと。　(3)文字語句、發音、アクセント、特に朗讀上落着いた詩の氣持の調子に注意。用語又は表現形式の新鮮味を發展的に指導。

第二　春の夜

要說

第一四月に於ては春を全面的に取扱つたがこゝでは春を一斷面とした瞬間的なスナツプで。春のかすかな歩みを感じさせると言ふ樣な極く新しい氣持の詩である。

詩體は自由な體で各聯とも三行、あとは自由になつてゐる、取材は四月上旬のある夜、しかも氣候の變り目で急に暖くなつた日の夕方である。軟風が南から歩寄つて來ると物音等が急に近くに聞えたり、浮やかに手にとる樣に聞えたりする。

表現の狙ひどころから言へば、この詩は非常に感覺的なものである。第一節には觸感によつて暖い快い中に赤ちやんがすや〳〵眠つてゐる、暖い晩に子供が無意識に手足を蒲團からはみ出してでも居るかの樣なもの視覺や感覺からして、それを聯想し具体的なものとしてこゝに現はしたのである。

次は觸覺からすつかり變つて聽覺の方にうつゝて「氣笛」「下駄の音」「笑ひ聲」となつて、これらが何んとなく浮き〳〵した春の氣持と結合して春のよろこびと言ふ樣な氣持が自然にあらはれて居る。

第三四節は、第一二節を統合し何を言はうとしたかをまとめたものが見える、この節は感覺的をはなれて更に突込んだ意味で、象徵的に現はして居る、こゝでは別にアネモネやチューリップの花が目に見えるのではなく視覺的感覺のあらはれを、視覺的觸感で今夜の春めいた晩を象徵的にそこに現はして結にした。全体が感覺的な感覺描寫の詩である。

指導要點

(1)新しい行き方としての描寫法、表現法等を味はせ、春の夜の情緒を感覺的に觸感して統合した文學價値を知らしめる。　(2)

自由律詩形の形式、表現法を知らしめる。 (3)感覺的な語句を吟味することにより、又は之を順序的に排列することによつて全体の統合した詩情を具体的にあらはして之を鑑賞の境地まで導きたい。

指導上の注意

(1)第一の四月に得た鑑賞眼を一層深めて行く氣持で指導したい。 (2)感覺的な重要語句指導に注意。 (3)朗讀上には句讀、訓點に注意して靜かに落着いてする。 (4)兒童の主觀的態度を養ひながら扱ひたい。

第三　飛行機の發明

要　說

是は自動織機、振子時計等と同じく發明物語である。飛行機の歷史を辿つて見ると、長くも短かくもある。それは人類が空中の大飛行をしようと欲望を起した時代から非常に長いし、近代になつてからの飛行機が活躍し出したのは驚く程短いと言ふことである。こゝでは特に近世に屬する範圍を極限して現はさうとした。唯一番始めに日本の話が出て居るが確實かどうか疑はしいとも言はれてゐる。しかしこゝに面白いことは幸吉が飛んだと言ふことである。飛行機の發明は、一つは飛行機の作成と言ふことと飛行機にのつて操縱すると言ふ二つがある。

この文は序として岡山の幸吉を出し、飛行機に日本人として關心をもち實現の可能性も濃厚であつたことを述べてゐる。

次にドイツのリ・エンタールの話、この人は西洋に於ける飛行機の父と言はれた人である。この人も一寸ライト兄弟に似た人で兄弟で飛行機の製作に努力した人である、この人に至つて初めて操縱が自由に出來ると言ふ確信を得たものらしい。この人は單に輕業師的な人であるかの如く言ふ人もあるが、空氣の抵抗なども科學的に研究して居るし力學なども研究して、後のライト兄弟には非常に影響したものである。

次にはラングレーの話、この人は模型飛行機の發明で實物では成功しなかつたが、これがかへつて科學的であると言ふので飛行史上に認められたと言はれてる。

次にライト兄弟の話で、この兄弟の發明上特殊な點は、動力をとりつけたこと即ちガソリンエンヂンを用ひる工夫と共にそれをどうして輕くするかと言ふ苦心がある、そして實驗の結果自分の工夫による複葉機を作つた。讀本の順序はこれらの逸話を年代順に排列ししかもそこに飛行機の歷史をも暗示してゐる、これは初めに述べた樣な發明物語であるが歷史的色彩が濃厚であつて又この發展過程が一つの重要な地位にあると思はれる。

指導要點

(1)文の中心は各段毎にあるのは勿論重要なものであるが、全文としての中心はライト兄弟の段にある。 (2)原文は「吾々は如何にして最初の飛行をしたか」と言ふオービルライトの手記に依つたものである。

指導上の注意

(1)挿畫は苦心したもので專門家の研究によるものであるから說明上注意を要す。 (2)この文にかゝれた歷史は比較的な年代で特に詳しい參考書などによつて研究した兒童には、確かな文獻の研究によつた上で說明する必要がある。 (3)各人物が發明した要點を年代順に整頓して各時代に關連して舊が新を生む發明發見の態度、定型を知らせることに注意。 (4)語句、文字の指導には特に時代性を考へて正確なる說明、指導を必要とする。

第四　八幡太郎

要　說

この文は尋常小學口語讀本の卷五に口語文で出て居たものを文語文に改めたもので、文語文にして始めてこの教材の味が出る。原據は「古今著文集」に出たもので「武勇」の項になつてあるがこれはむしろ、義家の人を見る明、それと如何にも寬大な態度であつたと言ふことが明かの樣である。

讀本の文は野原の狩に出た一寸した事件をとらへて、義家の人物をあらはしたものである。始めに義家が宗任と共に狩に出

たこと、狩中に狐を一矢のもとに氣絶せしめた弓術の妙技。次に狐が氣絶したこと、次に宗任に矢を背を向けたまゝさゝせた。これを家來達の心配な氣持をとらへて、義家の剛膽、度量、信賴を一層强くあらはしたものである。

指導要點

(1)此の物語を通して、描かれてある場面を想像せしめ、武人としての義家個人の風格の偉大さを偲ばしめると同時に、日本武道、日本武士の精神の深く如何に淸らかであるかを感得させたい。 (2)文語文としての妙味を味得させ、併せて文字語句の確實なる習得をなさしめる。 (3)義家、宗任の關係を史實を背景として知らしめ、兩人の心持が、この場合かくあつたことが……と考へさしたい。

指導上の注意

(1)當時の武士生活や、時代性を、史實によつて一應知らしめること。 (2)深みのある思索的な態度で心の動きを見て行く指導をしたい。 (3)問答上特に注意して指導すること。

第五　松下禪尼

要說

前課に續いて文語文で出してあり、しかも中世武士の生活を取扱つたことも、深い連絡が見出せる。この文は武士の內面とも言ふべき處で、ねらひ所は、鎌倉武士の質素を重んじた生活で、その主要人物が將軍母である高位のしかも、女性であることからして一種の教訓であることは見逃せない。なほ史實を通して鎌倉武士の特質を思ひ見るならば「此の母にして此の子あり、此の執權にしてこの時世あるかな」と思ひあたるであらう。

指導要點

(1)義景と禪尼との問答を通して禪尼の心境を味はせ、文の作意にふれしめ、當時の場面をも想像させる。 (2)文語文として、特に問答の部面などは暗記し得る程までに文そのものになれさせたい。 (3)文字、語句の確實な習得、使用に馴れさせたい。

指導上の注意

(1)全文は短く大體一時間を單限としてあるから注意すべきは味得と言ふ點にあると思ふそれ故形式陶冶はおろそかになり勝であるから、前課と連ねて、文語文に對する、しつかりした心構をつくることが着眼點と思ふ。 (2)指導順序に注意して史實の挿入により教訓としての內在力を感知させねばならない。

第六　手まり

要說

和歌である、「第十一雀の子」の俳句と共に始めて出たものである。日本の純粹な文學と言ふものが國語教育を通してあらはれたものと見てよからう。教材は何れも良寛の作で三篇の和歌、一つは生活の一部として手まりをつくと言ふ記錄的な風がある、一つは手まりにとけこんだ心境で良寛の稚氣溢越が知れ、最後は敍景として、前二句の底を貫く良寛さまの風格、即ち純性、素朴それで圓滿な、獨自性のある迫力をもつて、佐渡が島山の景を遺憾なくあらはしてゐる。

指導要點

(1)和歌の一班について說明したい。 (2)朗詠と言ふことをおぼろ乍らも知らせ、形式上の音律と、內在する律動を感知させたい。 (3)良寛の人物について略傳を知らしめ、同時に參考として彼の作品を擧げて見たい。 (4)形式陶冶の部面にある文字語句の發音、用法アクセント等が歌の雰圍氣をつくる爲に大切であることを指導したい。

指導上の注意

(1)理窟を抜きにした感味の態度で聞より入れることを注意する。(2)和歌を始めて見た目には句とすることよりも散文とした風に見ることが多くあるから、句一つで獨立ししかも獨自の價値や溜さのことを深さのあることを知らしたい。(3)和歌の概念について極く常識的に與へる。

第七　小さなねぢ

要　說

もと卷十二に出てゐたものを極一部の語を換へて卷九に出したものである。敍述の上から見れば擬人的態度によつて劇的物語の形態をとつて表現されてある。「小さなねぢ」を主人公とし、時計屋の主人、子供を配して物語の筋をさま〳〵に發展せしめてある。

然し文の主題とするところは全文を通して內在するもので、筋の變化、發展も結局この作意のあらはれに過ぎない。この主題は一寸教訓めいた「小さものは小さいなりに社會を構成する重要なものであるから、悲しむことなく天分を完うすべきである」と言ふのだがこれが表面に露骨には出て居ないから、面白く讀み得るのである。

ねぢが一喜一憂したところの心理描寫は思はず、引き込まれる所があり、劇的なものであるが進展の順序が明瞭であるので理解の上から言つてもそう困難なものではない。最後が夫々の役者に皆滿足をあたへてゐる。

指導の要點

(1)人格化された「小さなねぢ」の心持を味はせると同時に、小さなねぢになり得る心境をつくりたいと思ふ。(2)文字、語句の正確な知識を與へること、假名遣等について正しい習得をなさしむ。(3)朗讀上抑揚により文の氣分を表はすことが必要。(4)感情移入による文のつくり方、表現法等の形式方面、作文的な方面も陶冶する。

指導上の注意

(1)事象の變化、境遇の變化、によつて心理狀態が種々に變化すること、又、變化の機微をとらへたことに着目すること。(2)個人と社會と言ふことを指導者自身しつかり關係づけて理解せねばならない。(3)文の組立から考慮して、指導の順序を段階的に立て內容を事象の變化と心理の變化とを對照として板書することが必要である。

第八　軍艦生活の朝

要　說

此の文は舊讀本卷九にあつたもの、一寸語句の改められた所も見えるが殆んど同じ樣なものである。挿繪が全部變り寫眞風なものとなつて朝の氣分を釀し出してゐる、文は敍景的敍事文で、全体を貫いて、海の護り海軍の生活、力强い規律的な日本海軍の生活が、朝の一部にはあるが如何にスタートするかと言ふ點からも見られて一種のたのもしさを感ずる、文の構成は時間の遷りによつて生活がうつゝて行くことが明瞭に表現されて居る。即ち、第一段は夜明方のまだ早い光景で肅然とした中に落ついた無限の底力を感ずる、第二段は將に活動が始まらうとする前の緊張し切つた場面である。第四段が甲板洗の共同作業の勇壯な規律的な場面を描いてる。第五段は休憩、食事の樂しさ。第六段軍艦旗揭揚の嚴肅な緊張した場合で、今後力强い一日の訓練を豫想させ乍ら結んである。一部の生活ではあるが軍隊の氣持を知れる樣な文である。

指導要點

(1)全体としての文字、語句は相當量的に見て豐富であるし、新字、讀換文字も多いから形式的讀みにも注意を要する。(2)本文を通して軍艦生活の樣子と、それより受ける規律的、男性的な氣分を味はせる。(3)文意と挿繪とを對照とし又、參考寫眞繪畫を通して軍艦の一班や、其の生活狀況をも知らせたい。

指導上の注意

(1)文の長さの割合に區分は三時を目當として行ふから、指導計畫には特に留意を要す。 (2)文段の中心語句をとらへて、その間に於ける氣分の動きをさぐらせる。

第九　馬ぞろへ

要　說

山内一豐出世の物語で、文体は時代的雰圍氣をつくるにふさはしい文語文である。この文の中心となるものは妻の内助の功で、武士の娘としての教養、武士の妻としての貞順、心の用意と言つたことが中心である。文の内容を順序によつて探つて見れば、第一段馬を欲しい、しかし貧しため買へない。第二段は殘念が悲觀に變つて妻に愚痴をこぼした、生活難にあらはれた欲望抑制による悲痛な面。第三段は大金を得て目的がかない、欲望が達せられた。この裏にある妻の思ひやりと周到なる心掛が一豐を踊らせる原動力をなしてる。第四段が馬ぞろへの場所に主君のおほめを得て、武士の面目をほどこす、と言ふので全休を一貫して、この妻ありてこそと言ふ感じがする。大きく見れば日本家庭の夫婦生活に於ける精神的結合の言へ得ぬ純性さもあらはれて居る。

指導要點

(1)文語文の讀解に馴れしめる。時の助詞には特に留意すべきと思ふ。 (2)こゝに描かれる場面を想像せしめる。その場面に活躍する人物の一人々々について心理的の動きを味はせる、 (3)文の筋について味はせる。 (4)特に妻の心掛について、日本武士の妻としての心掛を味はせる。

指導上の注意

(1)指導の順序を考慮して、時代的な氣分をつくり實際の場合について參考畫等も見せて武士生活を知らしめる。 (2)文法上の

意味と文解釋上の意味を調べる爲、原據について史實的にも考究して見る必要がある。

第十　松平信綱の幼時

要　說

前課と同樣形式的には文語文であり内容的には、教訓的の意味を含んだ、武士生活を題材として居り、原據も同じく「藩翰譜」から出て居るもので、信綱の幼時でありながら、三つ子の魂百までものゆるぎなき誠忠を扱つたもので、子供ながらあくまで主人の命を守り罪を一身に引き受けた心構で、將軍の命と言へども、主人の罪名を出すことが、結局自分の罪である苦しさからの考へもあつて、又一つには武士に二言なしの家庭教育のあらはれ殊に、將軍家に仕へる人物の精神、教養等も多方面から覗はれる、が、本文を通しで感銘される所のものは、主從の絶對と言ふことと信綱の鐵の如き信念貫徹の意志の强さ、特に忠誠と言ふ場面を通してのものと思はれる。

指導要點

(1)物語を讀むことによつて描かれた場面を想像すると共に、弱年ながらあくまで主人をかばうて罪を一身に引受けた長四郎の義心にふれしめる。(2)文語文の調子、文の味ひ方に馴れさせ、併せて文字語句の確實なる習得をなさしめる。 (3)史實物語を通して劇的構成の要素となる、時代、場面、人物、等を考へさせる。

指導上の注意

(1)　文語文の形式的指導にはそう力を入れず、内容の深究に重點を置いて指導すること。 (2)時間の利用に注意して當時の將軍職や武士の精神生活についての話を補つてやる。

第十一　雀の子

要　說

こゝには小林一茶の句を五つ出した、題については、雀のことについて前課との連絡を考へたとも思はれるし、五句中前の三句が雀の子について詠んだ所から、雀の子の題を附したものと思はれる。俳句そのものから言へば、一茶の句は他の諸俳句に比して獨自性があると言はれる、それだけ一茶自身の人格や、生活、風味の少しく個性味の強い句がする。こゝに出されたものは全部兒童に親しみやすい動物のことから、一茶の同情的見方が敍景的詠法のうまさと合つて、感銘させられる。

指導要點

(1)此の俳句を通して一句一句に滿ち〳〵た味や力、を感得させ、句のもつ場面を想像させ句の面白味、一茶の生活の一面等をうかがはせたい。　(2)俳句の概念を知らせ、基礎的な知識を與へる。　(3)俳句朗讀の調子を授け音調より來る味ははせ、深さ等も感得させる。

指導上の注意

(1)俳句の史的變遷の大要を研究し、日本文學の特殊性が多分に含まれた個有性のある韻文であり、ある時代の要求から生れた、根本を探し、民衆文學としての最高である、發展性のあるものであることを知つて指導する必要がある。　(2)兒童は連想が強く、各句の獨自的な意味の强さよりも、前の句があつて後の句が生れたものゝ樣に散文風に見ることが多い。この句でも雀の子は全部一句に現はれた雀が二句、三句の雀の子と同一であると連想をつゞけ發展性のないものに陷る場合があるから注意を要する。それで雀と人、雀と馬等に於て如何なる場合があるかを考へさせ、どんな場合に、この樣な言葉の表現がひつたり合ふかを吟味せしめて味はつて行く樣にすべきであると思ふ。

第十二　アメリカだより

要　說

此の教材が卷七にあつた「横濱港」卷八にあつた「ホノルゝの一日」に聯關したものであることが知れる、內容を貫く精神は海外發展の誘導を目的とした外國事情の紹介である。手紙文の形であるが立派な紀行文である、各地からの代表的の小題目を設けて、彼の地の自然、風物、人情、文化等を見ゆる樣に面白く描き出したもの、各地の特色がよくあらはれてゐる。第一段には前回の連絡をとつて自然的書き出して、ハワイからサンフランシスコへの航程が述べてある、第二段が世界一を誇る長橋の壯觀、第四段がサンフランシスコに於ける日本人の活躍ぶりで外國人と比較して發展力のあることや彼我の長短とも見られる所も織り込まれてある。第五段ロスアンゼルスから、地理的に見た西部海岸の樣子までよく手にとれる樣に見えるし日本の農民の働き振り等も旅情をたゝへ乍ら書かれて面白く懷かしみが出て居る。日本人の活躍や評判が、オリムピックの運動を通して彼等に印象づけてゐること。次にシカゴの純米國的な都市の紹介で、雜踏騷然な活動場で都市の建築物道路等もよく其の米國流を發揮してゐる。五大湖に臨んだ商工業の發展的都市であること。次が米國裏面都市とも言ひたい樣な黑人と屠殺場の紹介で、その殺風景や此の世の地獄などといふことがよく物語つてゐる。次にニーヨークの純米國都市を紹介してゐる即ち高層建築、立体的交通圖、海陸兩方の重要な埠頭がそれをよく物語つてゐる。

指導要點

(1)各都市の特色を握らせる、海外の同胞がいかに活躍しつゝあるかと言ふことを考へる。　(2)表現法が單なる說明に終らずはなれ難い書きぶりである所にも鑑賞せしめる必要がある。　(3)新出文字語句の確實な習並に用法について應用的に發展せしめたい。

指導上の注意

(1)全体より見た指導計畫を基礎として、部分的精密な計畫を樹立すること。　(2)地理的の補說に注意して多過ならず、過少ならず時の配分を考慮して中心價値を生かして行くこと。　(3)最後に全課總括として取扱ひ米國都市の各々の特徵を比較すると同時に所謂米國の氣分を味はつて行くことに注意したい。

第十三　佛法僧

要說

我國の名鳥であり、千年來の不可思議な神秘的な鳴き聲の鳥が、最近の知識を傾倒して姿の佛法僧鳥の、聲の佛法僧鳥の二つが鮮明された一種の科學的な說明文であるが、文辭の平易巧妙なこと、材料の珍奇淸新なことで從來の說明文の型からは一歩出色した好敎材である。第一段には佛法僧の由來、場所、時期などについて書き好奇心を捕へてゐる。第二段は鳴聲を聞くことの神秘さである、環境にしつくりして音調の神秘なことを言つてる。第三段は姿の佛法僧について紹介し、一時佛法僧とはこれなりと調査の手を休めた、鑑賞の位置に止つてしまつた。第四段がそれを一歩踏込んで科學的に佛法僧と名づけた鳥が眞に鳴鳥としての佛法僧でないと疑問を提供した。第五段はその疑問が文明の利器を通して見事的中し聲の佛法僧が他のこのはづくと呼んで居た鳥であつたことが知れた。第六段は結論として、我國に二つの名鳥が生れ出たこと、一は美しい姿の佛法僧、一つは聲の神秘的な佛法僧であることなのである。

指導要點

(1)我國古來の名鳥佛法僧に疑問が最近起つて姿の名鳥と聲の名鳥佛法僧とがはつきりしたこと。(2)學問としての科學的研究がある問題を解決するに必要であることは言ふまでもないが、その基礎的な事實を根柢として、種々なる方面より之を見て行く態度がより必要であると感得させたい。(3)新字語句の確實なる習得、應用。

指導上の注意

(1)各段を部分的に見て、次に來たる展開路を發見せしめ、科學的說明文の特性を生かしたい。(2)見る、聞く、觸る、臭ぐ等の感覺器官を通して科學的に基礎づけることの必要なことを味得させる樣に注意したい。

第十四　いも掘

要說

一つの生活文とも見られるもので、學校作業、農業實習、としての馬鈴薯掘の實況であり全文を通して流るゝ氣持は「喜び」である、先生も生徒も各自の作業は勞働ではなくて喜びを發見開拓して行く樣なものである。文の機構についても兒童にはよく親み易い作文の樣な固まらない文である。初めは、いも掘の命令と仕度―喜びの出發。次にいも掘の實況その中に精密な觀察が織られてゐる。次に驚きの聲、感嘆の聲で喜びの絕頂と見られる、最後に先生を出して喜びの中に結ぶ。

指導要點

(1)文を精密に讀むことによつて、場面を想像させ、此の文を通して喜びの中に面白味を味はせる。(2)文の構想順序からしていかに面白味の度が展開して行くかと言ふことを味はせる。(3)文字語句、誤り易い漢字の指導、應用練習に着眼する。

指導上の注意

(1)特に觀方、記述ぶり、に注意して作文との連絡をとる樣に。(2)作業に對する兒童態度を本文によつて語らすの中に訓練する、取扱上の工夫を要する。

第十五　晴間

要說

五月の雨の晴間を見出して大自然の偉大さ、神秘さをつくゞゝ味はつた敍景の定型律文語休の詩である。用語や表現の形式に於ても周到な用意を持つて迫る樣な力を感じ得る。詩は四節に分かれ、第一節には晴間の野の輝きを氣持よく現はし、二節には五月雨後の實感もよく出て聽覺を通した快調がひゞく。三節には遠山を見渡し近景の田の綠と相俟つて心はるゝゝのよく

統一をとつてゐる。四節は目を足元に落して落ちついたしかも自然の生命の力をぢつと眺めてゐる。

指導要點

(1)詩の讀みの音律と語調より來る詩の味ひ方の指導。　(2)挿繪と文との比較によつて詩情を味はふ。　(3)新出の文字、語句等について正確なる習得。

指導上の注意

(1)形式にとらはれぬこと。　(2)解釋的註釋的にならぬこと。味得的に導入すること。

第十六　三日月の影

要說

本教材は武士の生活を描いて、內面に潛む武士の意氣地とか武道精神を現はしたもので少しく劇化した場面があり物語風もあつて興味深く、新しい型で讀み得る樣に出來て居る、山中鹿之介の生涯は、僅か三十四年に過ぎないが波瀾重疊の一生で、史實に起つたものは可なり輻輳してゐる。その中から、代表的な五つの場面を撰んで、鹿之介の節義、武勇が目前に見る如く描かれ、その中に七難八苦にひるまぬ堅き意志がよく一貫して居り、物語の筋も變化に富み乍らも、生涯の事績の大要を連絡して生涯繪卷を展開して居る。大体小題目について擧げて見ても變化を統一のさまがよく覗はれる。第一に重代の胄をあげ兄や母の敎へ、鹿之介の決心。第二に一騎打武士の意氣地、武士の戰ふ精神の言はれぬ氣持。第三の苦節、衆と衆の爭ふ壯烈、初志貫徹への內面苦鬪、耐へ通す苦しさ。第四は上月城尼子方の滅亡の悲しさ、然しながら初念をすてぬ鹿之介の鐵石心。第五が鹿之介の悲壯な最後で甲部川の川中に其の三十六を一期にはかなく散つた。敍述の法も精錬された筆致で多分に餘韻をもち感銘せしめる敎材である。

指導要點

(1)武士道精神、武運非なるも主恩を忘れず、七難八苦にあへぎながら尙孤忠を完うせんとし、自己の初信にそむかず、倒れてなほ止まざる男子の中の男子、鹿之介の精神力にふれさせ、表現のうまみを十分に味得させる。　(2)語句の難解、讀みの困難なものに留意して、意義、用法をも知らせたい。

指導上の注意

(1)指導計畫、特に區分時間の配當に留意し重點を明瞭にしたい。　(2)原據も多數ある樣であるが大体「雲陽軍實記」「山中幸盛傳」山口美道氏著などの二種を參考とし、敎科書を中心として補說の程度に說話すればよい。　(3)讀みに於て個有的な訓のあることに注意したい。

第十七　圖書館

要說

形から見れば一種の兒童文であり、題材から言へば都市的な色彩のある文である。時は七月の星の美しく見る季節で中村君と言ふ少年が天の神秘さを憬れて研究しようとし圖書館を訪れた所であるが。內容は圖書館と言ふものの設備や、貸出しの方法について、わかり易く書かれてある。即ち始めに圖書館に行く動機、次に圖書館につく、次に書名の撰び方と其の手續順序。次に出納手から受取る。次が閱覽室の樣子。次に休憩室の樣子、他に松本君と言ふ少年を配して羅列的な說明のいやさを消してゐる。次が窓の外の初夏の樣子によつて無理なく結んでゐる。

指導要點

(1)圖書館とはいかなる所か、書物の閱覽に要する手續、讀書の心得等を知らしめる。　(2)新出文字、讀替漢字の書き、讀み

意義を習得せしめる。

指導上の注意

(1)文機構を考へ説明的な内容を生かす樣に取扱ふ。(2)兒童を中村君になりきらせることが必要と思ふ、しかも最後には、全体をまとめて内容理解、文姿態の鑑賞にまで進め、兒童文と綴方との連絡をも考へさせる着目が必要である。

第十八　星の話

要説

此の課は星に關する種々の説明で、文の進め方も論理的に進められて居る。前課はこの課に對する一つの伏線とも見られるものである。舊白讀本にも出てゐたものであるが、今度のは物語風でなく、純粹の説明文である殊に科學的見方によつて理論が統一されてゐるが、方法に於ては平易で明瞭でよくわかる樣に書かれてある。即ち第一段には初夏の空を仰いでの感想と、それによつて疑問風の問題を提示した。第二段には疑問解決への第一歩を進め、抽象から、具体への過程を辿つてる第三段には、其のあり場所の發見法を説いてゐる、それには北斗七星を見つけ出させようとしてゐる。第四段は最初の大事な星北極星であることと其の見つけ方。第五段が北極星の重要性を説く。第六段以後は星の位置、運動、星座等について書いてある。

指導要點

月や星の天空に對する驚異、不思議について星の位置、運動、星座等の科學の初歩としての知識をあたへる。同時に純粹文明文の讀解力、科學的考究論理等についてもその基礎をつくるべきである。(2)科學的な評發、自然科學的基本の名稱等について明かにする。(3)新出漢字、讀替字等の意義、書き方、用法等について授ける。

指導上の注意

(1)文の性質が科學的な見方、考究上の基準に制限を與へてゐる的に注意。(2)參考資料によつて理論づめになりやすい點をすくつてやる着眼の必要。

第十九　京城へ

要説

釜山から京城まで兄弟二人が旅をした紀行文である、書き出された素材からしても朝鮮の樣子がよくわかる。筆致もむだがなくしかも。紀行文として陷りやすい無味乾燥の單調をやぶる爲に金さんを入れ對話によつてうまく運んで行つてゐる。一面から內鮮融和の示唆が織り込まれて居る。大きく段落を見れば第一段が釜山から大邱までで一歩を踏んで朝鮮らしいと言ふ印象が强く出てゐる。第二段は大邱から大田までと見てよからう。急行列車の情景も目に見える樣だ。第三段大田から成歡まで、主として風俗的に朝鮮の特色をスケッチしたもので情緒がよく出てゐる。第四段成歡の懷古を見られる、日清戰爭の昔と今の朝鮮、內地とのうつり方も思はれる。第五段は水原より京城まで漢江の鐵橋をもつて惹きつけ餘韻をのこして結んで居る。

指導要點

(1)本文を通して朝鮮の風物を紹介し、紀行文としてのうまみを味ふこと、內鮮融和と云ふことをほのめかす、感じさせる。(2)語句、文字の形式陶冶をなす。

指導上の注意

(1)朝鮮事情の地理的研究をして、兒童の地理的發展をなさしめること。(2)他の紀行文と比較して本課の主眼特色を生かすこと。

第二十　僕の子馬

要　說

愛馬の養育經過を敍した文で。子馬に對する愛情が一篇を縫うて流れてゐる、これこそ文の中核である。第一段には「僕の子馬」と言ふ愛と悅びの氣持があり、この氣持が最後まで一貫してゐる。第二段には生れた子馬の狀態や、作者の希望である。第三段は飼育上の注意と見るべ所である。第五、六段は放牧にやつて自分の家に歸るまでの經過である。第七、八段は愛育振りである。第九、十段は二歲駒になつて放牧に出し歸宅するまで。最後の段は愛馬の成長、訓練、愛育の感化をしめしてゐる、文材は東北地方にとり、愛馬の精神と共に、軍事思想への發展基礎とも見られる。

指導要點

(1)表現を讀ませることによつて、馬の養育に關する常識を高む。(2)愛馬の心持、愛馬の發育ぶり。(3)國民一般の家畜愛養する精神の養成。(4)內容の研究により、一歲駒より二歲駒の區別、放牧のこと。(5)文字、語句の陶冶。

指導上の注意

時期、八月の上旬を基本としたもの、場所は東北地方で、一年半ばかりの昔を返振つた回想錄であること等に注意。

第二十一　母馬子母

要　說

前課に聯絡して馬を文學的な氣持で現はしたもの。童謠風のもので、實景と言ふよりも浪慢的なもので、七五調の子供らしさがある。詩材は夏の夕方、沼の岸、柳のかげ、母馬子馬、を採り、母馬の子馬に對する愛情がよくあらはれてゐる。

指導要點

(1)詩の句をとほして、夏の夕、沼の岸邊の柳の木かげで水を飲む母馬子馬の愛情、あたりの情景を想像せしめると共に、表現のうまみを味得させる。(2)語句の意義を明瞭てする。

指導上の注意

(1)讀み味はう態度で朗讀上にも注意する。(2)詩の場面の想像、詩のリズムの鑑賞。(3)挿繪と連絡、繪畫的表現で効果を出すことに注意。

第二十二　秋のおとづれ

要　說

第一課の四月と對相して秋の極く早いところを狙つた。敍景文の中心をなすものは蟲の聲で、種々の蟲の聲を出して時節を辿つて行くことによつて、秋が段々深まつて行く氣持がする。いはゞそれが音樂の主體で、一方にはまだ夏らしいといふ氣持で前半の伴奏としてある。即ち第一段に短句をもつて「秋」の氣分をしつかりと出してゐる。第二段は秋來る前の殘暑の烈しさ、しかしおし迫る自然の力が秋を感じせしめる。第三段筆致のとゞのつた迫る秋のものがたり。觸覺的方面までも逃さない感覺は鋭い。第四段は多數の蟲の聲をもつて、忍びよる秋を次第に明らかにしてゐる。第五段が秋である。自然の景物や生活上の心の動き等で秋を結んだ。

指導要點

(1)蟲の聲を中心として、おとづれる秋の敍景文を通して、自然の觀方、表現のうまみを味得させる。(2)重要語義を明かにする。(3)新漢字の讀み、書、意味、用法。

指導上の注意

(1)時季に注意、常識では九月であるが、暦上では立秋が八月上旬であり、支那大陸や内地でも秋らしい微かな歩みが感ぜられるのは八月中旬頃よりと見てよい。 (2)文内容を自然物の動き、特に虫の聲のひびきの特徴に注意して秋の深み行くことを感じさせる。

第二十三　袴垂

要　説

武士が笛を吹いて月夜の晩、靜かに歩みを進ぶ、それを當代隨一の盗人の大將がつけねらつたが手足を出し得なかつたと言ふことで、表現的な効果が内容の興味をさらに增してゐる。保昌の落着いた、優しい態度と、袴垂のあわてた態度で、二つを比較せしめる樣に表現してゐるのが面白い。又これを通して藝術の偉大さ、人格の力などや、人間の良心的芽生えなども敎へてると見られる。第一段に物語の發端で、武士に盗人が會ふ。第二段は袴垂の自信や決心の動きと保昌の心の動きを比して第三段と結んで本篇の最高調で、しかも文の中核である。

指導要點

(1)保昌のえらさ（剛膽、藝道）を感得させる。 (2)文語と口語の比較により、文語文の味を知らしめる。 (3)語句、文字の形式陶冶。

指導上の注意

(1)原據「今昔物語」「宇治拾遺物語」も一讀して本文と比較。 (2) 中心、重要語句を抽出して袴垂の心の動搖變化を知らせる工夫。 (3)挿繪說明上時代的概念も知らせる。

第二十四　ひざ栗毛

要　説

是は始めて出された諧謔文學で、笑話類とはよほど變つた趣をもつて書かれてゐる。十返舍一九の「東海道膝栗毛」の中の三つの場面をあげ、三つの滑稽を、一は未知の失敗、二は計畫的失敗、三は計畫をして失敗したものである。それから昔の旅と言ふ歷史的な氣持が一つに、劇としての意義が一つ、文學の傑作と言ふことの三つがある。次の課と連絡することも述べられ、旅の見方と言ふことも考へてゐる。

指導要點

(1)ひざ栗毛の中心人物である、彌次郎、北八の演じた滑稽味、可笑味を味はせたい。 (2)昔の旅の有樣を知らせ今の旅と比較させたい。 (3)文を喜劇として扱つて見たい。 (4)日本文學への橋渡しとも考へて指導。

指導上の注意

(1)指導計畫の立て方は全體と部分の兩面を見てなすこと。 (2)對話體の語句には特に注意。

第二十五　旅の空

要　説

飛行旅行の感想文で、速い旅である、速度と言ふことゝ場所の急轉廻と言ふのと、高所より下を見た觀點の差異と言ふ所をとらへて書いたもので、場所から言つて、羽田飛行場から大阪飛行場まで、時間で言へば大體二時間と四十分程、變化の情景を巧妙にとらへてゐる。第一段で作者の心境を語つて、しかもこの感情が全文を縫つてゐる。第二段には旅客機を手際よく簡明に說いた。第三段には出發の光景、第四段下界の展開を各場所の特色をとらへて敍して居る。第五段下界と遠望の景色を視

覺色覺をとらへて活々と書かれてゐる。第六段は機内の筆談により、七、八段にかけて箱根附近を説明して居る。第九段からは水を主とした駿河灣、富士川、三保の松原などをかき。第十二段から又陸地の光景に轉じ第十五段以後は名古屋着陸までと、第十七段からは名古屋發大阪着まで途中鈴鹿越え、大和、大阪の平野、大阪市街の名所を出してゐる。しまりのある新しい文學の臭がある。

指導要點

(1)空の旅と言ふ紀行文を「ひざ栗毛」の昔の旅と比較して、現在の旅の速さ、便利さを考へさせる。 (2)文表現のうまさ、題材の捉へ方の巧妙さを味はせる。 (3)主要語句の意味、用法、書き方等を指導。

指導上の注意

(1)長い文であるから指導計畫分區的に立てること。全体的に統合することに注意。 (2)景物の變化をとらへさせることに注意。

第二十六　もくせいの花

要說

敍景詩と言ふより抒情詩といつた方がよい。木星の花の香によつて昔の先生を偲ぶ。餘程感覺的な關係がそこにある、香とか音とかといふものが非常に昔をあり〳〵と偲ばせる。その所がこの歌に生きたものである。第一齣には昔の花が同じ樣に今年も咲く直觀。第二齣木星の花、香が人の心を引きつける。第三齣は木星の花から去年別れた師の聯想をしてゐる。追憶の感情が托せられてゐる。

指導要點

(1)もくせいの花とそれによつてよび起された作者の追憶とを、詩の句によつて味得させる。 (2)文語詩の妙味は口語体とは異なる點があることを了得させる。 (3)語句の意味を特に明らかにする。

指導上の注意

(1)文機構に注意して感情の動きをつかませる、特に朗讀上息の切り方、續け方に注意。

第二十七　橘中佐

要說

現代武人の生活にふれさせる目標で書かれて居る。軍神、橘、と言はれる中佐の人格は戰爭に於ける勇壯さのみでなく、平生の精神生活に於て努力されたことがより大であることを知らしめることが編者の意圖とも思はれる。文は最初から突如として戰場のことを記述し、悲壯々絶の樣がよく手に取れるようであることゝ、その最後に於てまでもひるまない力强さが平生の生活行爲から生れ出たことを最後の段で結んである。

指導要點

(1)君國の爲、一身を捧げた橘中佐の壯烈なる死を、表現によつて讀みとらせる。 (2)軍神と稱される所以を味得させる。 (3)文語文特有の表現法を知らせ、文語文の讀解力を進める。 (4)重要なる語句の意味、讀み、書き、用法を指導する。

指導上の注意

本文そのまゝでは一寸日常生活に於ける風格は偲ばれないから、適宜必要の補說をなすことが必要である。

第二十八　國語の力

要說

國語による國の護りと言ふことを念頭に於て書かれてあることが全文を一貫してゐる。形式的には議論文の樣式をそなへてあるが、內容には具体的な例をとり上げ、抽象論に走らないことで、國語尊重、國語愛の時代思潮のあらはれでもあり、國語愛者が眞の國家愛者であるとまで言はれる、國語に對する兒童への基礎づけでもある。本文は特に卷九全体を統制した一つの理念でもあると言はれ、國語としての各方面から論理を進めてゐる。

指導要點

(1)我々が國語から受ける恩惠、國語の力の偉大さ、を文によつて理會せしめ、國語を尊び國語を愛する國民となるやうに導きたい。 (2)文樣式が議論文であることに着目して、その論理の進め方を考へさせると同時に、この樣な文を讀みこなせることにしたい。 (3)主要語句の意義及び用法を知らしめる。 (4)新出漢字の讀み、書き、意味、用法を知らしめる。

指導上の注意

(1)前課の國家の干城と對して國語の力を配し、國語が國家的に如何なる重要性があるかと言ふことを考へて指導。 (2)國語觀を確立して國語は如何なる本性をもつか、國語は如何に用ふべきかを考へ、極度に保守であつたり。亂用であつたりしてはならないことに着目する。 (3)國語は「行」の國語であらねばならぬこと。即ち「眞言則眞行、眞行即眞言」たることの根柢をもつ指導觀が必要である。

第七編　國語教育の諸問題

第七篇　國語教育の諸問題

國語學力測定法

第一章　國語測定概說

——讀方を中心として——

一、讀みの測定

讀方の能率中、讀んだ事を既求の思想に結合して正否を判斷し、價値を吟味し及び鑑賞する能力は、科學的に測定し難いけれども、言語認識の速度と意義理會の確度とは、これを計量することが出來る。前者を分量價値といひ後者を理會價値と稱する。

今默讀、音讀の各々に就いてその測定方法を述べん。

（一）　默讀能力の測定

普通用ひらるゝ形式は、內容を基礎として作られた一個又は數個の問題を提出して兒童に答へさせるものである。そして採點は、理會價値と分量價値とに分かれるので、所與時間中に正確に仕上げられた仕事に對して與へられる點數の總計が理會點であり、正否の如何に拘らず仕上げられた仕事の分量價値の總計が分量點となる。左にその問題の一例を擧げやう。

問　題　（尋常三年生）

さくらの花が咲いたころ、太郎らは家の外の庭で春の會をひらいた。そして近所の男の子や女の子をしやうたいした。太郎はしやうたいじやうを書き、三郎がそれを近所の子どもにわたした。

質　問

イ、太郎らは春の會をひらいたか。
ロ、しやうたいじやうを書いたのは三郎か。
ハ、春の會は家の中でひらかれたか。
ニ、男の子だけがしやうたいされたか。
ホ、さくらの花は咲いたか。

（二）音讀能力の測定

これには左の如き若干の文章を、易いものから稍難いものへと順に並べて置き、兒童を一人宛呼んで讀ませ、そしてそれを讀むに要した時間と誤讀の數とを記入してこれを評價するのが普通である。

例一　（尋一）

イ、コドモガ犬ヲツレテキタ。
ロ、ソノ犬ガモリノ中ヘハシツテ行ツタ。

例二　（尋三）

イ、今は七月です。ほどなく夏休みが參ります。
ロ、夏休みにはお父さんがまんしゆうの方へりようこうするとおつしやつてゐます。

二、診斷的測定

以上述べたものは讀方の一般的能力を測定するもので、これを學年の始に行へば、これから取扱ふ兒童の力を知ることが出來るし、又學年の終に行へば、既に取つた兒童の力を見る事が出來るが、更に重要なのは、或期間に亘つて學習させた教材に

就て、語の認識その他の成績を考査する方法であつて、これを診斷的測定といふ。今左にその一例を擧げやう。

問　題　（尋常第三學年）

イ、次のことばのよみをお書きなさい。
長い。昔。蔭。一生けんめい。一年取つた。親孝行。海上。大鳥居。森。浮いて。
ロ、次のことばのよみとわけとをお書きなさい。
渡る。八分通。一筆。毎日。工場。虹の橋。峠。惡口。賛成。
ハ、次の言葉のわけをお書きなさい。
ながめ。まづしい。にほひ。ろくろく。べつだん。

三、矯正教授

測定の結果に就ては、理解價値並びに分量價値を考察し、標準より低い場合には、その原因を反省してこれを除去することに努めなければならない。即ち、理解價値の低い場合には、內容の收得に一層力を用ひさせるとか、注意深く讀む習慣を養ふとか、單語に多くの注意を拂はせるとか、默讀練習の機會を多くするとか、幾多の矯正方法を考察すべきであるし、又分量價値の低い場合に於ては、分量の重要なことを意識させ、音讀に力を用ひ過ぎない樣にさせるべきである。その他、音讀上の矯正に就ても呼吸練習や、發音練習や、句讀と意義の連續等を、個人的に指導すべきである。これ等を稱して矯正教授といふ。

第二章　讀方科教育測定及成績考査法

一、文及讀みの本質

讀み方教育の對象は文である。而らばその文の本質は如何なるものか、これを解決するのが先決問題である。私共は常に自然、人事等の環境と交渉して生命の創造活動を營んでゐる。その生活に於て私共の內なる思想感情を言語化し

それを文字なる符號によつて論理的に統一したものが文である。從つて環境對象への交渉圏が大であればある程創造活動も廣範圏に行はれる。

自然
人事 ＞ ↑ 生命
……思想感情 → 言語化（文字）……文章

「文は人なり」文の中には作者の魂が含まれてゐる。

文を讀むとは單に文字・語句を飜譯するに留らず、自己が符號としての文字文章に對して、自己の經驗を基礎として類化を行ひ、文字の內面にひそめる文の生命、作者の魂に合一することである。そこには自己の思想系列の創造擴充がある。

斯く讀みの深さは自己の經驗を基礎として類化が行はれる故に、その經驗の深さによつて讀みの深淺を生ずる。こゝに「讀むことは自己を讀むことなり」の眞理が見出される。

二、讀み方教育の目的

讀方教育の理想は讀みの本質から考へて自己の生活（經驗或は思想感情）と基調として他人が文字といふ客觀的の符號を媒介として自己の思想感情等の生活を表現したるものと理解し、そこにより以上の自己を創造する事に他ならぬ。それが行程として私共は先づ媒介としての文字を言語に飜譯するところの文字の讀みが行はれ、讀みを通してその文字のもつ語句の解釋が行はれ、終にその文全体のもつ內容を理解する事になる。「文字を辿つて理解する」ところに讀方教育の獨自性がある。文字を離れて讀方教育はあり得ない。

又『讀み方は讀みに始り讀みに終る。』ともいはれ、直觀→分析→直觀の形式にてもあらはれる。

三、考査要案

讀の本質、讀み方教育の理想から考へて讀み方の考査すべき方面は次の如く考へられる。

一、文字力
　1、讀字力
　2、書字力
二、言語力
　1、語句解釋力
　　イ、一語の意味
　　ロ、一句の意味
　2、語句運用力
　　イ、語の想起（反對語、照應語、同意語、類似語）
　　ロ、語の塡充
　　ハ、熟語の構成
　　ニ、短文の構成
三、文章力
　1、內容把捉力
　　イ、個々の內容把捉
　　ロ、大意の把捉
　　ハ、文意の概括
　　ニ、文の誤謬相異發見
　2、鑑賞力
　　イ、吟味點の考察
　　ロ、情趣の感得
四、表現力
　1、組織力（科學的文章を組織する力）

2、朗　讀　力（讀方リズム、發音の誤り、繰返し、別語挿入、脱漏、句讀點、、〇の切り方（呼吸習慣）、文の内容体得力如何等を基底とする）

五、速度の調査

或る一定の文を三十秒或は一分間に讀み得た行數又は字數によりて調査。この調査には更に内容を理解しての讀みなりや否やの測定も必要である。音讀、默讀兩者の調査がある。

六、辭書の引用力

未知の文字の讀み、又は意義を辭書によりて引用し得る時の測定。

七、學習態度

1、學習中に於ける理解、活躍の狀態
2、讀方學習ノートの整理方
3、學習資料蒐集の狀態
4、豫習、復習の狀態

四、考査の實際

其の一

尋一第三學期考査の實際

一、考査要素の設定と配點

尋一に於ける兒童の心理的動向と、教材の本質傾向より眺めてその考査要素並に配點を次の如く定むるを適當とする。

1、文字力（讀み）　二十點
　　（書取）　二十點
2、言語力（缺語補充）　三十點
　　（語の想起）　五點
　　（文の誤謬相異發見）　五點
　　（大意の把捉）　五點
　　（個々の内容把捉）　十五點
3、文章力
4、學習態度——活躍熱心度

學習態度を特に考査要素中に入れたるは、考査を試驗とみず教育的な反省とみたからである。

二、考査問題

■文字力の考査

△文字の讀み

1、「正チャンハ　七時ニ　オキマシタ
2、「マツ先ニ戸ヲ　少シアケテ見マシタ
3、「松ヤ竹ニ　雪ガ　マツ白ニツモツテキマシタ
4、「ケレドモ　大ジナ時デスカラ　ゲンキデ學校ニ行キマシタ
5、「カゼニ　吹カレタノデ　右モ左モ　耳ガ赤クナツテキマシタ
6、「ゴハウビニ　オクワシヲ　イタダキマシタ

考査條件

1、考査方法

右の六問の文を書いた文學力テスト用紙を作製し（印刷）個人毎に教師の側によんで測定、時間三分宛

2、採點規則

二十點滿點、一語一點づつ

採點すべきもの

1、問（正チャン、七時）

2、問（マツ先　戸、少シ、見マシタ）
3、問（松、竹、雪、マツ白）
4、問（大ジナ時、學校、行キマシタ）
5、問（吹カレタ、右、左、耳、赤クナリマシタ）
6、問（ゴハウビ、オクワシ）

△書　取　力

1、車　ノ　音　　2、二　年　生
3、牛　ノ　口　　4、長　イ　竹
5、春　ノ　風　　6、土　ノ　中
7、小　雪　　8、火　ト　水
9、赤　イ　玉　　10、米　ヲ　ツ　ク

考査條件

1、考査方法
口唱にて書取らしむ。兒童には番號を印刷せる答案用紙配布、問題の間隔時間口唱後一分

2、採點規則
二十點滿點、各問二點宛、一字誤謬は½點

■言語力の考査

△語の補充

1、ボクガ　ヨク　カンビヨウ　シテ　アゲタノデ　オカアサンハ〇〇〇〇ナホリマシタ（ドンナフウニ）
2、オナカガ　スイテキタノデ　三時ノオヤツヲ　〇〇〇〇（ドンナフウニ）　タヒラゲマシタ

△語の想起

1、長イヒモ　〇〇〇〇エンピツ
2、黒イスミ　〇〇ユキ
3、高イ山　〇〇〇川
4、ヨイオヂイサンハホメラレ　ワルイオヂイサンハ〇〇〇〇タ
5、春ハアタタカク　フユハ〇〇〇
6、右ノ手ニハシ　〇ノ手ニチヤワンヲモツ
7、ヨル早クネテ　朝早ク〇〇〇
8、大キナ木　〇〇〇クサ

考査條件

1、考査方法
問題印刷配布
一齊に施行、教師問題を讀みつゝ解答せしむる。所要時間三十分

2、採點規則
三十點滿點、一問三點づゝ
正答とすべきもの

△語の填充

1、スツカリ　　2、ミルマニ
△語の想起
1、ミヂカイ　　2、白イ　　3、ヒクイ
4、シカラレ（オコラレ）　　5、サムイ　　7、オキル
6、左　　8、小サナ

■文章力の考査

△個々の内容把捉

オカアサンガ　オルスキデ　オトウサント　キシヤヘ　ノツテ、ソレカラ　ジドウシヤヘ　ノツテ　ウミヘ　キタ
ジドウシヤ　カラ　青イ　ウミ　ガ　ミエタ。
アノ　大キナ　音ハ　ナニカシラト　オモツタラ　ナミノ　オトダツタ。
赤イ　大キナ　オヒサマ　ガ　グル〳〵マワツテ　ウミ　ヘ　ハイツタ。

問　あてはまるのへ○をつけさせる

1、オルスキヲシテキルノハ
（イ）オトウサン
（ロ）オカアサン
（ハ）ボク

2、ノツタ　ノリモノハ
（イ）ジドウシヤ
（ロ）キシヤ
（ハ）キシヤ　ト　ジドウシヤ

3、ドコカラ青イ海ガ　見エタノ
（イ）ジドウシヤ
（ロ）キシヤ
（ハ）フネ

4、大キナ音ハ
（イ）キシヤノ音
（ロ）ナミノ音
（ハ）ジドウシヤノ音

5、ドンナオヒサマガ海ヘハイツタノ
（イ）大キナオヒサマ
（ロ）グルグルマワルオヒサマ
（ハ）赤イ大キナオヒサマ

考査條件

1、考査方法

イ、問題印刷配布
ロ、教師一回、兒童一回齊讀
ハ、問のところを教師よみ、終りて適當なるものに○をつけさしむ。順次同樣に施行
ニ、所要時間、二十分

2、採點規則

イ、十五點滿點、一問三點づつ
ロ、正答とすべきもの

1、（ロ）オカアサン　　2、（ハ）キシヤ　ト　ジドウシヤ　　3、（イ）ジドウシヤ
4、（ロ）ナミノ音　　5、（ハ）赤イ大キナオヒサマ

△大意の把捉

ユフベ　コワイ　ユメ　ヲ　ミマシタ。
ブランコ　シテキタラ　大キナ　犬ニ　オツカケラレテ、ドン〳〵ニゲタケレド、ソレカラ　ドウシタカシラ
ハシゴダン　カラ　コロゲテ　オチタ。
ソノトキ　タレカガ　オコシテ　クレマシタ。アレハ　オニンギヨウサンカナ。

考査條件

1、考査方法

イ、教師一回、兒童齊讀一回

ロ、時間、十分

2、採點規則

ユフベノコワイユメ　十點

ブランコノオハナシ

犬ノオハナシ

ハシゴダンカラオチタオハナシ　五點

ニンギョウサンノオハナシ

△文の誤謬、相異の發見

よいのに○をつけさせる。

1、アシタ　アメガ　フリマシタ

2、ケフ　アメガ　フリマシタ

3、キノフ　アメガ　フリマシタ

4、ボクハ　キノフ　ウチデアリマシタ

5、ホンガ　キマス

6、ハトガ　キマス

7、キツネガ　アリマス

8、モノサシガ　アリマス

9、ハナヲ　サク

10、トリガ　ナク

考査條件

1、考査方法

イ、よいのに○をつけさせる（教師讀み直す）

ロ、時間、五分

2、採點規則

正答として○をつけべきもの

2、3、6、8、10、

合計五點、一問一點

■學習態度の考査

平素の觀察を基點として人對人スケールを適用して施行。

上位には五點を、中位には二、五點を、下位には○點を與ふ。

其の二

尋五第一學期考査の實際

尋常五年あたりからは一課毎の診斷的考査の數を多く施行することが望ましい。その方法に於ても時には表字力のみ澤山提出し、時には語彙の豊富をみる熟語の構成の如きもののみを課することも必要である。

而し又一面、學期末に於て各要素につき總合的な考査の必要もある。

一、考査要素と配點

本學年第一學期の教材を「第一　　」から「第　　」までと見てよいと思ふ。この教材と五學年の兒童心意發達との見地から考査要素と配點を次の如く定める

考査要素		配點
文字力	書字力	10
言語力	語意	10
	句意	10
	想起	5
	填充	5
	熟語	5
	短文	5
文章力	內容	10
	大意	10
	文意	10
	鑑賞	10
辭書引用力		5
學習態度		5

二、考査問題

■文字力の考査

次のカタカナのところを漢字でかきなさい。

1、□かな□の子供（シヽ　ヤイシツ）

2、□□に□□する（キツシン　ケンキウ）

3、部下の□□は□□の戰死をとげた（シヨウフ　ノイヨ）

4、あの□□□は□□する（ヤイマイガイシヤ　ハンヒヤウ）

5、□□と□□を買ふ（ペンタウ　タバコ）

考査條件

1、考査方法

イ、問題印刷配布

ロ、題意の說明

ハ、時間、十分

2、採點規則

イ・單位一點・十單位計十點

■言語力の考査

△語意の解釋

次の言葉のわけをかきなさい。

1、力　自　侵

2、再　興

3、輸　送

4、奇　觀

5、進　軍

△句意の解釋

次の文中の線のある句の意味をかきなさい。

1、うき〳〵とぞよめく晩だ。
（　　）
2、さらば其の馬求め給へ。
（　　）
3、一騎討に飛道具とは卑怯千萬
（　　）
4、彼は寢食を忘れて勉强した。
（　　）
5、仕事は水入らずの三人の手ではかどる。
（　　）

△語の想起

1、發達とよく似た意味の語　（　　）
2、需要と對になつてゐる語　（　　）
3、近くの村と同じ意味の語　（　　）
4、繁昌の反對の意味の語　（　　）
5、壯大とよく似た意味の語　（　　）

△語の塡充

次の文中の□に適當の言葉を入れよ。

朝日に□□□□軍艦旗が、海風に□□□□ながら、□□〳〵と□□□行く樣は、實に□□□□なものである。

△熟語の構成

次の文字をつかつて熟語をつくり、更にその熟語の下の文字をつかつて又熟語をつくり合計二つ連續させなさい。

例　夕（夕食——食事）

1、子　（　　）
2、辨　（　　）
3、海　（　　）
4、軍　（　　）
5、林　（　　）

△短文の構成

次の言葉をつかつて短文をつくりなさい。

1、す　や　〳〵
2、も　ち　ろ　ん
3、信　　用
4、物　と　も　せ　ず
5、小　を　ど　り

考査條件

1、考査方法
　イ、問題印刷配布
　ロ、題意の說明
　ハ、所要時間　五十分
2、採點規則
　イ、語意及句意の解釋　一問二點計十點宛
　ロ、語の想起　一問一點計五點
　ハ、語の補充　一單位一點計五點

ニ、熟語の構成　一問一點計五點、一つの場合には玖を與へる。假名の場合は無得點
ホ、短文の構成　一問一點計五點、主語述語を要求

■文章力の考査

△個々の內容把捉

次の文を讀んで問に答へなさい。

（本文は教材王國による）

松島君よ。早く病氣をなほして來て下さい。

君、體はどうですか。僕は君が病氣になつた日から心配で〳〵なりませんでした。二、三日前先生が藤田君に一しよに君の家へ行かれたら、もう入院した後だつた。

其の翌日先生のお話では、君の病氣はもうちやうだといふことで僕はひやつとした。けれども、今は大そういゝといふ事で安心しました。

長く病院にはいつて居ては面白くないでせう。大事にして一日も早くなほつて來て下さい。待つてゐます。

學校は何の變りもありません。僕も毎日元氣ですから御安心下さい。さよなら。

六月十八日　　水上藤吉

松島

問

1、誰が（　　）誰に（　　）出した手紙か。

2、何の手紙か（　　）

3、松島君の病氣は何か（　　）

4、水上君と松島君はどんな子供か（　　）

5、藤田君はどんな人なのだらう（心持ではない）（　　）

△大意の把捉

（次の文を讀んでかんじんなところだけいひなさい）

一昨日魚屋が來た時には、鯛が一尾五十錢でありましたが、今日來た時は五十八錢になつたと言ひます。同じ大きさの鯛でありながら、一昨日と、今日との間で八錢の差が出來てゐます。どうして高くなつたのですか、と聞いて見ると、昨日は大變なしけで、魚がちつともとれなかつたからだ、と言ひました。成程魚がたくさんあればその價は安くなり、少なければ高くなる道理です。そして之は何も魚に限りません。即ち需要が多くて供給の少い場合は高くなり、供給が多くて需要の少い場合に安くなります。米の値段が高くなつたり、安くなつたりするのでも、家賃の高下でも、地價の高下でもすべて物の價はその需要と供給との關係によつて定まるものであります。（日本本新作文より）

△文意の把捉

（次の文はナイヤガラの瀧のどんなことをいつたものか）

ナイヤガラの瀧は、廣さが千數百方里もある。海の樣な湖から流れる大きな河が一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。物すごいひゞきは萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。

△鑑賞力の考査

次のいひかたで一番うまいと思ふものへ○、一番下手だと思ふものへ×をつけなさい。

（一）
1、葉がちる。
2、ひら、ひら、ちるよ、かあいい葉
3、ひら、ひらと葉がちる。

（二）
1、川の水が濁つてゐる。
2、濁つた川の水は
3、行く水は少し濁れど。
4、川の水はきたないが。

考査條件

△個々の内容把捉

1、考査方法

イ、問題印刷配布

ロ、題意の説明　問をよむ

ハ、所要時間　十二分

2、採點規則

イ、一問二點　計十點

ロ、問5は、級長か副級長、或は松島君の近所の人

△大意の把捉

1、考査方法

イ、問題印刷配布

ロ、速度を加味して同時は開始、教師は五秒おきに 5 10 15 とかいてある時間表示綴をめくる、兒童大意把捉終了せば教師の表示綴をみて、その時にあらはれてゐる數字（時間）を答案用紙に記入かくして本検査は速度をも考慮せる内容の把捉を検診し得るものである。私共の實際文化生活は最も早く正しき内容を知ることである。

2、採點規則

イ、本検査は經驗的に何秒から何秒までの間に於て正答を得し時は何點、何秒から何秒までは何點と決定する。實際は標準を作成して後の實際が望ましい。その標準は何れかの機會に發表する豫定である。

ロ、正答

1、物の價はその需要と供給との關係によつて定まるものであること。

2、需要が多くて、供給の少い場合……高くなる。
　供給が多くて需要が少い場合……安くなる。

ハ、以上二項を書けるもの十點、一方のみの場合は五點とする。

△文意の把捉、鑑賞力の考査

1、考査方法

イ、問題印刷配布

ロ、題意の説明

ハ、時間　十五分

2、採點規則

イ、文意の把捉　十點

ロ、鑑賞力　十點

（一）は2、3、1の順に價値をもつ。

○　×

2、3、1の場合　四點

2、1、3の場合　三點

1、2、3の場合　一點

1、3、2の場合　○點

（二）は3、4、1、2の順に價値を有す。

○　×

3、4、1、2の場合　六點

3、4（1）2、1（4）の場合　五點

3、2、4（1）1（4）
4、（1）3、2、1（4）　の場合　三　點
4（1）2、3、1（4）の場合　二　點
2、4（1）3、1（4）の場合　一　點
2、4（1）1（4）、3の場合　〇　點

備考

鑑賞力に於ける出問法に於ては、價値の傾向を考慮する要あり。

出來得れば、

（2、1、3）
（3、2、1）
（1、3、2）

の如く三種位の問題を價値の順序を變へて提出することも望ましい。

■辭書引用力

私は尋常五年から辭書による讀書勉强を適當としてゐる。從つて辭書引用力の考査も當然あつて而るべきである。辭書引用力の考査はその方法に於て數種あるが、私は次に最も代表的と思はるゝ二種をあげておきたい。

一、辭書を用ひざる方法（部首發見法）

辭書を引く前提としての部首發見法であつて、初步の考査法である。次にその實際問題を示す。

問題

次の字はどこの部分で引くか、又それは何畫か。

文字	引く部分	畫
1、何		
2、油		
3、枯		
4、防		
5、進		

考査條件

1、考査方法
イ、問題印刷配布
ロ、題意說明
ハ、時間速度に關係ない

2、採點規則
イ、一問一點計五點、引く部分、畫の一方正答の時は½點を與ふ。

二、辭書を用ふる場合（辭書適用法）

この方法は前者の發展せる場合であつて、實際に辭書を用ひ引用する場合である。この方法に於ては速度を加味することが必要である。而してその方法は前者の如く一定の文字（これは未知の文字がよい）を五つ位提出して（印刷）なるべく早く引かせる。そしてかなをつけさせる。この場合教師は時間表示綴をめくることを忘れては

ならない。

採點に當つては經驗的に何秒までの間に正答なる場合には何點と定める。

備　考

辭書引用力の考査は學年の進むに從ひ讀みの發見に止まらず、文字の意味、更に言海を使用してのかなの場合等にも發展する。

又讀みの考査法と連絡して未習の文字多き文を提出して辭書を用ひさせて誤りなく讀み得るまでの時間を測定して、その讀書力を見ることも大事なことである。

■學習態度

本學年頃からはノートの使用法に重點をおく。更に復習、豫習の努力さも充分考慮する必要がある。

程度判定にはやはり人對人スケールを用ふるがよい。

ラヂオと國語教育

日本に於ける放送事業が、營利を離れてもつぱら公益的見地から統制的に行はれ、社團法人日本放送協會がその創立當初からよく世上各般の意見を容れて文化の向上のために努力して來たことは、先進國に比しても遜色がないところか、むしろ誇示すべきものをもつてゐるとさへいはれる。海外に於ける放送事業の實狀は、なか〳〵窺知することが出來ないが、我日本に於ける放送事業が公衆に對して教化と實益と娯樂とを與へるために、日夜活動しつゞけてゐる現狀は、わたくしたちの親しく見聞するところで、すこぶる感謝すべきものと思ふ。

いま恐らく三百萬に近い數の加入者を擁して、毎日早朝のラヂオ体操から夜の演藝九時半の時報、ニュースに至るまで、ほとんど間斷なく鳴り響いてゐるラヂオに、多少長短の時間の差はあつても、暫くでも耳を藉す人の實數は、まことに莫大なものでせう。一瞬のうちに津々浦々まで、隈なく鳴り亘るといつていゝこの言葉や音樂の波は、また風は、その規模の大きい故にその晝夜間斷なく營まれるが故に、さらにまたその民衆の興味をつよく摑んでゐるが故にの範圍において全國的全民國に營まれるべきはずである。國語問題は、幾多の細目を含んで、その實際上の戰術に至つては、處に應じ時に臨んで種々の變客を必要とするものがあるが目標とするところは、要するに全日本的な統制に存する次第であるから、ラヂオのやうな他に比類のない「全國一齊に」の特權を善用することは、きはめて有利な實戰的方策を與へるものをいはなければならない。

中にも、他の手段を以てしては到底達成することの出來ないところを、ラヂオはひとりよく遂行する性能をもつてゐる。言語を活されるまで一々傳へるといふその特長はしかも同時にかくも廣範圍に亘つて忠實に傳へるといふ特長は、他の何物の追隨をも許さないところのものである。ラヂオによつて、はじめて此の有効な手段が提供されるわけですから、

國語對策の立場からもそれの利用が十分に考慮され、實行されるべきである。

かういふ事情から國語問題を念とする者は、誰しもラヂオに賴つて日本語を改良することを希望し、またその方向に次いで努力するわけである。放送事業に當る人々も、その公益的國家的事業たる性質に鑑みて、國語改善のために必要な施設を畫策し着々實行に移してゐると思はれる。こゝにも非營利的な日本の放送事業の企業形態の有利なところが認められるのではないかと考へられる。

かういふ風に國語問題方面からの要望もあるし、放送當事者の側の配慮もあつて、現代の日本語の整理、改善に向つての歩武は、すでに着々踏み出されてゐる事であるが、國語問題が國民全般の重大な關心事で、その改善の手段が効果的であればある程、その改善の目標、方略はます〳〵愼重に、あやまりなく考案され實行されていかなくてはならない。

またその實際施設を一般大衆がどう受用すべきかについても心得ておくべきことがあるであらう。

國語問題一般が、特にラヂオと接觸してどういふ方向に具体的な、切實な課題を發生させたかについて、なほ立入つて考へる必要がある。ラヂオを通して國語問題を眺める場合におのづから幾多の新景觀が展開されないではゐない。これを取り上げて吟味することが、國語問題に於ける根本的態度の決定と相俟つて、實際的方策を與へるために必要な前提となるのである。そこで國語問題そのものは、ほゞ論じ書したかの觀があるにも拘らず、この側面から展望を試みることも、あながち不要ではありますまい。況んや國語問題に於ける態度そのものについては、我が日本語の單に言語史的、形態學的知見に基いて乃至常識的政策に裏づけられて決定されるべきでなく、――日本語を形成し轉成させるところのむしろ內面的な機態的明細への透徹し

た科學的知見に據つてこそ、おのづから執るべきものが示唆されるといふ點において、筆者の所見は、いさゝか從來の諸家の見るところと一致しないものがあり、それがために若干の重要な點において在來の國語整理の指針の設定に異議を申込まねばならないとも考へる。さらに一言所見を開陳することは一種の責務といつて然るべきでせう。

だが、まづ國語問題一般がどうラヂオに反映するかについて一應考へてみやう。

近頃漢字廢止や「ローマ字國定」をめぐつて再吟味を受けた國字問題も依然として國語問題のうちの重要項目たる事を失はない。ところが、ラヂオに關聯しては、文字の事が表面上直接に問題になつて來ないやうに見える。現狀をそのまゝ捨置いて漢字まじりのカナ使用をつゞけるにしても、ラヂオの方面にはすぐに影響しては來ないやうに考へられる。此の點は新聞雜誌のやうな印刷文化と趣を異る構成は、たゞ印刷もしくは記載に關係するだけではないといふ事が、實際の事情を考へ合せれば容易に解る。すなはち、それは發音の表示といふ事に關係し、また語彙の形成といふことに關與するといふ點で、單に文字の問題なのではなくて（必然的にではないにしても）自然にまた文語の問題となるのである。

發音表示とローマ字專用の場合にも原理上同樣にいふべき事がらが存立しますが、漢字使用の現狀にあつては、それだけでなくて特に語彙の形成といふ事項において重大な關係を生じる事も免れない。

日本語における漢字は言葉の發音の表示をほとんどそれの藏壺としてゐない。いはゆる「諧聲」の原理で撰成された漢字の字音についてだけでは、若干發音表示の役割が認められるが、一般に日本語に於ける漢字の使用法では、發音表示はほとんど考慮の外にあるといへるのである。左の點では同じ漢字でも支那語において用ゐられてゐる場合と全く趣を異にするわけだ（もし漢字の使用を字音の場合だけに制限しようとする主張がひろく實行されるゝに至るならば、支那語における漢字の用法と似たるものになるであらう。）そこで、漢字面からはその代表するコトバがどの發音されるべきかを知る事が本來出來ないわけである。ある日本語を知つてゐる人が、それに該當する漢字を豫め習得しておいてそれから後に至つてその漢字を出遭つた場合にそれを再認するといふわけで、いはゆる文字の讀み方がわかるのには、かうした手續を經ることが必要である。これは漢字ばかりでなく、特性のカナづかひ「綴字」による文字にあつても同樣である。ところが、特に現行の漢字の場合にはこの關係が極めて複雜になつてゐる。一々の場合を心得てゐないと、たちまち間違つた讀み方をするといふことになるのである

「發音表示の不備」といふことは、現行のカナについても見られる。「促音」をあらはすために用ゐる「つ」を特に小さく書くか印刷するかしないと、タ行の「ツ」とまぎれるのは當然であるから、「あまづさい」「かつて」「カムチャツカ」などが讀みあやまられることは、あまり珍しくない程になつてゐる。またが行とそれに對する通鼻音的なものとを區別するカナの用法がないために、發音を各自の流儀でやつていくだけでなく、むしろすべてを「硬い」が行で發音する方が正當だと思せる嫌もあるやうである。

が漢字の讀みにくさ――讀みちがへやすさと比較すると、これ等は問題でないといへるかも知れない。正しい讀み方の「ふりかな」を必要とするといふ事實は笑へない現實である。大体漢字の場合には難訓だけでも各方面に數多くある上に「讀みくせ」が必ずしも同一でない樣な例もあり、字音にしても反切にすつて示される字典の上のものと現代の慣用のものとが、しば〳〵くひ違つてゐるといふ次第で日本放送協會が放送用語調査委員會を設けて一般の用語の調査整理とを企て、特にこの點については「常用漢語發音整表」といふパンフレツトをこしらいてアナウンサーの參考に供してゐるといふことであるが、この現狀に處する對策としては、さしあたりさうするより外あるまい。

つまりこゝに國語問題が傳統的な紊亂だが紊亂してゐる文字使用法による難送の任事がテキメンに示してくれるのである。しかもそれが單に問題の一部面に過ぎないことを忘れてはならないのである。

漢字に關聯して、漢語的語彙のハンランといふ事が、困つた問題になつてゐる。

× × ×

ラヂオにつかふコトバの資格としていろ〳〵擧げられる中に「口で聽いてわかるもの」といふのがごく大切な地位を占める筈なことは、いふまでもあるまい。これは自明の事でとり立てゝ要求するのがおかしな位である。ところがこの解り切つた今日の實際にはマジメに要求されなくてはならないのである。それ程今の日本語は變態的になつてゐるのであつて、その不都合さがラヂオの場合にもつとも顯著に前面に押出されるのである。

耳で聽いたゞけでは、その意味を正しく理解することが出來ないもの、ともすれば誤解を生じる樣なものがすこぶる多いのである。

それは一体何に基因するのであらうか。もちろん日本語が本來音韻の種類に乏しいので少數音節で出來てゐる單語に同音異義のものが起り易いといふ事由も數へ上げる事が出來る。が本來の日本語にあつては、あるいはアクセントの差異にあつて、

同音の各語をいひわけることも出來る。）現にさういふアクセントに依り單語の判別がかなり行はれてゐるのである。ところが幾多の漢字の字音は、支那語の本素の音韻的差別のニュアンスを失つて、單純な日本語の音韻に同化されたものであるからごく限定された變異性をしか示さないためにこれから作り出された多くの語彙が、どれもこれも同じ樣な發音となるのが多くて、

その結果漢語、特に無數に不用意に作り出された「新造漢語が、甚だしく同音異義の終を蔓延させたのである。これについての實例は、一々揚げるまでの事もなく辭書を見れば同一發音の種々の單語が少からず羅列されてゐることを發見するであらう。たとへば「キカン」といふ發音をもつ單語を考へて見ても、たちどころに十種ぐらひ思ひつく事が出來るといふやうな始末で、この場合アクセントによつての幾通りもの區別は、ほとんど不可能乃至不自然で事實上でも二種ぐらいしか區別されてゐない。

この事態がコトバにとつて、どんなに不都合なものであるかについては、對話や講演等に際しても折にふれて感じられる。この單語を理解させるために、時としては同意語、類語による「いひかへ」を試みたり、該當の英語などの外國語に助けを借りたりある文脈を引用して來たりするといふ、まことに煩はしい手段をも執る必要を生じてくるのである。さうしてその困つた事態が、またもやラヂオにおいて極めてあざやかに印象され、こゝで話し言葉としての日本語の現狀の不都合さが痛感されるわけである。

この事態は、幾多の新語の應急的な製作といふ必要に迫られて發現した、現代日本の特性的な現象には違ひあるまいが長い年代に亘つた漢字の使用といふこと、隨つてそれを造語の方便としてむやみに適用するといふことに基づくといふ事は明白である。漢語の濫用は、本來の日本語の造語力を萎縮させてしまつたともいはれる。字面といふ事だけが顧慮されて、その音聲がまるで忘れられてしまつたのである。

その音韻の點では日本語化してしまつてゐる漢語も、文字としては「漢字」をすなはち支那から渡來したところのものを使用してゐるし、その漢字を思ひ出すことに依つて僅かに同音異義の各語が識別されるのであるが、同じやうに日本化した音韻を以て發音される。餘の外國から渡來したコトバ、普通にいふ外來語は、別にそのものとの文字（綴り・正字法）を思ひ出さなくてもよくわかるものばかりである。同音異識の外來語等といふものは、ほとんど數へられない程のものであらう。（暗

語では「プロ」がいろ〳〵な意味をもつて使はれるといふやうな例もありますが

それにも拘らず區別のつかない、まぎれ易い漢語（といふ一種の外來語といつてもいゝもの）はさかんに增長してやつぱり日本語である事には變りのない新しく外國語から入つて來たわかる「外來語」が排擊されたり、別の漢語でとりかへられたりしなければならぬといふ理由は立ちにくいであらう。

古く日本語の中に入つてすつかり本來の國語のやうになりすましてゐる單語のうちにも朝鮮語はいふに及ばず、支那語・梵語・ポルトガル語・オランダ語などから傳來したものが少くない。新しくはあつてもきはめて大切な役割をしてゐる外來語がある。外來語は日本語に同化されてしまつたもので、もはやどこから見ても外國語ではない。その音韻は日本語の音韻体系の制約によつてその中から求められたもの又はその中に定位されたものであるし、そのアクセントはまつたく他の單語と同じ種類のもの、日本語そのものゝアクセントなのである。

それでそれはかへつてもとの外國語の中では、その外國語の單語として通用しないものになつてゐる。本來の日本語の他の單語をかきあらはし得るのと同じ程度で、この外來語をカナで書くことが可能である。

わかる外來語のかはりに、わかりかねる漢語をあてがふといふ流儀は何か因はれた考へ方に基くので、まつたくカン違ひである。英語などからの外來語の横行があんまり心持がよくないといふのには尤なところもあるが、さうかといつてやたらに漢語でいひかへるために、まぎらはしい發音の新語をいやが上にも增加させることは、無分別なしわざといはなければならない

ラヂオがわかるコトバを要求するのは至極當然の事であるから、この邊の問題に對しても用語の選定において適當に考慮してゐるはずである。ラヂオそれ自体もアナウンサーとか、ニュースとか、ラヂオコントとかいふやうにだいぶ外來語を普及させてゐるがこれに對して格別文句を言ふ人がないとすれば、結構なわけである。一方では「放送」といふやうな新語を作り出して、ブロードカースティングやそれの漢譯「廣播」などを採らなかつたのも、「わかるやうに、しかも簡單に」といふ趣意に出たものとすれば反對すべき理由はないわけである。

聽いてわかるコトバの採用といふ趣意は、もとよりラヂオだけでなく、言語一般に當然通用する事項である。この點についての日本語の現狀の改善は、放送用語委員會だけの問題ではなくて、國語問題の重要項目たるべきであり、まさしく國家がその解決をはかるべき責任をもつのである。特に國語教育には、直接の關係があるはずなのである。

用語の選定において、前項の要請の外に、發音しやすいものといふ一事が掲げられてゐたと思ふが、これも至極尤もなことゝ信じられる。特に新しい單語を構成する場合に發音し難いものを何の用意もなく採用してしまつて、後になつて困る樣な事がある。それで顧客心理を念頭におくやうなムキではそんな點では、そんな點にも細心な注意を拂ふのであるが官廳などではかなり無頓着に、むやみに長つたらしい名稱や、ギクシャクしていひにくい稱呼などを案出する。內容を明示するために苦心したのかも知れないが文部省內に新設されるといふうわさのある「教學局」などは一つの適例ではないだらうか。漢字の面を見れば何等多奇なきものだらうが、これをいざ發音する段となると、相當ギクシャクする。もつともこの場合に鼻音的「が」を入れるのが標準的發音であるから、發音のむづかしさが幾分緩和されるのである。もしさうしないでこの「が」を九州方言的に發音したら、全く驚愕すべき聞えのものになるであらう發音しにくいものはどんな種類の連音かといふことになると音聲學の專門的な考察が必要となるわけである。立入つて述べる餘裕もないのであるが、かの無聲化の傾向がそこにかなりの關係を持つてゐる外に古來發音遊戯において間違ひ易いものとして行はれてゐた種々の連音の場合に見られる音聲のつながり方が、たしかに典型的なものと見られる。その中には「柿くふ客」といふやうな連りがあつて發音のむづかしいものになつてゐるがこのいはゆる直音とそれに對する拗音との直接の連結が、發音のむづかしさを生じる所因となつてゐるのである。つまり直音なら直音で續けるやう、拗音なら拗音の連りでいかう、といふのが發音運動の自然の傾向なのでそれをチャンポンにやるやうに要求さるところに發音のむづかしさ、いひかへれば、調運動の急速な變換のぎこちなさが感じられる次第なのである。この點だけを考に入れると「教學局」でなくて「矯逆局」あるいは「矯正局」といつたやうなゴロならばまだしも發音しやすいわけだ。

もつともさういふ音聲發生上の學理はわきまへないでも、耳に聽いた感じや口を動かす具合で大体の見當はつくものであるともするとさういふ感じを學校教育では養成せず感じのにぶい知識階級が出來るのかも知れないが發音しにくいかどうかぐらゐの事はたび〳〵反復して發音してみたら大抵わかりさうなものである。それにかうした感じを一片の主觀的な感情の問題として片づけてしまつてはならない。日本文學の鑑賞といふやうな事にも浸交渉な事がらではないし、國語教育にとつてはむしろ本質的な事項と思ふ。

放送用語の選定といふ仕事は、日本語の標準的規格を提供するといふ意味に於て重大な國語對策であり、ラヂオの文化的使命に顧みる時それ自体大きな國語教育に外ならないであらう。さうするとその選定に際して則るべき規準の設定は、すこぶる重大な意義を持つのである。そこには、指導的な意圖がはたらくのがむしろ當然であらう。

國語選定の仕事に際して特に留意すべきことは、國語に關する委員會が掲げてゐる諸事項の外になると思ふが、語彙及語法の体系的構成への顧慮といふ一事である。前者に關しては、かなりの程度まで自由に採用が出來るといふ事は認められなければ語彙も一つの体系を構成してゐるといふ事實、殊にその各部においてはすこぶる緊密に結成されてゐる語彙体系が存立してその各成員間の相互に張合つてゐる對立關係が体系の存立を支持する力ともなり、あるいは一旦破れた均衡を回復して新しい景觀を体系に與へる所因ともなるといふ事實を念頭におかなければならないと思ふ。

言語に於ける体系的構成の事理に關しては、音韻体系の事實について、「現時の音韻學派」がすこぶる明徴にすることに成功した樣である。これによつて、にはかに學界の注目をあつめた所以は、その探究態度において在來の言語學者の行き方と趣を異にするところが多く、その着眼において近時の科學的思潮の醇刃たるものに契合するところがあるのによるのではないかと思はれる。それと同樣な事態が語法体系の發見、その追及に於ても、發現して來る事が期待されるのである。

この見地に立つとき、語法的諸形態が、一つの方言などの內部にあつては、相倚り相待つところの相互依存的、交互作用的体制を構成し、結体する所以を認めるに至るのである。この所見にもとづいて、はじめて實踐を畫策すべきだといふことを私は特筆する必要があると思ふ。何故なれば從來往々これ等の語法形態の異種的なものゝ間にも、任意の節合が可能であるかの樣な空漠な考から、日本語の整理や改善を考へられた樣子があるかである。種々の方言や、異つた時代の言語から好都合と思はれる樣な形態だけを拔き出して來て、それを寄せ集める樣な仕方で、机上の計畫が企てられることがあるからである。

今日に於て、言語を有機体視し、生物視するのは、すこぶる滑稽でせう。さうした類比を諸種の方面に推し及ぼすことは、誤謬に陷る危險の多いことであらう。だが、一つの言語が一つの特定のものとして存立し、それが任意の部分的に變化させられることを拒み强力な影響の下においてもなほそれ自体の特色を維持していく所以のものを考へると、それが一つの体制的全体として存立するものでなくてはならないことに想到するのはむしろ當然であらう。そこまでの程度においては生活体との比論が可能で、その体制を支持する所以の內在する力を考へ、形態を生み出す所以の機能の營みを考へるのも承認すべきであらう。この意味に於てまた体制を支持する力の緊張を說き、その張力のはりきつて、しかもよく均衡を保つところの狀態になづ

けて健康を說き、また健康化を云爲することはまた有意義なことである。

この事理の認識を欠く時現代日本語が達成し得た健康な簡潔さをかへつて損ふといふ結果を招くやうな意識統制が、やゝもすれば企てられるのである。

我々は、もとより音韻や語法に對する意識的統制そのものを全面的に排斥しようとするのではなくて、たゞ言語における形態を作り出すところの內面的機態的事理に對する十分な見とほしをもつことなしに、單に既成の形式への執着から言語の自發的な進展に逆行する樣な方向にこれを束縛したり、各所からよせ集めで事なく作り上げることを試みたりするやうな行き方に對して警告を發したいと思ふのである。

現在の放送のコトバの實際は、かうした方言の人爲的混和の意圖を示してゐないやうであるから、格別それを取り上げて問題とする必要を感じないやうなものであるが、學界の一部に、斯いふ意見が行はれてゐるといふ事實は、輕視することが出來ない次第であり、その原理的な考へ方について承服することが出來ない以上はそれに反對だと言ふ事を明言するのが、學徒の責務だと信じてゐるものである。

× × ×

音聲の問題、特に標準的發音、標準的アクセントの普及の事項については、いふべきことがないでもないが、しかしこの事項に關してのラヂオの殆ど獨占的な、したがつて特に責任を痛感しての諸般の施設に對して、我等は好意を以てその成果を氣永に期待したいと思ふ。どういふ方法を以て最大の効果を擧げ得るか、折角當事者の研究を希望し、而して我々聽取者側として特に教育の任に當る者として、學校放送が如何なる風に利用して効果をもたらし得るかは、十分考慮されなければならないと思ふ。

最後に、

ラヂオは廣義教育だといつても、あまり不當ではあるまい。殊に廣義國語教育なのだともいふ事が出來やう。それは決して學校放送に限られてゐない。而して國語の整理統制に對する極めて有力な手段なのである。

隨つて、國語問題の解決に對しては、もつとも適當な方途に沿つて進むべきことを勸奬しかつ期待するものである。

以上

方言學と讀方教育

第一章　方言とは何か

方言學とは方言の科學的研究を目的としてゐる。方言とは同一國語の中で標準語と異なる地方の言語の謂である。されば方言の條件としては（一）同一國語たること。（二）標準語と異なること。（三）地方の言語たるの三要件を具備してゐる。

我國の如く統一した國家にも標準語と異なる地方の言語としての方言の數は相當に多い。

我國は封建時代以來國即ち、現在の縣を以つて一城廓とし、他の交通を餘りしなかつた爲めに地方に特有の言語發生し、此れが方言の源となしてゐる。交通漸く開けるに及んでも隣國乃至隣縣位のもので方言の地域は稍々廓大したと雖も全然かけ離れた地方に赴けば相通じない言語となつてゐた。今日の交通時代に至つても鄕土人が父祖より受けた言語の力はなか〳〵拔け難く方言は漸次薄らぎ行くのが自然の傾向であるけれども、今尙前に述べたやうに拭ひ去られない潛勢力を持つものである。

我々が旅行をして異つた地に宿せば子供や青年男女は標準語を話し得なくとも解し得るに反し、老人は全然解する事すら不可能である。此れ子供や青年は教育の力によつて斯かる域に到達してゐる處で老人は斯かる教育を受けなかつた所に基く悲哀である。されば方言は永い間の傳統を持つものだけになか〳〵拭ひ去る事は出來難い。それは父母より方言による感化を受けた子供又は青年男女は學校に於ける言葉と家庭に於ける言葉とに相違があるからである。學校では標準語を使用せしめても家庭では方言によつて生活してゐる。

つまり學校語と家庭語との對立がある中は方言皆無の時代へ一歩を近づけたとしても拔け難いものあることを示してゐる。

然らば方言發生の原因は斯かる地方的に獨立し發生したものに限らるゝかと云ふに決してさうではない。其の他に中央語の移入殘存したものがある。中央都市の言語は其の附近に傳播する勢力を持つてゐる。其の傳播の狀態は條件によつて分布狀態を異にする一は中心都市からの距離が關係してゐる。中心都市に近い地方は其の都市の言葉が傳り易く遠い地方は傳はり方が

緩慢であるけれど距離には正比例せずして近くても其の中間に山脈があるとか海を隔てゝゐるとかする、即ち交通上の便不便が第二の關係を持つ事となる。

かくして中央語が、地方へ、地方へと傳播する事は一見方言色を淡くし聽て方言を皆無とするであらうと夢想するけれど、事實は決して左樣にはならずして、一旦移入せられた中央語の中から方言を醸成しつゝある。それは都市の旅行は急テンポに行はれ、言語の如きも、次から次へと變遷するから都市の移り變つた言語の時代にも、其の附近の地方は從來の言葉に從ひ、これが方言となつてくるのである。つまり中央語の移入殘存したものが方言の原因となるのである。又中央語が地方語に移入する際、純正に、もとのまゝの形で轉移する事のある外に、著しく轉訛、轉義せられる事がある。殊に方言に古語が殘る場合は、原形のまゝ殘る事は、きはめて、まれで、多くは種々に訛つて變つて來るのである。故に今日の言語學者には逆に其の訛を集めて、言語の原形を知らんとする。要するに轉訛、轉議も方言を造るものとなつて來る。其の外、外來語として外國より入り來りし言から、方言語の出來る場合がある。今日に殘つて居る歴史上の外來語の、一、二を拾へば、南蠻語と云はれてゐたポルトガル語「カルサン」——野袴もんぺ——ポルトガル語の訛語つた「ボウブラ」——南瓜——オランダ語の「フラフ」——旗——オランダ語の訛つた「ドンタク」——日曜、休日——等をはじめ支那の唐語言と稱せられてゐるものゝ中の「ホイタウ」——乞食——「キビショ」——急須——朝鮮語の「パッチ」——股引——「サハチ」——大皿丼——梵語の「ダビ」——葬式——ダンナ——旦那——アイヌ語の「トナカイ」——馴鹿——等を見れば中には標準語と同すべきものもあるけれど方言として殘つてゐるものが多い。其の最後の馴鹿は先住民族の遺留語である。要するに方言の原因は、一、中央語の移入殘存したもの。二、地方に獨立發生したもの。三、轉訛轉議によるもの。四、外來語より來るもの。五、先住民族の遺留語等にある。方言學を研究せんには、其の基本となる、土俗學と國語學とを調べる事を先行條件とする。而して土俗學は人類學に根ざし國語學は言語學にと國文學に基いてゐるから、方言學の基礎固めのためには、可成り廣い領域を究める必要がある。

第二章　方言學と讀方教育

方言と讀方即ち國語との關係に於て先づ、問題となるのは方言矯正である。而るに方言矯正に反對するものがある。それは

一、標準語は美しいかも知れないが必ずしも正しいとは言はれない。二、方言には古語多く國語、國文學上の研究に富する處が多い。三、方言は鄕土愛を增す。四、方言によつて父兄との調和が出來直に其の土地の教育が出來る。五、地方人が東京語をまねても東京人には、かなはない等の條件をあげる。而し大局から見て國語統制上からも、生活上からも、方言矯正と標準語の通用とは直理である、即に、讀方教育が國語教育の本領を發揮すれば國語の指導とならなければならない。此の爲めには方言矯正が前提として行はれて來る。但し方言矯正には、此れに代るべき標準語のある事を條件とする。それは方言であつてそれに相當する標準語の無い樣な方言矯正の範圍外である。元來都市の語彙は或方面では極めて豐富であるが又或る方面に於ては極めて貧弱であるのを免れない。例へば東京と樺太、北海道との對比、東京と臺灣、琉球、南洋とを比較すれば、地理的にも、甚だしく相違してゐますので、動植物にしても、風俗習慣にしても、異つたものや、異なつた言葉があるはすである。同じ關東地方間でも都市の中心と農村漁村とを對比すれば、生活上の言葉が如何に都市的に偏してゐるかゞ分る故に、地方にあつては、東京に全然なきものは地方の方言が標準語に逆輸入せられる。彼の「馴鹿」の如きはその一例である。方言矯正は先づ教師自身の方言矯正を先決問題とする。而る後に兒童に及ぼすべきである。兒童の方言矯正は實行を第一とし、あらゆる機會を通じて体得せしむる要あり、先づ方言を指示して、方言に代るべき標準語を示さなければならない。而して學校用語として方言が無くなれば、家庭に漸次及ぼして學校家庭即ち兒童生活のあらゆる方面にこれが徹底する。而し其の間種々の問題が伏在してゐて一朝一夕の業ではない事を知らなければならない。兒童は早く環境に順應し易い。大人なる教師が返つて取殘され、指導者自身が標準語を破る樣な事にならんとも判り難し、方言矯正は順を追ふて、兒童の自覺性に訴へて自發的に爲さしむべきである。こゝに生活指導の本義が存して居る。强制的なものは一時の附燒刃で、すぐ脱落す殊に、綴方作爲上に現はれる方言に就いて、方言矯正の良い指針が與へらるのは、低學年生の綴方は方言交りのものであるからである。漸次方言が矯正が進んで來れば他の文は標準語にして、對話の箇所は方言を一時可能する。而るに高學年に及べば對話の部分といひども、標準語で聞き得る樣にならなければ、ならぬ。但し他人の對話を寫生したものは、方言が交つても眞實を寫さなければならぬされど此の際の方言は批判的に見た方言であつて無自覺の方言使用とは異なるのである。生活は言葉に現はれる。言葉は生活を潤色する。文字言語を對象とする綴方が音聲言語の自由時間と共に方言矯正上に効果あらしめ易いのは云ふまでもない。綴方、話し方の一元化が稱へられる際、讀本の中の言葉の指導は、綴方へ反映するまでに、自由時間に言語化するまでに徹底す

る事が望ましい。眞に自分のものになり消化せられた言葉の指導としての讀方は、方言矯正の意圖なくして標準語の現れが讀本を中心に發散するものである。今日の讀方は單なる文學の讀方ではなくて國語教育である。國語としての標準語による陶冶である。さればこの氣分を高揚する積極的方策によつて消極的な方言矯正の如きは物に添ふ陰の如く、附きまとつて來るのである。

第三章　國語教育と方言の問題

方言が國語教育と重視せらるべき事は萬國共通の事であるが、日本では他國よりも一層重視すべき理由がある。それは第一に地理的に、第二、歴史的の理由である。熱帶より亞寒帶まで細長く列なつてゐるやうな國は、外にあるまい。青森市から鹿兒島市までででも二千三百粁ある。その間には、山有り、川あり、海あり、交通を遮つてゐる。交通の不便が、言語の變遷を大きくする事は見易い理由である。第二に、日本には最近まで封建制度が續いた。我々の祖父は頭にチョン髷を載せ、腰に大小を差した侍でなければ、腰に矢立を差した町人であつたのである。彼等の國家意識は藩境を彷徨してゐた。津輕藩と南部藩はフランスとプロシヤとのそれの如しと、德富蘇峰氏は喝破した。相馬大作が矢立峠に、津輕藩主を狙撃した時に彼の心理は、歐洲大戰爭の因を成つた、セルビヤの一青年のそれのやうであつたらう。かういふ時代にあつては自分の言葉が他藩に通じないからとて、それを恥辱とか不便とか感ずる事は殆ど無かつたらう。而し封建の溫床はいつまでも續く性質のものではない。嘉永六年、浦賀灣頭一發の砲聲は封建八百年の眠をさまし、こゝに初めて日本以外にも國が有り、日本語以外にも國語がある事を知つた。この時程國家意識の高められた事はない。この時以後關心は藩より國家へと擴大された。明治維新後の大事件は色々あるが、方言に關する限り、廢藩置縣、學制發布、鐵道布設、言文一致運動等を重要視しなければならない。廢藩置縣によつて封建制度は事實上滅びて、郡縣制度が之に代つた。學制發布　よつて義務教育の制は布かれ、邑に不學の戸なく、戸に不學の人なしといふ理想が高く掲げられた。鐵道布設によつて、交通は便利となり、他縣人の往來は繁しくなり、從つて標準語を話す機會が多くなり、言文一致運動が實施されて標準語が目に映ずる機會が多くなつた。日本は七十年たらづに封建日本より世界の日本へと飛躍した。これは世界史上に類例の無い事である日本の現代史は、獨自のものである。從つて教育も日本の國情に即した獨自のものでなければならぬはずだが、明治時代は西洋文物取入れるに急にして、さういふ點を顧慮するいとまがなかつたらしい。數學や理科ならば西洋の直輸入もよいが、國語になるとさうは行かない。科學には國境はないかも知れないが、國語には國境がある日本程方言の多い國はないだらう。日本語方言矯正の必要を痛感して居る國も無かるべきはずである。而るに實は、これが教育上餘り重要視されずに來たのは、西洋風の教育の餘弊である。しかし最近この問題に有識者が目ざめてきたのは、後れ馳せながら結構である。今喜多高女の安達教諭の會津方言の研究の一部を紹介する。

一、會津方言

下女に庭を掃かせろ――上の文を會津方言に直すと。

喜多方地方――ゲジョニ、ニワオ、ハガセツセエー。
野澤地方――ゲジョニ、ニワオ、ハガセツセエー。
若松地方――ゲジョニ、ニワオ、ハカセロ。
田島地方――ゲジョニ、オメエオ、ハガセロ。
猪苗代地方――ゲジョニ、ニワオ、ハガセロ。

となる。又、こちらへ伺ふきりでどこへもあがりませんといふのを直すと。

喜多方地方――コツチノウツツア、カホダシタキリデドコサモ、アガンネーダカラシ。
野澤地方――コツチノウツツア、アガツタキリデ、ドコサモアガンネーダカラシ。
若松地方――コツチニ、アガツタキリデ、ドコサモアガンネーダカラシ。
田島地方――コツチヤー、アガツタキリデ、ドコサモアガンネーダカラシ。
猪苗代地方――コツチニアガツタキリデ、ドコサモアガンネーダカラ。

となる。此上の五區劃は語法上の特徴を主として音聲や學語など參照したのであるが、盤越西線を、喜多方より新潟に向へばよく喜多方の人は「これ食はネーガヨ」と云へば西に六里進んだ野澤地方の人は「これ食はネーガエ」と云ふ。若松地方で「ソーデネエーガラ」と云へば、喜多方方では「ソンネーベシタ」と云ひ。野澤地方では「ソンネーベワイ」と云ふ。

二、方言

會津方言

	註釋	
アグデーック	惡口を云ふ	形
イッペエ	多い、たくさん	副
ウソツコキ	虚言者	名
エガネーゲンジョモ	行かないけれども	句
オトゲ	「オトガヒ」	名
キチゲ	狂人	名
クラスケル	打つ、なぐる	句
コゲーラ	このへん	名
コネーダ	この間	名
シツケル	濕る	句
シジミツカイ	蜆	名
シビタレ	ケチンボウ、弱者、いくぢなし	名
ショツペー	鹽辛い	形
シペエ	しよう、しませう	句
シラネー	知らない	句
ソーダズー	さうである	句
ズエーゴ	田舍	名
ダダオコネル	無理を云ふ	句
チミテー	冷たいこと	形
トーネッコ	仔馬のこと	名
トブ	走ること	名
トンバ	とんぼ	名
ナカンナ	泣かれるな	句
ナンシテ	どうして	副
ノツペエ	時時	名
ハコボコ	白墨	名
ハペキ	脚絆	名
ハラクツチエ	腹一ぱいである	句
ヒナグセー	焦くさい	形
ブツクツチヤ	破れた	形
ソンジヤ	然らば	接
ペチヤクチヤ	饒舌	副
マジツポイ	まばゆい	形
ママテー	丁寧	名
マルツコイ	圓い	名
ミグセエー	見苦しい	形
メグセエー	醜い	形
メゲー	可愛い	形
ヤロツコ	男兒を云ふ	名
ユルイ	ゐろり	名

現代社會と國語教育

第一章　言語教養と國語教育

第一これまでの國語教育は言語の教養をはなはだしく閑却して居たので、そこから幾多の病根も缺陷も生じて來た。ゆえに言語の教養にふかく意を用い、まづ兒童・生徒の言語財を豐富にすること、これまでのように文字教育を偏重して、言語教育を輕視する弊をため、英、佛、獨等に於けるがごとく、言語教育を中心として進むように改めることが、國語教育改善の第一歩である。つぎに標準語の教養にふかく留意し、義務教育を修了するまでには、大体標準語によつて自由に表現し得る力を養うことに努めなければならぬ。それには教師自身まず標準語の修養に努め、教壇では地方語を一切用いないように心掛けなければならない。かくて純正な語感を養成すれば、はじめて國語教育が人格の養成、品性の向上に資することが出來るのである。現代社會の狀勢に鑑み、教育上もつともふかく留意しなければならないのは、人格の養成と品性の向上である。世相の惡化は要するに人格や品性の低下に原由するのであるから、これを救うには、國語教育を振作して、純正な語感を養い、俗惡野卑な言葉はみずから恥じて用いないように仕向けなければならぬ。イギリスのゼントルマンがいかにその言葉づかいに注意するかに鑑みても、純正な語感の養成が今日の時弊を救ふ第一義であらねばならぬ。いまさかんに流行しつゝある歌謠曲の文句のいかに野卑にして下品なものであるか、心あるものの眉をひそめるものが多いのである。これを公然吟詠して怪しまないのを見ても現時の日本國民がいかに純正な語感から疎くなつて居るかを知るに足るのである。純正の語感の修養なくして高潔な人格や品性を保つことは不可能である。純正な語感の修養とともに、ふかく留意しなければならないのは、敬語の用法である。さきに述べた通、我國情に即して敬語が特に異常な發達をしたのであるから、その用法を正しくして、これをあやまらぬように教養することが、國家や社會や家庭の秩序を保つ上から見て、もつとも肝要なことである。近來その用法が亂れて來たことが世相の惡化を來した有力な原因であるから、現代社會の時弊を救ふには、敬語の用法を正しくすることが緊要である。

第二章　日本精神と國語教育

第二には日本精神の作興に資することで、これは國語教育のもつとも重大な使命である。これまでとても、これは決して輕視されては居らぬ。德川時代における寺子屋のごとき、これに全力を注いで居たといつてもあやまりはないと思う。しかるに現今世界の平和がつねにおびやかされ、一觸即發の危險な狀勢に存するのであるが、この重大な秋に當つて、國家を泰山の安におくことは、國民がかたく一致團結して、忠誠を國家にいたすようにするより外に途はない。日本國民が一致團結して國家をかたく護るならば、いかなる事變に處しても、決して驚くに及ばぬ。しかもかくのごとき忠誠な精神は、國語教育によつて養われなければならぬ。外國よりいろ〳〵な思想も輸入され、これに迷わされて、その歸向をあやまるものもあらわれて來たが、もし、一人でもそうしたものゝあらわれて來ることは、國語教育不徹底の結果と見なければならぬ。國語・國史および修身の教育が徹底して、國民一般をしてよく國體の精華を体得せしめて居れば、その歸向をあやまるものゝあらわれるはずがないのである。しかし、遺憾ながらその絕無を斷言し難い今日、この時弊を救うなにより緊要な方策は、國語・國史および修身の教育を刷新して、その徹底を期することであらねばならぬ。この點から見て、現時の國語教育には根本的に改善刷新を加えるべき幾多の問題の存することを痛感するのである。

第三章　國語教授法の刷新改善

第三は國語教授法の刷新改善である。さきに述べた通、國語教育は言語の教養および日本精神の作興とゆう。きわめて重大な責務を有して居るに拘らず、その責務が完全に果されて居ない。とゆうのは、今日の際家は教法の技術にひたすら腐心して、いさゝか大局を忘れて居る傾がある。國語教育上から見れば、教法の研究もすこぶる大事なことで、これを等閑に附してはならぬ。大正、昭和になつてから、教法の研究がさかんになり、その面目を一新するようになつて、成績も年とともに向上して來たことはまことによろこばしい。明治時代と大正、昭和時代とを比較して見ると、その教法に劃期的な進歩が認められる。しかしながら、あまりに教法の技術に腐心して、他を顧るいとまがないところから、言語の教養とゆう重大な責務が閑却

され、國語の統制が近來はなはだしく亂れて來た。青年男女の言葉づかひの亂雜になつて來たことは、これを立證してあまりあるのである。しからば教法そのものは歐米に比して見劣りのしないまでに進んで來たかとゆうと、遺憾ながらいなと否定せざるを得ない狀態に存する。とゆうのは、いたずらに教法の形式に囚らわれ、すこしも魂がはいつて居ない。すなわち確固たる信念の下に教授するところまで進んで居ない。つねに不安の念を抱きながら、その形式を追うて居る姿である。問答法にしても、歐米におけるものとは、似ても似つかぬものである。發問して應答させるとゆう手順は同じであつても、兒童●生徒を轉導して、教材の要旨を讀み取らせるまでに至つて居ない。右のような教法によつては、日本精神の作興に資することは至難の業である。國語にしても、漢文にしても、兒童●生徒を轉導してかれら自身に讀みとらせるやうにしなければ、讀方教授の徹底を期することが出來ないはずである。しかるに、教法研究の重點をこゝに置かずして、いろ〳〵な目新しい主義を主張の送迎に日もなほ足らぬ有樣である。目新しい主義主張も自分のものにこなして、これならばたしかにやつていけるとゆふ確信を以て指導するなら、かならずしもこれが非難すべきでないが、たゞその型のみをまねて、魂を入れることを忘れて居るいな、魂を入れるまでにその主義主張を究明して居ないのである。それではその主義主張もなんらの效果がないのみならず、舊法に比して成績がはるかに劣るようなことすら少くない。ドイツの教育家のごとく、確信を有ち得ないものは決して取らない。一旦これならとゆう確信の下に取入れたならば、それを一生の業とする、みだりに變改放棄しないとゆう態度を持して、おもむろに教壇に立つように心掛けなければならぬ。確信のない指導案によつてその日を送ることは、まさに人の子を賊するもので、教育者としてはかたく戒めなければならないのである。しかるに、實際は今日のところ確信のない授業が少くない。かくして國語教育上現代社會の時弊を救うことは及びもないことであるから、實際家はこゝにふかく反省しなければならぬ。確信のない教育ほど世を毒するものはないのであるから、いかなる主義主張によるにしても、これならばとゆう確信を持するまでに研究し、安心して指導し得るようにすべきで、現代社會に即して國語教育をおういに意義あらしめるには、この心掛がなにより大事である。この心掛が足らぬところに、現代國語教育の缺陷が存するのである。

第四章　國語教師の修養

つぎに第四には、國語教育をして現代社會に即し、おういに意義あらしめるようにするには、これを擔任するもの〻自己修養、すなわちおういに學力の增進を圖らなければならぬ。國語教育の任に當るものは、まず言語の修養を必要とする。標準語や標準口語法についてはもちろんのこと。日本語の上代から今日に至る歷史的變遷についても、一通り知つて居らねばならぬまた標準語と地方語●文語法と口語法との關係も知つておく必要がある。この修養が足らぬところから、とかく教壇に立つても、言語の教養を十分に進めていくことが出來ないのである。

國民生活と國語教育

第一章　國民生活と國民教育

我々の生活單位であるところの國民生活といふものは一体如何なるものであらうか。國民生活は言ふまでもなく、國民として生きることであつて、個人として生きる個人生活、家族として生きる家族生活、社會人として生きる社會生活、人類として生きる人類生活等と相對立してゐるものである。これらはその生きる範圍、世界の違ふことに由つて、それ〴〵に意義、目標を異にしてゐる。個人生活は、個人の向上完成、その幸福の爲に營まれるものであり、家族生活は家族の一員として、そゝ平和、幸福、向上の爲になさるべきものであり、社會生活は社會の進步發展、平和幸福の爲に、その一員として盡くすところのものであるやうに、國民生活は、國家の發展向上と、その平和康寧の爲に、その一員として盡くすところのものである。併し、これらの生活は、それ〴〵に孤立して存するものでなく、互に密接に相連繫してゐるものである。國民生活といふものは、悠久なる時間を限つた現代の間にのみ存するものではなく、上は遠く過去全体に連なり、下は永遠の將來にも連なるものである。故にその間を一貫して渝らないものが存することは、疑ふの餘地はないのである。これを國民性といひ、國民精神といふ。同時に又、國民生活はこれを横に時代を劃して見ると、時代々々の特徴があり、時代を趁うて變化してゐる。さうしてその變化してゐる時代々々の生活を見ると、それは單にその自國のみに特に存してゐるのでなく、その交渉關係の及んでゐる廣い範圍

から、種々なる影響感化を受け、同時に他にも影響感化を與へて、相互間に密なる關係を保つて存在するものである。現に我々の營んでゐる現代の國民生活に見ても、政治、軍事、產業、交通、教育、文藝等、一として世界各國と浸交渉に、孤立的に存在するものはない。

國民生活には色々の面がある。その著しいものについていへば、政治生活は政治家たるものに限るものではない。立憲治下の國民は代議士を議院に送る爲に、有能の良議員を選擧する。軍事にあつては、不具等の特殊なるもの丶外、男子は悉く兵役の義務を負うてゐる。その他國民として、それ〴〵の權利と義務を有するところには、それ〴〵の關係交渉を以て生活するのである。

これらの點を考へると、國民教育は國民性の自覺、涵養、國民精神の把持を一つの中心とし、又時代精神、世界文化の理解を他の一つの中心とし、政治、軍事、社會等々の各方面に正しく生きるやうに、指導し、訓練することであらねばならない。

第二章　昭和日本と國民教育

國史を案ずるに、三千年の歷史中、建國覇業のことはさて措き、その後國民的に大發展、大飛躍をなすに至つた二大事業としては、孝德天皇時代の大化改新と、明治天皇時代の明治維新とを擧げねばならない。この二大革新的大事業の根底となつた二大精神があつて、それがこの二大事業に符節を合せるやうに一致してゐる事實は、我々の決して忘れてはならないことである。この二大精神といふのは、一つはわが建國の大精神に復らうとした精神である。即ち建國より年を經て來る間には、社會の或事情の下に、或階級の勢力が非常に增大した爲に、一系皇統を承けさせられた天皇の、親ら統治し給ふことが阻止されて來てゐたのを、再び建國當初のさまに復歸させようとした精神であり、他の一つは、當時交通の開けてゐた外國の持つてゐた特殊な文化にに接して、在來の我が文化に缺けてゐた長所美點を認識すると共に、これを愛し、これを輸入し、以て我が制度政治、思想等の上に採長補短を行つたところの精神である。前者を崇本の精神といふならば、後者は愛外の精神である。前者を保守的精神と見るならば、後者は進步的精神である。前者を國の內なるものを尊ぶ精神と見るならば、後者は國の外なるものを愛する精神である。前者を傳統を崇ぶ精神と見るならば、後者は新しいものを愛する精神である。これらの兩々相矛盾するが如く見られる二つの精神の、相共に働くところに、上の二大事業が見事に成功して、爾後の國力の發展、文化の展開に大に力をなしてゐるのである。

この事業を明かに認識する上は、昭和の國民教育の大方針は、この二大精神の自覺と、その涵養とを基礎とした上に定められねばならない。さうして、この二大精神の巧みな協力、調和に由つて、國威、國力の充實、發揚と、新日本文化の絕えざる創造發展とに邁進すべきやうに、小國民を指導して行くことを本幹とすべきである。このことだけは、斷じて疑を容すべき餘地はあるまい。

第三章　國民教育に於ける國語科

わが國語科は、昔の所謂讀み書きを授けるといふ、形式方面、實用方面に即して見ると、現代生活の必要に應ずる學科である。併し又その教材の持つ內容方面に即して見ると、現代生活に必要な知識を授くると共に、我々の祖先達が過去長い年月に亘つて營んで來た國民生活を貫いて。その本幹となつてゐた。國民性の自覺、國民精神の理解把持の爲に盡くすものである。この兩面を持つことに於ては修身科と一致するが、國史科は後の一方にのみ働くものである。なほ修身科は道德、殊に國民道德の一方面に限つて取扱ふものであつて、國民精神の全面、全貌に及ばない。さうしてその取扱ひ方は、分解した德目に就いて、これを抽象的に說明することが主である。例話もこれに伴ふものではあるが、その例話は精細な敍述には及び得ないことを常とする。國史科は主として史實を敍し、これに多少の批判を附するものであるから、修身科の如き抽象的に傾くことはないが、その史實の敍述は大抵その外貌を寫すに止まり、輪廓を描くに止まるのである。ところが、國語科の教材にあつては、多くの文學的作品、詩歌の類を採るものであるから、國民的精神を內容とし、これを具体化して表現したものをよく採擇し、よく排列した讀本になると、道德以外の國民精神にも及んでゐる。又その具体表現法も學校の程度に依つて種々に亘り、その優秀なものを擇んであつて、これを季節、行事等の環境に配してある。同一內容にしても表現法を變へて繰返してある。殊に詩人の情熱、作家の想像美化を經てゐるものであるから、國史の史實や修身の例話の如き、無味乾燥な文とは、大に撰を異にするものである。この文學性の魅力が、單なる知識として受容されるものと違つて、若いもの丶靈に深く影響して、强い感化

を與へる。この點が修身科や國史科の持ち得ない國語科の長所としなければならない。

第四章　國民傳統精神と國語教育

國民精神は國民の性格的特徴の上に發生し、發展するものであるから、國民教育上にいふ國民性の自覺、涵養と國民傳統精神の理解とは、密接不離の關係に立つものである。國民性といつても、これを把握し、理解することは容易のことでなく、國民傳統精神といつても、時代々々の特殊な現れの中に一貫するところのものを見出すことは、又決して容易なことではない。國民性にしても、國民精神にしても、長所もあれば、短所もある。一概に唯伸ばせばよいといふものでもあるまい。

さりながら、既に第二章にいへるが如く、我國家の大發展、我文化の大發展を豫想した國民教育である以上、その基礎となるべき保守的精神、本を崇ぶの精神、廣く外なるものを愛する精神とを二中心とし、更にその二中心の融化を目標として國民精神の涵養はなさるべきである。從つて國民性の自覺涵養も亦この二精神の背景に立つてゐる崇本性と、包容融化性を目標としてなさるべきである。

第五章　國字問題と國語教育

明治時代に至つて、西洋諸國の事情を知るに至り、彼等の使用するアルハベット二十六字の至極便利であり、我國字のそれに比して甚だ不便にして、學習の困難なことをも知るに至り、こゝに國字改良の問題が起るに至つた。即ち在來の假名や漢字を廢止してローマ字にしようとするローマ字說、漢字のみを廢して、假名のみにしようとする假名字說、及びローマ字でもなく、假名でもなく、全く新なる字形を創始しようとする新國字說などが提唱された。これ等の諸說それ〴〵に提唱の理由を持つてゐることはいふまでもないが、提唱されて、既に久しいのに一向社會有識者の廣い共鳴を得ない一事も、その實現性の少いことを證してゐる事實ではあるまいか。國字改善に關して眞に實現性を多く持つてゐるものは、これら說談の外に在る漢字の制限整理說である。

漢字の制限整理の實行は、國字改善の大方針としては、今の心ある識者間に異議のないものである。既に遠く明治政府の下にあつた國語調査會が、この實行調査に著手し、その後同會が廢止されて、臨時國語調査會が設けられてから、同會がこれを引繼いで調査研究し、今現に國語審議會にその原案が附議されてゐる。余はこの國字問題の決定を國語教育發展のために必要とするものである。かゝる問題を等閑に附して置くことは、躍進日本の爲に大に遺憾とせざるを得ない。

第六章　假名遣問題と國語教育

假名遣問題も古い問題である。最近數年前文部省が新語讀本にその改定假名遣を使用しようとしたので、又この問題を蒸返して文部省對民間、小學校教師對中等以上學校教師の問題とまでなつたやうに見えたのは、我々の記憶に新たなことである。文部省臨時國語調査會改定案といふのは、字音假名遣、國語假名遣共に大体これを發音式の表記法に改めようとするのである併し純粹に發音的なものでなく、實際上の事情を參酌した結果の妥協的な案である。

躍進日本、多忙日本の爲に、出來得るならば假名遣も簡易化したいことではあるが、文部省案の如きものが、不都合なく、支障なく、一般社會に實行されようとは思はれない。よつて字音假名遣だけは、現に勵行の出來ないことであるから、發音式改定を斷行し、國語假名遣は歷史的假名遣のまゝにして、これを小學校から眞面目に教授もし、訓練させる外に道はあるまいさうして、その教授練習には、紛ひ易いものゝ中、少數の方を暗記せしめて、その他は他の一方と考へしめる。昔の方法を復活させるを最も便利とするであらう。

第七章　綴方作文の文藝創作的傾向の反省

教育實際化の必要を叫ばれてゐる今日、國民實際生活に疎い國民教育は、決して良い教育とはいへない。一面の理想に走つて、實際生活に即した方面を閑却してゐることが、今日の國語教育の中に見出されないであらうか。余は綴方作文の文藝創作

的傾向を見て、その反省を促し、その實際化の必要を唱へざるを得ないものゝあることを感ずる。實用非實用といふ言葉はこれを文章の實際に當てゝ見ると、可なり明瞭を缺くものがあるが、今日の國民日常の生活に直接に利用されてゐる各種文章を實用文とし、純文藝的文章即ち創作の文を非實用文と解しておくことゝする。

普通の國民の、實際生活の一部として綴る文章は、如何なる場合に綴り、又如何なる文章であるかと考へて見ると、詩人創作家のやうな特殊な人を除けば、國民が或外部からの必要に迫られて綴る文、即ち操觚者などが或議論を社會に發表するの必要から綴る論文、學者がその學說を社會に示す必要から綴る說明文、一般人が自家及び周圍の消息を通するの必要から綴る書牘文、商人や會社員などが、商賣上の廣告宣傳の必要から綴る廣告宣傳文、吏員などが事件の報告の必要から綴る報告文の類は、すべてそれである。かゝる文は修辭學上の各種の文型に亘り、又社會に實際上行はれてゐる各特殊樣式の文にも亘つてゐる。次に自己內面からの己み難い欲求、即ち創作慾の刺戟を受けて、文藝のいろ〳〵な形態の創作をなすこともあるが、これは寧ろ特殊な人のことで、一般人のことではない。一般國民に在つては、各部からの必要に迫られて綴る場合の方が、內面の慾求に迫られて綴る場合よりは、遙かに多いのである。即ち實用文を綴る必要の方が、非實用文を作る場合よりは遙に多いのである。

さうだとすると、國民の實際生活に即した綴方作文は、實用文を主とした指導でなければならない。固より創作心を養ふことは、國民の創造生活に必要なことであるから、文藝の創作をなさしめることも、これを一概に否認すべきではないが、實用文を殆ど無視して置いて、只管文藝創作に赴くことは、斷じて國民教育に忠實ではないのである。

第八章　結　語

國民生活の現狀は頗る復雜である。この復雜なる國民生活に適應し、併せて躍進日本の現況に相當した國語教育を考ふれば事甚だ多端に亘る。本篇に於ては、この多端なるものゝ中から、比較的重要なる事項を擇んで述べる事とした。

現代教育と國語教育

第一章　教育と國語教育

古は教育と云へば、殆ど國語教育で代表されて居た。即ち我國での讀み・書き・算盤の思想がそれであり、又歐米でも三つのRでこれを代表させて居た。そしてこの中の讀みと書き、即ち讀書習字では、今日ほどの廣い實質的智識が含まれて居なかつたけれども、それでも、讀む材料の中にも書く材料の中にも、强ひて分類すれば、修身・歷史・地理その他の學問の材料が含まれて居た。殘りの算盤の方にはそんなに多くの時間を與へて居なかつたから、謂はゞ教育、即ち家庭や學校や社會的設營の仕事の主なる教育は、殆ど國語であつたと云つて差支がない。そしてこの考へ方は、强ちそんなに間違つたものでないのである。

それに算盤を教へるにも、日常の應接作法を教へるにも、必ず話言葉を借りなければならないから、これは今日の話方の手段に依つて居るものと云はなければならない譯である。

かくして教育と云へば、どうしても國語と離れることが出來ないのは、今日以後と雖も、昔と異るところはない。そしてこの考へが、東西全くその歸を一にして居るのも、頗る注意すべきことである。

第二章　我國の國語教語と獨佛の國語教育

我國の國語教育の實際を見れば、重任を負はされて居るこの教育の成績は頗る惡く、これを歐米殊にドイツ、フランスのそれ等に比べて見れば、實に著しく劣つて居り、私は常に慘めなものと評して居るのも、決して徒に誇張して云ふつもりではないのである。

私はかうした言葉を放つた責任上、我國國語教育の成績不良の事實を述べる必要を感ずるが、これは次の項に讓り、こゝに

私に頗る羨ましく感ぜられた獨佛二國の國語教育を一寸回想して見たい。

先づドイツであるが、ドイツには、今日の大ドイツになつた頃の前後、各方面の偉人が雲の如く現はれたが、さうした人々——哲學者・文學者・藝術家・科學者・宗教家・政治家・軍人等——の文や詩が、今日小學校の讀本にまでも採られて居て、それと共に現代作家の優れた作品が讀本に豐富に盛られて居るから、第一、兒童少年のかうした教材に對する尊信の念が頗る強い。從つて內容的には、これを讀むことに依つて、眞のドイツ魂を養ひ、形式的には、純なドイツ語を學んで行く。この結果も亦等しく、遂に生粹のドイツ人の養成に貢獻する。抑もドイツ語の語法は、人も知る如く頗る複雜であるが、それだけ明晰な表現に適して居る。これを私自身が、青年期の將に終らんとする頃に學んだ折の困難から想像しても、さぞ小學校兒童などには語法の教育が困難でないかと思つて居た。愈々實施の教授を見ると、尋常四年以下では、その誤りを、何れの教科の教授の場合でも、直ちにその場で訂正して行くが、尋常五年以上になれば、これを相當規則正しく、系統的に訓練して行くやうである。私は、その指導の態度の熱烈さと、學習の態度の眞劍さとには、屢々、感激させられた。そして又殊に、その讀む材料が何れも名高い人の作品であるだけ、ドイツの國語教授には、諳誦の作業を課することが頗る多いのは、直ちに眼に着く特徴である。

次にフランスである。先づこの國の人の自國語に對するプライドの大きいのには、更に驚かされてしまふ。「ドイツの言葉は獸類の言葉、イギリスの言葉は商人の言葉、フランスの言葉は神の言葉」など云つて居るだけあつて、言葉の教育には極端に熱心であると云つていい。第一、讀本の材料は、近い時代の人の作品を採つて來る點では、私の判斷では、ドイツほど都合がよくなつて居なかつたやうであるが、然も見方に依つては、早くから開けたこの國の文化の優れた點を表はす種類が選ばれ小學校の材料にもユーゴーなどがあつたのである。

それで內容的には、ドイツと同じやうに、國語の教育に依つて、フランス魂を養はうとし、形式的にはフランス文化的の教養を完了しようとして居る。こゝでは殊に讀みぶりの訓練、發音やアクセントや調子の訓練が、全く美しいと思つた。流石に自國語を神の言葉と誇つて居るだけあると思つた。

のみならず、自國語に對する尊重と誇りとから、讀方・綴方及び書方・國語三部門の教育に格段の注意が拂はれ、殊にフランス語の綴りの特質上から、書取の爲に大いに骨折り、その綺麗なことも異常である。又フランスの朗讀は、ドイツのが頗る

強いといふ感じを與へるに對して、全く美しいと云ふ氣持を起こさせる。

第三章　自國語を馬鹿にする國民

偖先づ、我國の國語教育の成績の程度を示さうと思ふが、今日小學校・中等學校の國語教育に於ては、固よりいろ〳〵の問題もあるが、殊に悲しむべきことは、文字・語句・語法等專ら國語そのものゝ組織から大いに禍せられる部面のあることである。勿論讀むものゝ內容的價値に關する問題も、中等教育にも存するが、前者ほどこれが解決に困難を感ずるものではない。

今、後者即ち兒童少年の讀むべき材料について考へるに、小學校は國定教科書であるから、思想の內容に關しては、先づ我國の教育精神を發揮するやうに選擇されるが、然もその作者に對する兒童の憧れの深さは、ドイツの讀本のやうには到底ありの改善に勞めて居られるのは、誠に嬉しいことである。

私は、かうした我國の國語事情から結果する國語教育の成績を下する或る一面として、主として文字語句等に關するものを左に擧げるとそれは、大体、(一)誤字。(二)既成語に不適當な語を當てること、(三)新造語の濫出、(四)假名遣の誤りである。

そして注意して專門學校の最上級、大學の最上級、女子專門學校の最上級の試驗答案を見れば、同一答案の或るところには誤りを記し、他の部分には正しく記したのもあり、或は二箇所とも異つた形で誤り記して居るのもあり、又或は、少しく注意するならば、決して誤る筈がないと思はれるものを誤つて居るものがあつたりして、これらの事實から、その答案の作者の心持は、「言葉はどうでもいゝ。」と云つた氣分の含まれて居るのを察することが出來、つまり自國の國語を馬鹿にしてかゝつて居るものゝ多いことで、ドイツの兒童までが、「ドイツの言葉は美しいでせう。」と云つて居る氣持と、全然反して居るのは誠に遺憾と云ふも愚である。

要するに、少しく言葉强く云へば、我國では高等の教育を受けても、その國語を正しく使へないと云ふことになる。それよりも更に恐ろしいことは、國民がその國語をどうでもいゝものと考へ、これを輕んじ、これを馬鹿にして居る心構へと態度とである。

その他、發音・アクセント・語法・書記法等にも、それ〴〵問題もあるが、略する。

第四章　國語政策

蓋し我國の國語教育の驚くべき不成績は、單に教師の努力の不足、教授法研究の不十分のみ歸することが出來ない。その一半の責任は、確に我が國語界の混亂にある。若しこれにして出來るだけ望ましい狀態に達しないならば、國語の教育は、遂にその目的を徹底的に達成することが出來ないのは、全く解り切つたことである。

私は端的に、我が國語政策に關する私の希望をあげる。

（一）國語調査機關を設けること

そして國語の整理の具体的問題中、最も重要な意義を有するものは、何と云つても漢字のそれである。その他假名遣・語法の整理等も頗る重要なものであらう。即ち

(1)、漢字問題の解決

(2)、假名遣問題の解決

(3)、その他の國語問題の整理

(4)、新語創製に關する機關の設置

(5)、標準字引の編纂

（二）國民の國語使用に關する規定を設けること。

（三）出版物、殊に新聞紙との協力の道を講ずること。

（四）主として役者の國語に對する自覺と教養とを高める道を講ずること。

（五）政治家がかうした百年の問題に對して見識を持つこと。

（六）國民の國語尊重意識を高める道を講ずること。

第五章　國語教育の改善

端的にその重要な方針を列擧すれば、私は左の諸項を最も緊切なものと確信する。

（一）有ゆる工夫を凝して、兒童少年に國語尊重の意識を養ふこと。

（二）言語意識――日本語意識を鋭敏にする工夫を凝らすこと。

（三）兒童少年にも現代の國語混亂の狀態を知らせ、將來これを立派な國語にするのは、彼等後進國民の義務であることを覺らせなくてはならぬ。

（四）社會に於ける國語の働きと、學校教育との關係を緊密にすること。

（五）國語教育の方法的用意として、大いに多讀を奬勵すること。

（六）話方の訓練を十分にすること。

（七）綴方を一層奬勵すること。

（八）書方の目的を誤つてはならぬ。

（九）書取の作業を一層重視すること。

（十）教科の學力を高めなくてはならぬ。

兒童語と國語教育

序

兒童語の問題は、これまで種々の學問的領域から、即ち心理學的領域においては勿論、言語學及び教育學的視角からも考究されてきたものゝやうであり、また夫々の學問的領域に於ても種々なる立場から省察の對象となつてきたといふことができる

シュテルンの云ふ如く、兒童語とは、最初の含意的に話された語から文構成の重要な各種形式の驅使に至るまでの言語時期を指すものとすれば、そこには宮然、發達の位相における時間的過程が問題とされるであらう。然して兒童語の發達過程を單なる外面的自然的テンポたる年令との平行關係において說明するまでなくて、兒童自身の學習過程に即する事實的條件によつて、眞に內面的必然的な脈絡を實證しようとする點にまで行かねばなるまいと思ふ。

この外、兒童語の發達に關聯して、兒童の發達による遲速、環境の相違による發達の遲速、又は發達の量の比較などに關する研究などについても同樣なことがいひ得るであらうと思はれる。

兒童語と國語教育について事柄を記することが本稿の目的であるが、なか〳〵系統的な敍述への展開は試みることは難儀なことであるといふ豫感がして成らない。

兒童語とは何か、それの發展委態は、そして兒童語の音韻的特色は……等について概論的敍述し、然して國語教育との關聯について記したいと思ふ。

第一章　兒童言語

兒童の言語とは、最初に含意的に話された語から文構成上各種形式の使驅に至るまでの言語時期をいふ。この時期における兒童の言語表現には、形式的にも內容的にも著しい特色が認められるのみならず、發達の程度も亦極めて速かであり、小學校入學以前の時期に於て言葉そのものは略々形成される。こゝに兒童の言語研究に對する理論的根據が然して實際的要求が胚胎する。

兒童の言語研究の起源は、遠くアリストテレスに溯り得るが、現在我々のもつ研究業績の多くは、前世紀末の兒童研究運動の勃興期並びにそれに續く今世紀初頭になされたものであり、ブライヤー・シュテルン・ピアジエ等を以てその代表者と稱することができる。就中、兒童語學建設者としてのシュルテンの學的功績は永久に記念さるべきであらう。我國に於ける兒童の言語研究も久保良英・城戸幡太郎・大脇義一等の諸氏によつて發展され、今日に於ては相當豐富な業蹟が得られてゐる。

いま此等諸氏の研究結果を綜合して、兒童に於ける言語發達の特色を概括するならば、情意語の發生を起點とし關係語の表現を終點とする意味の論理化の過程であると同時に、主觀的な自己中心的傾向より客觀的な社會的傾向へと進む概念の抽象化の過程であると稱することが出來るであらう。我々は、こゝに亦、言語內容としての分化と言語機能としての統一の委を、發達の主要傾向と認めることができる。

第二章　發生期における兒童の委態

兒童がいつ頃から意味ある言葉を發し初めるかについては、觀察者に依つて區々である。久保氏はその三人の男子について長男は生後二二九日、次男は生後二四三日、三男は生後三一八日と報告されており、大脇氏も亦、その二人の女子について、長女は生後三一二日、次女は生後三四一日目と發表されており、同一家庭に育つても、發語開始の自然的テンポには可成の個人差が見られる。それ故に家庭を異にし環境を異にする時、半年もの時間的隔りが生ずることは柳田重久氏の研究によつて示されてゐる。

この發生の自然的テンポの意味についてのその心理學意味は、當該兒童がいかなる具体的環境に成育したかによつて決定さるべきものであり、又その絕對的な時間單位は、觀察者の言語認識にも依存するものであつて、こゝに共通の一致を求むることはむしろ困難であり、かつそれ程重要な問題ではないであらう。然してこゝに關心事たるは、その發生期における言語の委態である。即ち、それがいかなる事態において、いかに表現されたかの究明であらう。

久保・柳田・大脇氏の實驗的研究によつて窺はれる如く、發生期における兒童語の凡ては食物への要求又は周圍の人物への呼びかけとして表示され、その心理的能因に即して考察する時は情意語と名づけることが出來るであらうし、又その形態的特色について見る時は、概ね單綴又は重音の單綴から成る寫聲的な形式をとつてゐることが知られるであらう。そしてその指向する意味は極めて包括的であり、兒童によつて發せられる「ブーブー」なる一語は、飛行機にも自動車にも用ひられ、「自動車がきた」「自動車を頂戴」「自動車がない」などの多樣の意味を含むと稱せられ一語でよく文の意味を代表するところから一語文又は文單語などゝ云はれてゐる。從つてその理解もそれが發せられる事態との關聯なしには正しき意味の把握が困難であることも自明の事柄であらう。

發生期における兒童の言語が情意語としての特質をもつものであることは、生物學的根據から當然の解明を與へられるであらう。こゝにいふ寫生的な言語形態、ゆはゆる擬聲語についても興味ある問題が起るのはまた當然であらう。

初期の兒童語に於ては、その數の乏しい語彙の中にも「ワンワン」（犬）。「ニャーニャー」（猫）。「モウモウ」（牛）「ブーン」（蚊）。「チューチュー」（雀）。「カーカー」（烏）。「ポーポー」（鳩）。「チンチン」（電車）。「ブーブー」（自動車）。「ポーポー」（汽車）。「ポチャポチャ」（風呂）。「ドドーン」（花火）。「パッパ」（煙草）「ポーポー」（火）。などの擬聲語が相當に多い割合で使用されるといふ事實は、學習としての兒童語の發達を考察する上に、興味ある問題であらう。

第三章　語音的特色より見たる兒童語の表現

兒童語發生の前段階における「カタコト」の表出において、すでに殆んど凡ての語音的素地が培はれるものではあるけれども、それからの直接の移行によつて言語の發生が認められるのではないであらうといふ點については、前述したところであるが、然らば、これらの語音的素地が、兒童の言語發達の過程において、いかに具現されるものであるかが、こゝに問題となる

兒童における音聲發達について詳細な研究をなしたレットゲルによれば、兒童が凡ての音聲を有意味な言葉に使用し得るのは三歳半以後であると述べてゐるが、久保氏の記述にもほゞ同樣なことが示されて居り、早期兒童語における語音的特異性の問題が示唆されてゐる。

この點に關する我が國の研究は、久保氏、石川七五三二氏、柳田重久氏、大西雅雄氏などによつて比較的詳細に記述が示されてゐることは、注目に値するであらう。

その内で音聲的見地から詳細な研究をされたのは大西氏であらうと思はれる。

氏は東京市内嬰兒及び幼兒約六十名について調査された結果として、彼等によつて誤まれ易い傾向として、亂れ音、音節の省略、子音脱落、「チ」音化作用、「ラ」音くづれ、間に合せ音、同化作用と轉置作用の七方向を擧げられ、就中「チ」音化作用は最も著しい特色として認めらるべきであり、その頻數は、幼兒發音の成形的過程の指標と見做しうるものであり、その原因は甘えロの構へに基くと稱せられる。次に氏の研究の一例をあげよう。

A、亂　れ　音

イタヾキマス——イタキリマス

B、音節の省略

イツテイラツシヤイ——イツチヤイ

C、子音脱落

ラツパ——アツパ

D、「チ」音化作用

S→ts

オサカナ——オチヤカナ

S→ts

オカシ——オカチ

ts→ts

イツツ——イチユチユ

t→ts

タクサン——チヤクサン

n→ts

ニーチヤン——チーチヤン

K→ts

カーチヤン——チヤーチヤン

n→ts

ヒコーキ——チコーキ

E、「ラ」行くづれ
　ローソク――ドーソク
F、問に合せ音　（略す）
G、同化作用と轉置作用
　コマゴメ（地名）――コマモメ
　テヌグイ

以上の諸例によつて、幼兒の言語表現における語音的特色の大体の傾向はほゞ窺ひ知ることが出來る。これらの傾向を支配する主な特色は、結局に於て、省略と轉化の二大方向に歸納されるであらう。

第四章　兒童語國語教育

國語教育の規定原理が、家庭としての兒童を民族語としての國語にまで統一することにあることは言ふまでもないが、小學校に與へられたる民族語としての國語は所謂標準語である。就學兒童の語彙が四、八〇〇語乃至は五、一〇〇語の多數に上り而もその大部分が標準語であることは、新入學兒童の語彙調査によつて明らかであるが、然し勿らこれは兒童自身の使用語彙といふよりは、むしろ理解語彙である。兒童自身の自然的な言語生活においては、より多くの兒童語形態が表現されてゐるであらうことは想像するに難くない。標準語と方言、方言と兒童語、かゝる二重の言語生活は、兒童の年齢が下ると共に又方言的種差の大なるに從つて、一層著しき姿を呈してゐるであらうと推定される。

それ故に兒童語の表現過程に於て、斯る二重的な過渡的段階から標準語への一元化の過程を知ることは國語教育の效果を窺ふ上に於て最も興味のある問題であると思はれる。

いづれにせよ、兒童に於ける文字の表現が言語の表現と著しく乘離をもつものであることは明かであり、兩者の平行的な發達、調和的な機能充足の方向にこそ、國語教育における今後の課題が殘されてゐるやうに思ふ。

第五章　結　び

豫定の頁數も超えてしまつた。これ位で筆を止めようと思ふ。要するに兒童語の研究は國語教育上の大きな任務であり、且つ斯道達成の基盤としてなさねばならない仕事であることは言ふまでもないことである。

然し、この研究たるや苦難多く、多岐にして勞を要するは白明のことである。

その苦難に負けず、見榮のない基本的な仕事で地味すぎるきらひがないでもないが、ぜひこの研究はなさねばならないし、それに對する一通りの見識はあつて欲しいと思ふ。

然らざるときはせつかくの國語教育も兒童の生活を言葉を理解しない教育に走り、兒童をして言葉の二重生活の苦惱の中に追ひ込んで二律背反のヂレンマに陷れ、亂心的な言語の生活としてしまふであらうから――

參考文獻

新讀方教育原論　竹澤義夫
形象の讀方教育　佐藤德市
實踐讀方教育　田中武烈
讀方教育の實踐原理　田中豐太郎
勞作主義讀方教育　菊地秀雄
國語の力　垣内松三
國語教育論決　同
國語指導論　同
國語解釋學概說　同
國語學習論　同
表現學概說　同

國語教育科學概說　同　友納友次郎
讀方教育原論　西山庸平
讀方心理學原論　石山脩平
教育的解釋學　同　山内才治
國語教育論　大塲俊助
素直な讀方教育　加茂學而
國語教育基礎理論　宮川菊芳
國語鑑賞の心境　國語教育學會
國語教育論叢　篠原助市
日本文學の本質と國語教育　勝部謙造
理論的教育學　金子馬治
國語解釋學　土田杏村
哲學概論　讀方教育研究會
文學論　諸原貞雄
日本精神と國語教育の諸問題　與水實
日本精神概說　垣内松三
國語教育理論　同　千葉春雄編
國語教育の諸問題（上）（下）　根岸榮之
同　稲富榮次郎
新文藝思潮と國語教育
哲學を基礎とせる教師論
教育哲學思潮

現代教授思潮　田花爲雄
現代文學の思潮と國語教育　千葉春雄編
福島縣方言辭典　兒玉卯一郎
現代讀方教育の動向と實踐　東宛書房編
教育の本質觀　小西重直
勞作教育　同
教育原理　同
學校教育　同
哲學辭典　同
教育辭典　岩波刊行
教育學辭典（全五冊）　篠原助市
文章心理學　岩波刊行
表現學概說——國語科學講座——　波多野完治
國語表現學——國語教育（岩波）——　城戸幡太郎
字源　同
廣辭林
國語辭典（全五卷）　金澤庄三郎
大百科辭典　佐々木信綱編
言海　三省堂刊行
學習諸問題の解決　大槻文彦
學級經營學　木下竹次
國文學聯講（上世）　同　藤村作編

同　（中世）
同　（近世）
上代文學史（上）
同　（下）
日本文學史要
日本文學史
有職故實
教育學通論
國語教育の根本問題
現象學的教育思潮研究
國語教育——岩波講座——
國語科學講座
國史人名辭典
平安朝文學史
室町文學史
江戸文學史（上卷）
同　（中卷）
明治文學史
小學國語讀本模範指導書（卷一）
同　（卷二）
同　（卷三）
同　（卷四）

同　佐々木信綱
同　飯村哲次
同　島津久基
江馬務
佐藤熊次郎
長田新
入澤宗壽
岩波書店
明治書院
前島德太郎編
五十嵐力
吉澤義則
高野辰之
同　本原田間
同　上田
同　新直久
同　吉茂雄

同　（卷五）
同　（卷六）
同　（卷七）
同　（卷八）
同　（卷九）
兒童百科辭典（文藝篇）（宗教哲學篇）
同
讀方指導体系
兒童心理學
軍記物語評釋
國語常識（その一）
學習指導過程
讀方教育の理論と實踐
現代詩の作り方
雜誌「教育」
讀方教育
教育、國語教育
新興國語教育
教育研究
大百科事典
東洋藝術講座日本音樂史
國語教育

第七編　國語教育の諸問題

同　玉川學園編
同　甲斐豐
同　關寛之
同　五十嵐力
同　岩藤雪夫
同　佐富武雄
同　福師附屬編
同　坂下校編
同　西條八十編
同　岩波刊行
同　秋田喜三郎編
同　厚生閣編
同　古見一夫編
同　東高師附屬編
同　平凡社刊行
同　田邊尙雄編
橘　正一

昭和十二年十月十三日印刷
昭和十二年十月廿六日發行（非賣品）

福島縣河沼郡堂島尋常高等小學校
編纂者代表　和田博

福島縣河沼郡堂島尋常高等小學校
發行者　和田博

福島縣河沼郡坂下町字市中二番甲五六六一
印刷者　猪俣一郎

福島縣河沼郡坂下町字市中二番甲五六六一
印刷所　猪俣印刷所

發行所　福島縣河沼郡堂島尋常高等小學校